〔稿本表紙〕

明治元年
二　月　忠義公史料　二

〔稿本にて補正〕

四三　太政官代へ親臨アルヘキ旨ヲ達セラル

明治元年二月一日、　天皇明後三日ヲ以テ、太政官代ヘ親臨アルヘキ旨ヲ達セラル、其ノ達文左ノ如シ、

今般御一新ニ付、明後三日辰刻、二條城太政官代ヘ御親臨被為在候旨、被仰出候事、

但

行幸之義、総テ御軽便ヲ主ト被遊、月中数ケ度御親臨之

思召ニ候間、猥リニ供奉等不相願様、兼テ申達候事、於武官モ供ハ堂上同様、侍二人・僕両人可召連事、

二月朔日

四四　岩倉具視親征ノ策略上申ヲ大久保ニ命ス

コノ日、岩倉前中将書ヲ大久保利通ニ贈リ、親征ノ策略ヲ上申スベキヲ命ス、利通西郷隆盛ト協議ノ上答申セリ、

大久保利通日記

二月
朔日

一岩倉公ヨリ御紙面到来参殿、追討一条策略書取差上候様御沙汰ニテ、西郷談合相認、

御所へ罷出差上ル、

三條公(実美)・東久世公(通禧)・宇和島公(伊達宗城)江、備前御所置一条急速相運候様言上、明日日置帯刀御呼出、弥御達之筋御治定ニテ、草案相認候様就御達、書取差上候、

四五 小松帯刀島津久光ノ名代トシテ天機ヲ伺フ

コノ日、藩老小松帯刀久光名代トシテ二條城ニ出頭シ、天機ヲ伺ヘリ、

小松帯刀日記

二月一日　雨

一未明五代・有川問合、浪花ヨリ相達候、

一未明新納家・伊地知出立ノ事、

一十字過ヨリ中将公御使者トシテ、太政官代二條城江、御留守居内田仲之助同伴、天気御伺相勤、非蔵人松室丹波江申置、同刻過帰宅、

四六 新納久脩・伊地知貞馨・奈良原繁等帰藩ノ途ニ就ク

コノ日、新納刑部・伊地知貞馨・奈良原繁帰藩ノ途ニ就ケリ、

大久保利通日記

〔朔日〕

一今朝刑部（新納）殿・伊地知（壮之丞）・奈良原（幸五郎）等帰国、書状今夜相認差出候事、

四七 太政官ヘ臨幸アルヘキ旨ノ回覧

二日、松平慶永ヨリ御親征昨日決定、明日太政官ヘ臨幸、此儀勅命アルベキヲ、徳大寺大納言〔実則〕ヨリ達セラレタル旨ヲ報スル回覧ニ接ス、

回覧

徳川慶喜　御追伐之為、　御親征被　仰出候段、昨朔日御決定候、尚明三日　太政官ヘ臨幸、巨細被　仰出候由、此趣申入候様、徳大寺大納言被申聞候、御回覧済早々可返給候也、

二月二日　〔松平〕慶永

〔伊達宗城〕宇和島少将殿承知

〔山内豊信〕土佐前少将殿

〔島津忠義〕薩摩少将殿承知

〔浅野長勲〕安芸新少将殿

〔護久〕細川右京大夫殿承知

四八 小松帯刀・大久保利通総裁局顧問任免

又小松帯刀徴士・参与職・総裁局顧問ヲ命セラレ、同顧問・参与大久保利通ノ同顧問ヲ解カル、

四八ノ一

小松帯刀

徴士・参与職・総裁局顧問被仰付候、

慶應四辰年二月　　総裁印

四八ノ二

大久保一蔵

総裁局顧問辞退被聞届候事、

四九 西郷隆盛ヨリ大久保利通ヘ徳川慶喜追討ニツキ書翰

西郷書翰

只今別紙相達申候、慶喜退隠之歎願甚以不届千万、是非切腹迄ニハ参不申候てハ不相済、必越・土抔よりも寛論起候半欤、然れハ静寛院(和宮)と申ても、矢張賊之一味と成りて、退隠位ニて相済候事と被思食候ハヽ、無致方候付、断然追討被為在度事と奉存候、かく迄押詰候処を寛ニ流候てハ、再ほそをかむとも無益訳ニ至り候半、例之長評議ニ因循を積重候てハ、千載之遺恨と奉存候間、何卒御持合之御英断を以、御責付置被下度、三拝九拝奉願候、以上、

二月二日

巻封

大久保一蔵様　　西郷吉之助

要詞　〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

(注意) 一月廿五日、徳川慶喜書ヲ議定松平慶永ニ致シ、老ヲ告ケ、徳川茂承ヲ以テ嗣ト為サントスルノ意ヲ陳ス、書簡中ノ別紙ハ是ナルベシ、

書翰

慶喜 相続已来、乍不及勤王之道心ヲ尽シ罷在候へ共、事々不行届、恐悚之至ニ付退隠仕、相続之儀ハ紀伊中納言(茂承)へ被仰付被下候様仕度奉存候、此段御奏聞被下候様御頼申候、以上、

正月廿五日　　慶喜

松平大蔵大輔(慶永)殿

五〇 藩庁軍賦役ヨリ東目ニ大隊ノ編制出軍

準備ヲ命ス

コノ日、藩庁ニ於テ軍賦役ヨリ東目〔大隅〕ニ大隊ヲ編制シ、出軍準備ヲナシ置クベキヲ、関係諸郷ニ達ス、

回文

辰二月二日酉下刻

一小林　一小隊　一横川　半　隊
一溝邊　一分隊　一羽月　一分隊
一大崎　一小隊　一串良　半　隊
一高山　半　隊　一末吉　半　隊
一財部　半　隊　一敷根　半　隊
一福山　半　隊

右東目

先達テ申達置候一大隊組合ニ不拘、別紙之通一大隊組合ニテ、出軍可被仰付儀モ可有之候間、兼テ其用意ニテ罷在、調練等致精究、自然出軍相達次第、急速出府相成候様、内膳殿〔町田久徳〕依御沙汰申達越、尤宿次時付ヲ以順々次渡、承知之名前引札ヲ以テ可申出候、此段申達越候、以上、

但

出軍日限ノ儀、何時カモ難計候付、人柄等能々致吟味、病気故障ノ者ハ繰替、何篇無手抜可取調置候、施条銃持合ノ者ハ可持越候、玉薬ノ儀ハ、出府ノ上可相渡候、

二月二日申刻　御軍賦役

横川　溝邊　羽月

右諸所

曖中

組頭中

五一　黒田清綱・中原猶介戦状報告

コノ日、山陰道鎮撫総督参謀黒田嘉右衛門清綱、大坂ヨリ在藩松岡十大夫ニ、京・攝間ノ事情ヲ報ス、中原猶介亦大坂落城以後ノ近況、及伏見・鳥羽ノ戦果ヲ〔ママ〕ニ報告セリ、

五一ノ一

夫稲荷社は、

祖宗以来御当家之大事件有之度ニ、霊顕不少故を以、御代々五社之一として、御尊崇有之ハ無申迄、就中慶長年中於朝鮮泗川御勝利之後、大ニ　御祭礼被遊御興

行候儀、深き　思召為有之事之由申伝候、抑此節之御勝利ハ、
天朝之御鴻福と諸人之勉力ニ依候得共、偶然初戦之三日は、稲荷之祭日ニ当候、夫より六戦、終ニ巨賊令落去候儀、永き　御当家之御嘉例と奉存候間、当御邸近辺ニおひて、島津稲荷社一宇御建立、永年御祭祀被為在度、尤是より征東　御先鋒之
勅命を御奉戴之上ハ、兵士一同之武運を御祈願候ハ、、天人共心を安定、一段勇戦可相励、是御当家御吉例ニ依テ、此節第一御興行有之度儀と奉存候、
一功薄といへとも、死者を先ニするハ武門之故実ニて、御家ニおひては、古より弔死者子孫を御恵ミ之御厚典、他ニ勝候儀ニ付、此節戦死之輩にも、先ツ家督並嫡子之分、跡目無高ニ候ハ、高十五石、足軽之儀ハ御切米御法之通被下置、次男以下ニ候ハ、其者家蹟別ニ被召立、右同断被下置度、且又子孫御恵等之次第、悉御先例之通被成置度御座候、
一生涯廃人相成候手負人之儀、困窮者ニ候ハ、一生家内共御養料被成下度、次ニ当時病院ニ罷在候手負之面々ニハ、聊宛養生料時々被下置度奉存候、
一賞有功ニハ速成へきは勿論、殊ニ不日東征之被為蒙
勅候儀ニ付、近日無事之内致合戦、隊々之監軍小頭之間、両人宛　御前ニ被召、各隊戦之始末委敷　御聞取、此中より戦事書と御引合せ、　御感状御手種等之御褒美、或役儀昇進等被仰付度御座候、
右ハ此内より存付罷在候得共、多端ニ取紛打過罷居候処、近日幸ニ少敷無事ニ任せ、此段奉申上候、敬白、

辰二月

右之通相認、御軍賦役頭取伊地知正治差出候事、

五一ノ二　黒田書翰

京・攝間之事情ハ、此節伊地知氏帰国ニ付、細大御聞取可被下候、就テ不費多毫、僕儀今度山陰道官軍参謀被命、正月初旬ヨリ丹波路差入、三舟(丹カ)経歴、諸城降伏セシメ、終ニ但州生野ノ銀山江攻入、代官横田新之丞ト申者ヲ放逐、暫時彼地江滞在、八万石之政令ヲ受取、旧弊改革村民安堵セシメ候、抑此生野領分ハ、金・銀・銅・鉄盛ニ産出、実ニ無双ノ福地ニテ、則壱万余石之米ト、弐万余之金ヲ得申候得共、是ハ都テ
朝廷御用ニ可差出ト之事ニテ、差送賦ニ御座候、銀山

見本石手ニ入申候間、御慰之為不取敢差上申候、其御許モ洋人御召列諸郷御廻勤候処、段々金銀之在土御探索被成得候由、御同慶奉存候、一両日跡ニ、僕モ山陽道ヲ経テ浪花迄帰着、近日中登京之賦ニ御座候、既ニ関東征伐モ相初模様ニテ、此后之形勢ハ追テ可申上、先ハ蒸気艦出帆、任幸便荒々如此御座候、謹言、

二月四日　　黒田嘉右衛門

松岡十大夫様

書添

別封一通先日認置候処、吉富八次郎殿、両日中蒸気船出帆次第帰府之段承リ、今日旅宿江見舞直左右共頼置候間、着之上御直ニ御聞取可被下、目出度カシク、

二月二日　　大坂ヨリ

宿許

二白、明日帰京之賦ニ御座候、後便ニ委細可申上候、以上、

右二月十八日朝届、左前(ママ)夕吉富八次郎殿着有之、

五一ノ三　中原書簡

伏見表諸所戦争之形行は、高崎左京(正風)下国之折、陸軍所江一通り申遣置候間、御披見可被下候、其後浪華城も弥開城ニて、一橋慶喜並會津・桑名・姫路主人は、紀州(和歌山県)加多(海部郡)之浦より蒸気船ニて敗北、其他賊徒は海陸より散々ニ逃去り、浪華江は仁和寺宮様(嘉彰親王)御下り、兵庫江は東(通禧)久世、大和路江は中山公(忠能)、姫路江は四條公(隆謌)御巡覧ニて、諸方御鎮静、拙者ニは戦争後暫時帰京、夫より亦伏見出張、諸方鎮撫、夫より下坂、又夫より兵庫着、異人館警固並石堡塔台場等相守居候処、姫路征討被仰出候付、則日同所より一分隊之人数召列、諸軍勢より三日先ニ姫路江押寄候処、城は備前勢入替居申候間、市中民家等鎮撫方諸方致所置、台場大砲並兵粮蔵等、諸方切封等いたし置、又々兵庫江罷帰同所致警固居候処、追々関東征伐有之段、相聞得候間、兵隊ハ兵庫江召置、拙者一人帰坂、大砲修覆旁、取急キ又々明日方より上京之筈御座候、

一桑名・高松・松山諸城も不残降伏、只今ニては箱根より此方ニは、は向ふ者一人も無之、関東も一橋相退ケ、別主相撰、徳川氏之家係相立候方、肝要之議論も相起り候哉ニ、取沙汰も相聞得申候間、左迄之儀も有之間

敷被察申候、不遠勝報為御知可申上候、御待居可被下候、当分官軍之勢ひ且　御国威之輝キ、御仁徳之溢候儀、実々旭之昇か如く、各国洋人迄も肝を潰し、仰キ頂キ申候外、筆ニ申上度儀も海山御座候得共、軍務更ニ暇なく、伺幸便早々如此御座候、謹言、

辰二月二日　　中原猶介〔尚勇〕

猶々大坂諸所ニて、降参之者共より承候得ハ、伏見並鳥羽筋江出張之賊徒弐万三千余、其内歩兵弐拾八大隊・會兵千人余、其外桑名・大垣・両松山・高松・鳥羽・宮津・大多喜ニ候由、伏見其外諸所之手負・死人弐千人余ニ相及候由、初日之戦味方は御国勢伏見江四百人、鳥羽江同断、其外長勢三百人余も候半、土州も少々出張相成居候得共、全役ニ立不申、是ニて味方骨折御察可被下候、廃幕之歩兵奉行若年寄竹中丹波守〔丹後守重固〕も重手負、歩兵奉行窪田備前守〔泉太郎〕も則死、同役佐久間〔信久〕近江守手負、會津之軍師林権助も伏見ニて討死之由、

一屋いた小倉に菜種子を植て後はてふ長か来てとまる

一なんほ會津之荒馬とてもくつわ一ツて乗りおとす

一今度都に大河二ツ一ツ橋ては渡られん

一六十余州に薩摩かなくハのちハ日本かからとなる

一首はなくても了簡かいゝ丈夫かまへた花井桁

一あひづ違ふて芝井か出来ぬ幕をひいきの引きたをし

一富田の名物焼蛤の飯も桑名の逃かくれ

一一つ橋への義理立をしてふたつ逃越す勢田のはし

一八ツ橋の名の三河の国も恥杜若一ツ橋

一いらぬ腕立大坂勢ひハへたを残してしふひ顔

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五二　平運丸乗組人ニ対シ褒賞

コノ日、藩庁ニ於テ軍艦平運丸ノ乗組人ニ賞ヲ与フ、

一金五両　　得能佐平次

右ハ御軍艦平運丸乗頭ニテ、此節攝海ヨリ航海之折、徳川軍艦ヨリ及砲発候処、指揮行届無難帰着イタシ候付、為御褒美右之通被成下候、

一金三両ツ、　　見聞役　鈴田與左衛門

士官　鎌田尚次郎

有川藤助　　弐人
兵士　　第一等楫取
瀬川作次郎　　弐人
渡邊軍七　　第二等右同
岩切嘉右衛門　　四人
湯地伊八郎　　第二等格右同
上野彦七　　弐人
海軍所書役　　第一等格楫取水夫勤
下河邊半蔵　　壱人
医師　　第三等格楫取右同
坂元幽齋　　弐人
右前条同断付、皆共別テ相働無難致帰着候付、為御褒美右之通被成下候、　　第三等水夫頭準大工
壱人
一金壱両宛　　第一等水夫頭　　第一等水夫
三人　　壱人
一青銅千疋宛　　第二等水夫頭御船預　　第二等水夫
壱人　　三人
右同楫取勤　　第二等格水夫
壱人　　四人
第三等水夫頭右同　　第三等水夫

六人　　弐人
第三等格水夫　　第二等格右同
四人　　三人
第三等格賄夫　　第三等右同
弐人　　七人
第三等格右同
七人
第二等水夫準加治
壱人
付役
壱人
第一等機関者
壱人
第二等格右同
弐人
機関者見習
三人
右同
壱人
第一等格火焚

右前条同断付、皆共相働無難致帰着候付、為褒美右之通為取之候、
右申渡、船中雑用金之内ヨリ可相渡候、
二月　　龍衛
〔朱〕「辰二月三日
御本文之通佐平次・與左衛門へ申渡、外人数モ両人へ名代申渡候処、難有御礼申出ル、
山内賢助」

金三百疋宛　　御小姓与
川北新九郎
伊勢勘之丞
川上休右衛門
野崎助七
伊東敬輔
河野郷左衛門

淵邊嘉兵衛
牧瀬清右衛門

右ハ御軍艦平運丸ヘ、大坂ヨリ致便船航海之折、徳川軍艦ヨリ及砲発候処、皆共相働候付、為御褒美御内々右之通被成下条申渡、御臨時方差分之内ヨリ可相渡事、

青銅五百疋　　喜入主水家来
　　四本利助

右ハ御軍艦平運丸ヘ大坂ヨリ致便船航海之折、徳川軍艦ヨリ及砲発候処、相働候付、為褒美御内々右之通為取之候条、此旨主人ヘ申渡、御臨時方差分之内ヨリ可相渡事、

右弐通之通、口達覚書ヲ以、海軍掛御用人ヘ申渡書付相渡候事、

辰二月二日　　龍衛

（島津忠義家記）

五三　幕府親征ノ勅書並ニ達書

三日、　天皇太政官代ニ臨ミ、群臣ヲ会シテ、親征ノ詔ヲ下シ、大総督ヲ置クノ議ヲ決シ、列藩ヲシテ軍備ヲ為サシム、忠義亦参会シテ議ニ与レリ、ソノ勅書並ニ達書及藩記左ノ如シ、

五三ノ一　勅書

朕、夙ニ天位ヲ紹キ、今日天下一新ノ運ニ膺リ、文武一途、公議ヲ親裁ス、国威之立不立、蒼生之安不安ハ、朕カ天職ヲ尽不尽ニ有レハ、日夜不安寝食、甚心思ヲ労ス、朕、不肖ト雖モ、列聖ノ余業、先帝ノ遺意ヲ継述シ、内ハ列藩・万姓ヲ撫安シ、外ハ国威ヲ海外ニ耀サン事ヲ欲ス、然ルニ徳川慶喜、不軌ヲ謀リ、天下解体、遂及騒擾、万民塗炭之苦ニ陥トス、故朕不得已、断然親征之議ヲ決セリ、尚已ニ布告セシ通リ、外国交際モ有之上ハ、将来之処置、尤重大ニ付、天下万姓之為ニ於テハ、万里之波濤ヲ凌キ、身ヲ以テ艱苦ニ当リ、誓テ国威ヲ海外ニ振張シ、祖宗・先帝之神霊ニ対ント欲ス、汝列藩、朕カ不逮ヲ佐ケ、同心協力、各其分ヲ尽シ、奮テ国家ノ為ニ努力セヨ、

五三ノ二　達書

今度、慶喜以下賊徒等江戸城ヘ遁レ、益暴逆ヲ恣ニシ、四海鼎沸、万民塗炭ニ堕ムトスルニ忍ヒ給ハス、　叡断ヲ以　御親征被　仰出候、就テハ御人撰ヲ以、被置

大総督候間、其旨相心得、畿内七道大小藩、各軍旅用意可有之候、不日軍議御決定可被　仰出御旨趣可有之候間、御沙汰次第奉命馳集ルヘク候、宜諸軍戮力、一同勉励、可尽忠戦旨、被　仰出候事、

二月三日

五三ノ三　藩記

参考

昨三日辰之刻、二條城太政官代江主上臨幸被　仰出、宮・三公・堂上・諸侯様供奉、　太守様ニは御衣冠ニて、卯刻御供揃御先ニ御上り被遊候、主上酉下刻　還幸被為在、　太守様御跡より御下り、直様御参　内櫻之間上江御扣、　天気御伺被為済、直ニ　御帰殿被遊候、

右之通今日御供私相勤申候間、此段申上候、以上、

辰二月四日　　内田仲之助

伊勢様

追テ本文ニ付、中将様被遊御承知候上、参与様方迄以御飛札　天機御伺被為済、直ニ御帰殿被遊候、右ニ付中将様承知ノ上、参与衆迄以御飛札　天機御伺可被仰上哉ノ旨申出、御留守居申出、中将様へ被奉伺、其通被仰出候ハヽ、御右筆頭へ被相達御書被差越度、左候ハヽ、日積ノ上被差出候様、取扱可仕候、此段申越候、以上、

但臨幸ニ付、室町通外四ケ所辻々御固メ被仰出候付、手当申渡則召、前以兵隊人数被差出候、別紙相添此段ハ為御心得ニ候、

辰二月十七日　　關山糾（金生）

島津圖書（久治）殿

桂右衛門（久武）殿

川上龍衛（久鮮）殿

町田内膳（久憲）殿

五四　朝廷職制ヲ改ム

朝廷職制ヲ改メテ、三職七科ヲ総裁局及ヒ神祇・内国・外国・軍防・会計・刑法・制度ノ七局ト為シ、総裁局ニ正・副総裁及ヒ輔弼・顧問・弁事・史官等ヲ置キ、七局ニ督・正権輔・正権判事等ヲ置ク、

職制

三職

総裁職（宮任之、副総裁・公卿・諸侯任之、）

万機ヲ総ヘ一切ノ事務ヲ裁決ス、

議定職宮・公卿・諸侯任之、

事務各課ヲ分督シ、議事ヲ定決ス、

参与職公卿・諸侯・徴士任之、

事務ヲ参議シ、各課ヲ分務ス、

八局

総裁局

神祇事務局

神祇・祭祀・祝部・神戸ノ事ヲ督ス、

内国事務局

京畿庶務及諸国水陸運輸・駅路・関市・都城・港口・鎮台・市尹ノ事ヲ督ス、

外国事務局

外国交際・条約・貿易・拓地・育民ノ事ヲ督ス、

軍防事務局

海軍・陸軍・練兵・守衛・緩急軍務ノ事ヲ督ス、

会計事務局

戸口・賦税・金穀・用度・貢献・営繕・秩禄・倉庫及商法ノ事ヲ督ス、

刑法事務局

監察・弾糺・捕亡・断獄・諸刑律ノ事ヲ督ス、

制度事務局

官職・制度・名分・儀制・選叙・考課・諸規則ノ事ヲ督ス、

総裁局

総裁　一人（総裁職官任之、）

副総裁　二人（議定職公卿・諸侯任之、）

輔弼　二人（議定職宮・公卿任之、）

顧問　（無定員参与職徴士任之、）

弁事　四人（参与職公卿・諸侯・徴士任之、）

史官　六人（徴士・吏任之）

筆生　十二人（吏任之、）

官掌

神祇事務局

督　一人（議定職宮・公卿・諸侯任之、）

輔　二人（議定職公卿・諸侯任之、）

権輔

判事　四人参与職公卿・諸侯・徴士任之、
権判事
書記　吏任之
筆生
局掌
司
頭　一人公卿・徴士任之、
助　一人徴士・吏任之、
属
内国事務局
外国事務局
軍防事務局
会計事務局
刑法事務局
制度事務局
議定中山忠能・正親町三條實愛ヲ以テ輔弼ヲ兼ネ、
参与萬里小路博房ニ制度事務局輔ヲ兼ネシム、

五五　元治元年以後ノ警備ト、慶應三年十二月以来宿衛徴発ノ兵員及ヒ在藩ノ兵数等ヲ録上ス

コノ日、朝廷諸藩ニ令シ、元治元年以後諸国ノ警備並ニ慶應三年十二月九日以来、京都宿衛徴発ノ兵額及ビ在藩ノ見兵等ヲ録上セシメラル、我藩ノ上書左ノ如シ、

五五ノ一　本藩上申書

一去ル子年以来、
禁闕御守衛人数凡千人余相詰居、其後追々相重申候、
一持場乾御門、
一去卯年十二月九日以来、
御所六門内御警衛並伏見・鳥羽・淀・八幡・橋本より、大坂出張、且丹波路・兵庫・大和辺江分勢交代等申付候総兵士弐千五百二十四人、
右之内
一司令士八拾四人
一銃隊四大隊と二小隊
一大砲四座
外ニ附属七百弐拾八人
一当時国許在家兵士凡二万人余
右は去ル子年以来、

御警衛持場、又は去年十二月九日以来同断、其外出先兵隊人数等、且当時国許在家兵士員数御用御見合相成候間、早々可申上旨被仰渡趣拝承仕、取調申候処、右之通御座候、此段申上候、以上、

薩摩少将内　　内田仲之助

二月六日

（慶明雑録にて校訂）

五五ノ二　留守居届書

去ル子年ヨリ以来、諸国御警衛云々之儀、右ハ今四日、御用之儀有之候間、太政官代へ罷出候様、軍務掛ヨリ被申渡候付、申入候旨書記役所ヨリ廻状相達、罷出候処、参与助役坊城侍従様ヨリ、右二通被成御渡、御請書差上候様、被仰聞候間、可申上旨申上置候、右之通私共差支、御留守居付役隈元敬一郎相勤候付、此段申上候、以上、

二月四日　　内田仲之助

伊勢様

追テ御請書之儀ハ、主人ヨリ可差上候、在国之面々ハ、重役共ヨリ不取敢可申上候旨、被仰聞候、

五六　島津忠義親征奉命書ヲ奉ル

五日、忠義　御親征奉命書ヲ奉ル、後十七日ニ至リ、在京家老ヨリコノ旨ヲ在藩家老ニ報ゼリ、

五六ノ一　奉命書

今度慶喜以下賊徒等、江戸城江遁れ、益暴逆を恣にし、四海鼎沸、万民塗炭ニ堕むとするニ不被為忍、叡断を以

御親征被

仰出、就ては不日御軍議　御決定可被

仰出

御旨趣可有之候間、

御沙汰次第奉命可馳集旨、被

仰出趣謹て奉拝請候、此段御執

奏可被下候、以上、

二月五日　　薩摩少将

留守居届書

御書付一通

但

今度慶喜以下益暴逆付、

御親征被　仰出候付、御請之儀

御官名

右は今日太政官代江持参、軍務掛非蔵人松室豊後江差出候処、慥ニ致落手候旨申聞候、

右之通今日私共差支、御留守居付役遠武橘二相勤申候間、此段申上候、以上、

辰二月五日　　内田仲之助

伊勢様

五六ノ二　報知書

去ル四日御用之儀候間、太政官代江罷出候様相達、御留守居付役隈元敬一郎罷出候処、今度慶喜以下賊徒等江戸城江遁レ、益暴逆を恣にし、四海鼎沸万民塗炭に墜むとするに不被為忍、

叡断を以　御親征被　仰出、就ては御軍議御決定可被仰出

御旨趣可有之候間、

御沙汰次第奉　命可馳集旨、

御別紙之通被

仰出候付、達

貴聞、御請書別紙写之通、翌五日軍務掛非蔵人松室豊後江被差出候、依之一統奉承知、

御沙汰可奉待旨、向々江申渡候、此段申越候条、

中将様被達

御聴、其許申渡之儀は、何分も可被取計候、以上、

但去ル子年以来、諸国御警衛等之儀可申出旨、是又

被　仰出候付、

御官名内御留守居名前を以、別紙写之通被差出候、

此段為御心得候、

辰二月十七日　　關山糾（金生）

嶋津圖書（久治）殿

桂右衛門（久武）殿

川上龍衛（久範）殿

町田内膳（久憲）殿

〔慶明雑録にて校訂〕

五六ノ三

今度慶喜以下益暴逆付、　御親征被　仰出、就テハ

御沙汰次第奉命可馳参旨、被　仰出候付、御請書被差出候段ハ、別段申越通ニ候、然ル処去ル六日太政官代軍務掛ヨリ可罷出旨御達ニ付、御留守居付役永山左内（盛輝）罷出候処、今度　御親征ニ付、東海道・東山両道　御

先鋒之儀被為蒙　勅命、左候テ　御軍艦一艘御用被
仰付、且右同断付、医師召連病院相立候様ト之儀、御
別紙之通
勅書三通、東園中将様ヨリ御渡相成、尤　御親征ニ付、
両道之出兵休泊附是亦被　仰渡候付、達　貴聞、向々
御手当向等之儀早々申渡、東海道筋総督相良治部〔長発〕、差
引西郷吉之助〔隆盛〕へ、東山道総督島津式部〔久之〕、差引伊地知正治
へ被　仰付、就テハ兵隊之儀、一番隊ヨリ三番隊迄東
海道へ、四番隊ヨリ六番隊迄東山道へ出兵被仰付、東
海道ハ去ル十一日、東山道筋之儀同十三日、夫々御軍
規之通繰出シ相成、出兵被　仰付候、左候テ　御親征
ニ付、銃隊砲司令士並持夫等書出候様、是亦被
仰出候付、両道へ出張之人数御届書、別紙写之通、被
仰上候、右ニ付
勅書三通　御書附一通、且御届書並出兵人数名書、都
テ相添此段申越候条、
中将様可被達
御聴候、左候テ、御軍賦役頭取等被相達、向々申渡之
儀ハ、何分モ御吟味次第御取計可被成候、以上、
但
御軍艦御用之儀ニ付テハ急速御手当向之儀、滞坂
小松帯刀へ、早便其許へ被申越候様申越候付、ヲ
ノツカラ為相達筈ト存候、此段ハ為御心得ニ候、
辰二月十七日　　關山　糺
島津圖書殿
桂　右衛門殿
川上龍衛殿
町田内膳殿
島津忠義家記

五七　西郷隆盛ヨリ大久保利通ヘ書翰

コノ日、西郷隆盛書ヲ大久保利通ニ贈リテ、東征〔マヽ〕ノ議速
ニ決行セラレンコトヲ勧告ス、ソノ書簡左ノ如シ、

西郷書簡

巻封　　大久保様　　西郷拝

要詞

今日も御安康可被成御座、珍重奉存候、随て少弟昨夕
より風邪気ニて、頭痛いたし声も淵居候、乍然格別之
事ニも無之候間、岩倉卿御着相成候ハヽ、左様條公江

御談合相成候処、偏御願申上候、時日を移候てハ、当地之風習ニて、皆々遷延成安ク御座候間、いまた気合之抜ケさる内ニ議論不相定候てハ、不思不知余所ニ成行候付、宜敷御都合可被成下候、おのつから明朝ハ罷出候様可仕候、

一解緒之掛物頂戴難有、何卒御遣可被下候、得と拝見可仕候、

一写真都て御遣可被下候、

一兼光之刀ハ何卒頂戴仕度、淺右衛門之所持ハ、決て御用ひ不宜候付、御譲り可被下候、左候へハ陳元輔ハ弥上通之物到来可申候、

〔明治四年カ〕二月五日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五八　戊辰ノ役戦死傷者ノ人員・葬式料ニ関スル藩庁達示

藩庁ニテハ、伏見其他ノ諸所ニ於テ、戦死・負傷シタル人員ヲ告示シ、戦死シタル者ノ遺族ニハ、朝廷ヨリ葬式料ヲ下賜セラレ、鬢髪ヲ渡スベキ旨ヲ、軍賦役ヨリ達セシム、

達示及人員

此度伏水其外諸所ニヲイテ、戦死手負之人数、別紙之通申来候条、銘々親類等へ可申渡旨、御軍賦役へ可申渡候、

但鬢髪ハ、御軍賦役ヨリ親類へ可引渡候、尤法号別紙之通ニ候間、是又可申渡候、

二月　　右衛門

〔朱〕「辰二月五日、御本文之通御軍賦役へ申渡候、　　市來六左衛門」

別紙

金五拾両ツ、

篠崎勘七
加治木清之丞
平岡彦九郎
野村清兵衛
伊集院金次郎
岩山佐平太
溝口雄四郎
堀　矢之助
中原八郎

鮫島十郎兵衛
肥後嘉次
椎原小彌太
市來勘兵衛
中島彌次郎
四本佐平次
平川助左衛門
大場軍輔
伊東強右衛門
入佐助八
伊集院與市
大河平壯之助
西藤次郎
橋口彦四郎
藤崎甚四郎
柳田藤左衛門
前谷宗智
田中直次郎
有川嘉吉郎
家村彦五郎

堅山卯一郎
川西與十左衛門
鎌田尚園
大山源右衛門
白尾孫兵衛
濱田才之丞
江口幸右衛門
福田喜左衛門
宅間壯左衛門
肥田雄太郎
山田孫一郎
上村戸右衛門
村尾十次郎
赤井清心
竹下平左衛門
關十郎左衛門

一金三拾両

石神万右衛門下人
太郎

右ハ今般伏水其外諸所ニヲイテ致戦死候付、為葬式料、

右之通被成下候条、親族等へ可申渡旨、御軍賦役へ可申渡候、

但右ニ付テハ、

勅書賜金等モ有之候付、追テ頂戴可被仰付候付、

其段モ可致内達置候、

二月　右衛門

〔朱〕「辰二月五日御本文之通、御軍賦役へ申渡候、　市來六左衛門」

別紙

加治木清之丞　三十五歳　勇執義節居士

野村清兵衛　二十一歳　勇道義烈居士

岩山佐平太　二十三歳　義山貫徹居士

堀　矢之助　二十七歳　鐵山義融居士

加世田

鮫島十郎兵衛　三十九歳　彦魁義節居士

椎原小彌太　二十九歳　義道壮勇居士

中島彌次郎　二十三歳　忠道大勇居士

平川助左衛門　二十六歳　節道義楽居士

伊東強右衛門　二十五歳　貞忠勇義居士

伊集院與市　三十七歳　鐵心精忠居士

御兵具方

篠崎勘七　三十歳　忠山武烈居士

平岡彦九郎　二十五歳　忠道雄義居士

伊集院金次郎　三十二歳　頓覺忠勇居士

溝口雄四郎　二十歳　良雄忠榮居士

高岡

中原八郎　三十歳
忠峯義道居士

肥後嘉次　二十歳
大道全節居士

市來勘兵衛　三十歳
真源頓覺居士

四本佐平次　二十三歳
真覺妙恵居士

大場軍輔　二十九歳
義節精心居士

入佐助八　二十四歳
忠嶽節義居士

大河平壮之助　二十一歳
大道貫徹居士

西藤次郎　二十五歳
本源妙覺居士

足軽

藤崎甚四郎　二十五歳
壮勇鐵道居士

前谷宗智　十九歳
確忠大勇居士

鹿籠

有川嘉吉郎　二十二歳
勇道剛義居士

竪山卯一郎　二十歳
一貫忠道居士

鎌田尚園　十九歳
良観妙道居士

白尾孫兵衛　二十四歳
義山勇烈居士

都城

江口幸右衛門　三十四歳
誠心貞忠居士

宅間壮左衛門　二十二歳
真覺浄榮居士

山田孫一郎　二十七歳
大勇義貫居士

知覧

村尾十次郎　二十歳
秀嶽義溪居士

御兵具方足軽

竹下平左衛門　二十三歳
真性義覺居士

橋口彦四郎　三十五歳
精忠義觀居士

柳田藤左衛門　二十五歳
玄道大覺居士

田中直次郎　二十五歳
忠徹義嶽居士

家村彦五郎　二十八歳
忠嶽實相居士

川西與十左衛門　二十一歳
義嶽大雄居士

大山源右衛門　二十二歳
精忠威烈居士

都城

濱田才之丞　三十歳
貞良義英居士

福田喜左衛門　二十歳
大道真空居士

都城

肥田雄太郎　二十六歳
妙道雄烈居士

御兵具方足軽

上村戸右衛門　二十歳
孝山貞榮居士

赤井清心　二十一歳
知覺清心居士

關十郎左衛門　二十一歳
圓融義山居士

石神万右衛門下人

太郎　十五歳
雄貞信士

傷

飯牟禮喜之助
汾陽尚次郎
大脇源次郎
奈良原源之丞
古藤新之助
伊地知彌兵衛

山ノ内半左衛門
高城十左衛門
蒲生彦四郎
町田仲次郎
加世田彌右衛門
時任金左衛門
押川喜右衛門
日高壮之丞
平野甚助
隈元清五郎
青山源七郎
尾上伊八郎
吉田彦五郎
中村龍五左衛門
市來喜之助
益満新七郎
廣瀬喜兵衛
川上孫七
指宿静蔵
黒川伊左衛門

山ノ内半蔵
相良藤太郎
川田作左衛門
川田武兵衛
畠山孫左衛門
鎌田甚之丞
川田宗之助
相良八郎兵衛
長崎尚五郎
松崎壮八
小川喜兵衛
貴島勇右衛門
伊地知惣吉
指宿一次
西郷新吾
有村國彦
川上喜兵衛
小山嘉太郎
富山彌兵衛
丸田仲之丞

明治元年(1868)

三樹三郎
宮ノ原孫左衛門
染川彦左衛門
徳尾源七郎
奥良之丞
餅原平次郎
若松彦八
川上宗次郎
久保竹之介
伊佐敷彌一郎
帖佐次郎
相徳四郎兵衛
高城吉蔵
重信良右衛門
平野平次郎
江平仲兵衛
高城休之進
四元才之丞
長谷川龍助
北川太介

川上萬助
井上助右衛門
松元直之丞
坂元彦兵衛
柴山矢八
有川二平太
伊藤権平
佐土原八郎
猿渡加右衛門
四本十左衛門
新納宗右衛門
伊集院彦左衛門
尾上為八郎
有馬彦七
濱田郡左衛門
宇宿彦之丞
有馬清一
端山彦左衛門
長野仲之丞
平田彦五郎

尾上門次郎
田中源蔵
山口良之丞
四本喜之助
大山一次
迫平八
竪山半次郎
西六郎兵衛
新穂加藤次
宮内雄蔵
安田平内
肥田藤吉
大峯勘十郎
瀬尾助五郎
貴島卯太郎
山口新吾
原田嘉右衛門
日高郷左衛門
神宮司仙之助
桐野藤太郎

小倉愛之助
税所藤之助
永吉徳次
相良壮五郎
梅北龍太郎
兒玉八次
土師孫一
肝付十郎
家村十郎右衛門
池水為右衛門
高橋庄之進（丞カ）
永田龍五郎
吉峯關助
岸良壮兵衛
河野喜次郎
佐藤賢助
吉田喜蔵
四本助十郎
安藤直五郎
河崎休右衛門

税所清之助　善助
鮫島雄四郎　松岡祐右衛門
税所雄之助　竹内宗之丞
永田彦兵衛　従兵上野十五郎
有馬春齋　夫卒　喜兵衛
東郷勇助　兵具大垣足軽一人
中村九之丞　仝夫卒　五人
吉井七之丞
山澤鐵之進
梶原矢五郎
和田軍吉
永田幸四郎
永山林仙
大久保誠助
西紋五兵衛
前田正之進
東郷次郎作
兒玉平次郎
西剛右衛門
夫卒柴山徳次郎

五九　先鋒総督兼鎮撫使改称ト本藩及ヒ長州等二十二藩ニ出兵ヲ命セラル

六日、此度御親征ニ付、東海・東山・北陸三道ノ鎮撫使ヲ、先鋒総督兼鎮撫使ト改メラレ、本藩及ヒ長州・尾州・紀州・肥後・備前・津・土佐等、二十二藩ニ出兵ヲ命セラレ、更ニ本藩及ヒ長州・肥前・土佐・久留米ニハ、各軍艦一艘ヲ、筑前及ヒ藝州ニハ蒸気船各一艘ヲ差出スヘキヲ達セラル、ソノ本藩ニ関スル書類左ノ如シ、

五九ノ一　出兵命令

薩摩少将

今般

御親征被
仰出候ニ付テハ、東海・東山両道之先鋒被
仰付候条、国力相当人数差出、諸事総督之指揮ヲ請、
令勉励候様
御沙汰候事、
二月六日
但十五日迄ニ、東海道ハ桑名江、東山道ハ総督本陣
江出張可有之様、
御沙汰候事、

五九ノ二　軍艦徴発令　薩摩少将

此度
御親征被
仰付候ニ付、其藩持合之軍艦一艘、
御用被
仰付候条、諸事総督之指揮ヲ請ケ、勉励可致
御沙汰候事、
二月六日
但二月十五日ヨリ二十日迄之間、兵庫港着碇之上、
早速太政官代軍務局へ届出候様、被仰出候事、

六〇　海陸軍務局ヨリ出張各藩へ出兵人数届出ト相応ノ医師ヲ差出シ病院ヲ建テシム

又征東出張ニ付、海陸軍務局ヨリ出張各藩へ、節約ヲ旨トシ、且左記雛形ニヨリ、総督所並ニ太政官代軍務掛ニ届出デ、又人数ニ応シ、医師ヲ出シテ病院ヲ建テシム、
本藩ニテハ八日届出ヲナセリ、ソノ書類左ノ如シ、
六〇ノ一　征東出張　藩々

一銃隊・砲隊之外、用捨之事、
一隊長司令輜重掛等、実地要務之外冗官用捨之事、
但其主人之儀ハ、在京不苦候事、
一無用之衣類、雑具類持参用捨之事、
右之通被　仰出候条、
総督所ハ勿論、
太政官代軍務掛江別紙雛形之通、早々附出候様
御沙汰候事、
二月　海陸軍務局

雛形

一銃隊　何人
一右役付　何人
一砲　何挺
一右司令砲手共　何人
一持夫　何人
一以上何百千人

右ハ今般何々道出張申付候分、前書ノ通御座候、以上、

何之何某

東海道先鋒記
北陸道先鋒記

六〇ノ二

先鋒

出張藩々

此度

御親征ニ付、各藩人数ニ応シ医師召連、陣営ニテ各医打寄病院相立、療治之手当可致候様、可相心得、

御沙汰候事、

二月

東海道先鋒記
北陸道先鋒記

六〇ノ三

申付

前田杏齋〔元温〕

一其方儀、今般　御親兵被為立候付テハ、病院医師被仰付候間、万端厚相心得、精々勉励可致者也、

二月

六〇ノ四

留守居届書

書附一通

但去ル子年以来、御守衛且去卯十二月九日已来、分勢出先等申出候儀、私名前

右ハ今日太政官代ヘ持参、軍務掛非蔵人松室豊後ヘ差出候処、慥ニ致落手候旨申聞候、

右之通今日私サシ支、御留守居付役勤永山左内相勤申候間、此段申上候、以上、

辰二月六日　内田仲之助

伊勢様

六一　島津忠義外五名連署シテ外交ノ規模ヲ宏ニシ、各国使臣ノ入朝ヲ建議ス

七日、忠義、松平慶永・山内豊信・毛利元徳・淺野長勲

細川護久ノ各議定ト連署シテ、書ヲ総裁熾仁親王（有栖川宮）ニ上リ、外交ノ規模ヲ宏ニシ、外国公使ヲシテ参朝セシメンコトヲ建議セリ、其ノ書左ノ如シ、

建言書

臣等謹て案し候ニ、古之能く天下の大事を定め候者ハ、必先ツ天下の大勢を観て、緩急機に従ひ所置宜を得候、故に唯功徳の一時に光被するのみならす、万世不抜の業、是に於て相立候、今や

皇上始て　大統を継せ給ひ、

御政権又一に帰し、凡百の宿弊も更始一新し、天下万姓目を拭ひ、治を望むの秋なり、即在

朝の百官自ら奮発し、内は

皇上の　御徳化を輔け奉り、外は

皇威を万国に張、臣子之分を尽さん事を欲す、就中今日の急務ハ、

皇国と外国との交際を講明せすして不叶儀に奉存候、近比

朝廷始て外国事務の官職を設られ、其人を御撰挙遊されれ、専ら御力を尽され候ハ、天下の人をして、方向する処を知らしめ給はんとの　御趣意ニて

皇威を万国に赫耀せしめ候ハ、此時に可有之と不堪感銘奉存候、乍併古語にも人心不同は面の如しと申候て、在上在下の人、未た名々区々の議を執て、疑念なき事能ハす、又或は漢土人の如く、自ら尊大にして外国人を禽獣の如く蔑視せしかとも、終には彼に打負、却て駆使せられ候様に成行き候覆轍を践むに至るへき欤と、甚憂慮仕候、依て熟考仕候処、今日之先務は上下協同一和し、宇内の形勢を弁し、

皇国一大革して開業すへき所以・方向を確定すへき儀第一奉存候、是迄

皇国は一方孤立し、世界の事情に不達、只偷安を以て志とし、荏苒衰微を致し、彼か為に制せらるへき次第に立至候と、外国の他邦に航行し、衆善を包取気運日々に開け、政治・文明・兵食充備し、天下に縦横致し候と比較致し見候得ハ、盛衰之原由も判然相分り可申哉と奉存候、元より膺懲の重典も無くて不叶儀にハ候得共、控御之術其方を得候へハ、遠人を懐き服し候道理にて、尤無罪の人を膺懲致し候訳には無之候、中古、朝廷にも玄蕃の官を置せ給ひ、鴻臚官を建させられ、遠人を

御綏服被成候事も相見得居、其後天正・慶長之間には、蛮夷共屢西国に渡来、交易致し候、若其来港不致節は、大将軍より書簡を遣し催促し、猶遅緩に及候時には、此方より大軍を発し、攻撃に可及なそと申遣候儀も有之候処、島原の一乱以来、始て幕府より鎖国の令有之候、乍併漢土・和蘭に於てハ猶交易差許候得ハ、一切に外国人ハ攘ひ斥け候と申訳には、更に無之処、近年攘夷之論盛に相起り、諸侯之内偶攘斥致し候も有之候得共、素より一国之力を以不可為は論するに足らす、且先年幕府より、十年を期して成功を奏し可申抔申上候は、陽に其名を仮り、陰に其私を行ひ候詐術にて、先帝日夜
御苦慮被為遊候御儀とハ、同年之論に無之と奉存候、然れは今日
皇国之衰運を挽回し、
皇威を海外に耀し奉り候儀ハ、万々一刀両断之
朝裁を以、井蛙管見之僻論を去り、先ツ在
廷枢要之御方々より
御豁眼に被為成、上下同心して交際之道、無二念開せられ、彼か長を取り、我か短を補ひ、万世之大基礎相据られ候様、奉専禱候、仰願くハ
皇上の　御英断能く天下之大勢を　御観察被為遊、是迄犬羊戎狄と相唱候愚論を去り、漢土と斉しく視させられ候
朝典を一定せられ、万国普通之公法を以、参
朝をも被命候様、御賛成被為在、其旨海内江布告して、永く億兆之人民をして、方向を知らしめ給ひ度儀と偏に奉懇願候、誠恐誠惶頓首々々、

二月七日

越前宰相
土佐前少将
長門少将
薩摩少将
安藝新少将
細川右京大夫
(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

六二　本藩以下二十六藩ニ令シテ天領ヲ管理セシム

コノ日、朝廷、本藩以下二十六藩ニ令シテ、東海・東山・

山陽・山陰・南海・西海諸道旧代官ノ支配地ヲ管セシム、本藩ハ、日向国元郡代窪田治部右衛門ノ支配地ヲ管セシメラレ、越エテ十七日藩老ニ通知セリ、ソノ書類左ノ如シ、

六二ノ一　命令

薩摩少将

右日向国元郡代窪田治部右衛門〔鎮勝〕支配地〔細島〕、今般御領ト相成候間、取締被仰付候、即今形勢ニ付、民心方向ヲ失ヒ、多端之苦情訴出、御治定之御処置ハ、追テ御達可有之候得共、差向人民安業貢米等之儀、無滞相運候様取計、早々太政官代ヘ可申出候事、

但

取締被　仰付候

御領之内、年貢残穀並高辻帳早々取調、内国会計両裁判所ヘ可差出事、

一御領所用向為取扱候役人両三人、在京候様可致事、

一駅々乱妨強盗ハ、人民ヲ掠シ、困苦ニ迫リ候場所モ有之由相聞候間、早々人数差出取鎮候様被仰出候、

六二ノ二　留守居届書

御書付一通

但

日向国元郡代窪田治部右衛門支配地、御領ト相成候付、御取締被為仰付候御儀ニ候、

非蔵人

松室信濃

右ハ今日御用之儀御座候間、太政官代江罷出候様、内国掛衆被申渡候旨ニテ、書記役所ヨリ廻状相達、私被差出候処、右信濃御書付之通、御沙汰候旨申聞被相渡申候付、可申上旨申述置候、左候テ、御請書御差出相成候様、是又右同人申聞候、御書付差上申候、

右之通今日私共差支、御留守居付役赤井直之進相勤申候付、御書付相添此段申上候、以上、

辰二月七日　　内田仲之助

伊勢様

六二ノ三　藩吏通牒

去ル七日御用之儀候間、太政官代江罷出候様、内国掛衆より被申渡候付、御留守居付役赤井直之進被差出候処、日向国元郡代窪田治部右衛門支配地、　御領と相成候付、御取締被仰候旨、被為蒙勅命候付達　貴聞、別紙之通、御請書太政官代江持参差出候処、非蔵人松室信濃致落手候旨申出候、此段申越候条、年貢残穀並高辻帳等取しらへ相成候儀は、於其許御吟味次第被取計、何分も可被申越候、尚委細之儀本田李兵衛江申含越候、以上、

辰二月十七日　　關山　糺

島津圖書殿
桂　右衛門殿
川上龍衛殿
町田内膳殿

【参照】

(記)

同日、本藩以下二十六藩ニ令シテ、東海・東山・山陽・山陰・南海・西海諸道旧代官ノ支配地ヲ管セシメタリ、其藩名ヲ左ニ載ス、

日向元郡代地
肥後同
豊前同
豊後同
肥前同
筑前同
右西海道
越前元代官地
飛騨同
右東山道
石見元代官地
丹波同
近江同
右山陰道
備後元代官地

(島津忠義、薩州藩主)薩摩少将
細川越中守(昌服、中津藩主)
奥平大膳大夫(慶順、熊本藩主)
中川修理大夫(久昭、岡藩主)
久留島伊豫守(通靖、森藩主)
松浦肥前守(詮、平戸藩主)
松平主殿頭(忠和、島原藩主)
黒田甲斐守(長徳、秋月藩主)
松平越前守(茂昭、福井藩主)
土井能登守(利恒、大野藩主)
毛利大膳大夫(敬親、長州藩主)
青山左京大夫(忠敏、篠山藩主)
松平圖書頭(信正、丹波亀山藩主)
加藤能登守(明実、水口藩主)
市橋下総守(長和、西大路藩主)
最上駿河守(義連)
阿部主計頭(正方、福山藩主)

播磨同　　脇坂淡路守（安斐、龍野藩主）

美作同　　森美作守（忠典、赤穂藩主）

備中同　　三浦備後守（弘次、美作勝山藩主）

右山陽道　　蒔田相模守（広孝、浅尾藩主）　　關伊勢守（長克、新見藩主）

伊勢元代官地　　石川宗十郎（成之、伊勢亀山藩主）

美濃同　　土方雄千代（羅永、菰野藩主）

右東海道　　松平範次郎（義勇、高須藩主）

讃岐元代官地　　青山峯之助（宰冥、郡上藩主）

京極佐渡守（朗徹、丸亀藩主）

六三　内田政風ヨリ島津伊勢ヘ神戸事件ノ処分ニ付キ書翰

又コノ日、曩時備前藩士ノ神戸ニ於テ、外国人居留地ヲ砲撃シタル者ノ処分ノ件ヲ達セラル、ソノ書類左ノ如シ、

六三ノ一　通達書

備前家老日置帯刀（忠尚）、去月十一日神戸通行之砌、外国公使ニ対シ、発砲致候ニ付、於朝廷以公法御所置、号令致候士官（滝脇善三郎正信）死罪、帯刀謹慎被仰付候間、為心得申達候事、

六三ノ二

備前家老日置帯刀神戸通行之砌、外国公使ニ対シ発砲致候ト之儀付、太政官代ヨリ之御廻達、久留嶋伊豫守様衆ヨリ致到来候付、本書ハ内藤備後守様衆江致順達、写相添此段申上候、以上、

辰二月七日　　内田仲之助

伊勢様

六四　戦亡者遺族ニ役料跡扶持ヲ給スル藩庁達書

コノ日、藩庁ニテハ、戦亡者遺族ニハ何分ノ令達アル迄ハ、役料跡扶持ヲ給スルコトヲ達ス、ソノ書類左ノ如シ、

達書

此節伏見其外於諸所戦死之面々、追テ何分申渡迄之間ハ、御役料米ハ勿論、跡扶持米被下置候向ハ、都テ是

迄之通被下置候条、向々へ可申渡候、

二月　　右衛門

六五　本藩並ニ金澤等二十四藩ニ諸藩触頭ヲ命セラル

八日、朝廷本藩並ニ金澤・仙臺等ノ二十四藩ヲ以テ、各々其ノ近傍諸藩ノ触頭ト為シ、政令ノ伝達ヲ迅速ナラシム、本藩ハ、日向国内四藩及ヒ對馬国宗家五藩ノ触頭ヲ命セラル、其ノ書左ノ如シ、

六五ノ一

内藤備後守〔政挙、延岡藩主〕
伊東右京大夫〔祐相、飫肥藩主〕
秋月長門守〔種殿、高鍋藩主〕
島津淡路守〔忠寛、佐土原藩主〕
宗對馬守〔重正、対馬府中藩主〕

右五藩触頭被仰付候旨、非蔵人松尾伯耆ヲ以、被仰渡候事、

六五ノ二　留守居届書

御書付一通

但内藤備後守様外御四藩様御触頭之儀、

非蔵人　　松尾伯耆

右は今日太政官代ニて、御別紙之御方々触頭被仰付候旨、伯耆申聞候付、御請申出置候、

右之通今日私共差支、御留守居付役遠武橘二相勤申候間、別紙相添此段申上候、已上、

辰二月八日　　内田仲之助

糺様

追て御五藩様江は、本文之趣を以、私共より廻達可仕置候、此段も申上置候、以上、

〔慶明雑録・島津忠義家記三にて校訂〕

六六　戊辰ノ役戦功勅書並ニ下賜金、礼状奏達、霊社建設寄進等ニ関スル書類

コノ日、藩庁ニテハ先月九日伏見其他ノ戦功ヲ賞シテ、御剣ヲ賜ヒタル勅書ト、戦亡者ニ弔慰金ヲ下賜セラレタル勅書トヲ戦亡者遺族ニ拝見セシメ、賜金ヲ分与ス、是ニ於テ諸士ヲシテ賀詞ヲ藩庁ニ上申セシメ、久光ヨリハ書ヲ大原宰相其他ニ贈リ、御礼執奏ヲ托シ、又家老ヨリ

ハ藩内ニ尚内外一和協力シテ、奉公ノ誠意ヲ尽スベキヲ訓示シ、後更ニ勅意ニヨリ霊社建設ニ付、応分ノ寄進ヲナスベキヲ達セリ、ソノ関係書類左ノ如シ、

六六ノ一　勅書

薩摩少将へ

其藩事積年抱勤王之志、勲労不少候処、応
召登京
朝議之旨、速ニ奉行彼是周旋遂使王道復前古、殊ニハ
去ル三日、逆賊突然北上之砌於伏見表防禦、其後連戦
処々追撃、軍威ノ盛ナルコト実ニ前古不愧也、而テ遂
巨魁慶喜落胆、捨浪華城遁去之趣達
宸聴　天感不斜候、愈以励兵勢屠其巣穴、可耀
皇軍稜威於内外候、依之御剣一振、即今恩賞迄ニ下賜
候旨、
御沙汰候事、

六六ノ二　勅書

薩摩戦死人江

今度就兵革、其藩士之輩殉国戦死之者共、具ニ達
天聴、被為愴
叡情候条不浅、宜厚其葬礼恤其親眷慰忠魂于九原之下、
依之営弁之費賜金五百両候、藩主ヨリ可頒与之旨
御沙汰候事、
但設一社聚其忠魂、永ク可被命祭祀
思召候事、
右之通慶應四年戊辰正月九日、於京師
太守様
勅書御頂戴、

六六ノ三　達示

一此度伏見諸所ニオイテ、戦死之面々達
天聴、
叡感ノ余リ
勅書且御金五百両被成下、誠以
御深重之御取扱冥加之至候、仍之明九日於
敷舞台戦死之父兄親類等ヘ
勅書拝見被仰付、右賜金配分被成下筈候条、難有頂戴
仕、永ク祭祀等行届候様、屹ト可致取扱旨申渡、御金
可引渡候、
二月八日

桂　右衛門〔久武〕

【参照一】

右之通被仰渡、御金壱人拾壱両宛、小折包トシテ慰斗不懸、銘々姓名紙札相付、白木台ニ載、表御小姓敷舞台ニ備、且石神万右衛門下人ハ、金五両同様ニシテ被下、市來六左衛門伝達之、

【参照二】

一太守様御儀、先月九日従
天朝　御剣　御拝領、　勅書御頂戴、且殉国戦死之者江賜　御金五百両、厚葬礼設一社祭祀候様、是又被為蒙
勅命候段御到来候、依之御一門方島津圖書殿・島津左衛門一列、並ニ諸大身分、其外月次御礼罷出候面々、諸士御兵具方付士諸与与力、明九日四時登　城、於席々謁御家老御祝儀可被申上候、

外ケ条略ス、

右之通　太守様　中将様江御祝儀被申上候様、向々へ可致通達候、

二月八日　右衛門〔桂久武〕　龍　衛〔川上久齢〕

内　膳〔川上久憲〕

【参照三】

御礼執奏状

一筆啓上仕候、修理大夫〔島津忠義〕事、去月九日依
召参
内仕候処、
天顔拝被　仰付、積年勤
王之志勲労不少、応
召登京、
朝議之御旨彼是周旋仕、去月三日於伏見表逆賊防禦、其後連戦処々へ追撃、賊徒遁去候趣達
宸聴、
天感不斜、依之為御恩賞御剣一振拝領被
仰付、殊殉国戦死之者へ賜御金五百両、厚葬礼且設一社、永可被
命祭祀
叡慮之趣、被　仰下、其上於扣処御取肴・御酒樽頂戴被
仰付候旨承知仕、重畳不容易蒙
御褒賞、誠以冥加至極難有仕合奉存候、右御礼為可申

上捧使札候、此旨可然様
奏達所仰御座候、恐惶謹言、
御官名
二月八日　御名乗
大原宰相殿
萬里小路右大弁宰相殿
長谷三位殿
岩倉前中将殿
橋本少将殿

島津忠義家記

【参照四】

寄進達

此度伏見諸所ニヲイテ戦死之面々、於
朝廷
叡感不浅、　御感状且賜金、殊更一社建立致祭祀候様
被　仰出、至誠感天、武門之冥加不可過之、美目之至
候、依之忠魂之霊社一宇御建立被為在、永御祭祀被成
下筈候条、人々此旨ヲ遵奉イタシ、貴賤ヲ不論、物ノ
多少ニヨラス、志次第寄進被仰付候条、向々ヘ不洩様
致通達、諸郷・私領ヘモ申渡、寄進物ハ於其支配取円
置、名前ヲ以届申出候様、是又可申渡候、
二月　右衛門

六七　親征行幸ノ期ヲ本月下旬ト定ム

九日、御親征行幸期ヲ本月下旬トスヘキヲ令セラル、其ノ令文左ノ如シ、

令文

一御親征行幸、可為当月下旬被
仰出候事、
二月九日
追テ日限更ニ　御沙汰候事、

【参照】

（記）同日、参与坊城俊政を行幸奉行と為し、小原二兵衛忠寛を御用掛と為して、供張の事を経理せしむ、

大久保利通日記

明治元年戊辰二月
九日
一今日早々太政官代ヘ出席候様、承知罷出候、浪華　行

幸、太政官代大坂ヘ被移候由御決定ニテ、取調云々拝承、今日退散ヨリ三樹ヘ会ス、

六八　東征大総督及ヒ大総督府参謀等ヲ任命ス

コノ日、総裁熾仁親王(有栖川宮)ヲ東征大総督ト為シ、参与正親町公董・西四辻公業・廣澤真臣ヲ大総督府参謀ト為ス、又議定嘉言親王ヲ海軍総督ト為シ、庭田重胤ヲソノ参謀ト為ス、更ニ奥羽鎮撫総督ヲ設ケ、澤為量(三位)ヲ之ニ補シ、醍醐忠敬ヲシテ之ニ副タラシメ、黒田了介(清隆)・品川弥二郎ヲ参謀ト為ス、尋テ大山綱良(格之助、鹿児島藩士)・世良砥徳(修蔵、山口藩士)ヲ以テ之ニ代フ、

六八ノ一　復古記

各通　正親町中将(公董)
西四辻大夫(公業)
廣澤兵助(真臣)

御親征大総督可為参謀被仰下候事、

二月九日

但シ来ル十五日可為発遣事、

正親町公董陣中日誌、西四辻公業・毛利元徳家記

六八ノ二

澤三位

就御親征、可為奥羽鎮撫総督被仰下候事、

二月九日

但シ来ル十五日可為発遣候事、

沢為量履歴

六八ノ三

醍醐少将

就御親征可為奥羽鎮撫総督副被仰下候事、

二月九日

但シ来十五日可為発遣候事、

醍醐忠敬家記

六八ノ四　附録

奥羽鎮撫使参謀

黒田了介

品川彌二郎

尋テ二人ヲ罷メ、大山綱良・世良砥徳ヲ以テ之ニ代フ、

六八ノ五

庭田大納言

海軍参謀被

仰付候事、

庭田重胤履歴
有栖川宮家記

六九　東山道先鋒隊出発期日ト総督本陣ニ会軍ノ期日トノ変更等ノ達示

コノ日、曩時命ゼラレタル東山道先鋒隊ノ出発期日ト、総督本陣ニ会軍ノ期日トヲ変更シ、休泊附ニテ達セラレ、尚東海道出兵休泊モ亦、同時ニ達セラル、ソノ達文左ノ如シ、

達文

薩州

右東山道先鋒被　仰付、二月十五日限総督本陣へ会軍被　仰出置候得共、別紙休泊通ニテ、来ル十三日ヨリ出立ニテ、同十八日迄ニ会軍可有之候事、

二月九日

御親征出兵休泊附　(一)

京都
(滋賀県)大津休　草津泊　(同上)守山休
(同上)武佐泊　(同上)愛知川休　(同上)鳥居本泊
(同上)醒ケ井休　(岐阜県)今須泊　(同上)垂井休
(同上)大垣

以上

御親征出兵休泊附　(二)

京都
(滋賀県)大津休　草津泊　(同上)石部休
(同上)水口泊　(同上)土山　(三重県)坂之下休
(三重県)関　(同上)亀山泊　(同上)庄野
(同上)石薬師　(同上)四日市休　(同上)桑名

七〇　宿駅取締・給養並ニ菊御紋使用等ニ付キ達示

又出兵ニ付、宿駅取締・給養並ニ菊御紋使用等、諸般ノ心得ニ付達セラレ、本藩ノ在京留守居ハ、直チニ之ヲ請ケテ、家老ニ申告セリ、

七〇ノ一　宿駅取締

藩々へ

京都ヨリ出先礎陣迄、別紙之通休泊定被　仰付候条、銘々引請之駅々へ番兵ヲ置、諸兵通行之用便ヲ調、諸事ヲ監督スヘシ、万一就御用通行之面々、猥リニ権威ヲ張、粗暴ノ振舞於有之ハ無用捨召捕へ、

太政官代刑法局へ可申出候、自然手ニ余リ候節ハ、打果候テモ不苦候事、

一器械弾薬運輸之便利ヲ整へ、長陣ニ堪ル覚悟肝要之事、

一礎陣ハ勿論、休泊等兵粮之貯肝要之事、

一宿陣所等不自由之儀ハ、出陣之常ニ付、銘々可相弁ハ勿論之事ニ候条、諸事簡易ニ仕向ケ被　仰付候事、

一駅々通行之兵隊へ給候米穀ハ、其方角ニテ取計置可申、跡ニテ

朝廷ヨリ金穀共被下置候事、

右今般

御親征被　仰出候、就テハ前書之条々宜相守、冗費ヲ省キ、万民之疾苦ニ不立至様、精々可致心配

御沙汰之事、

海陸軍務局
会計事務局

七〇ノ二　一白米四合
一金壱朱
但泊駅
一白米弐合
一銭百文
但休駅

右之通壱人付、手当可有之候事、

七〇ノ三　先頃御制度御改正ニ付、諸藩宮門警衛被仰付置、銘々旗幕並ニ挑灯等ニ至迄、菊御紋相用候様、且追討被

仰付候諸藩、以来一隊ニ一流ツヽ、菊御紋御旗被下候間、家々ニテ可相調旨、

御沙汰ニ相成候得共、右

御沙汰ハ御取消ニ相成、以来追討被

仰付候出兵之向ヘハ、
朝廷ヨリ御旗御渡ニ相成候旨、更ニ被
仰出候事、

七〇ノ四　留守居届書

御書付八通

内一通

御親征　行幸、当月下旬被仰出候儀付、

一通

今般朝政御一新ニ付テハ、万民御撫恤之儀、専務
等之儀付、

一通

先頃菊御紋御旗、家々ニテ可相調旨御沙汰相成候
得共、　朝廷ヨリ御旗相成候御儀付、

一通

東山道先鋒来十三日ヨリ出立ニテ、同十八日迄ニ
会軍可有之ト之御儀付、

一通

御親征出兵休泊付、

一通

諸道宿駅取締、藩々ヘ御沙汰候御儀付、

一通

東海・東山両道出張之藩々ヘ、兵粮等設置御達ノ
儀付、

一通

休泊駅米金手当之儀付、

非蔵人弁事局　松尾伯耆
内国局　中川對馬
軍務局　吉田遠江

右ハ今日太政官代ヘ罷出候様、右局々ヨリ申来候間、
罷出候処、右三人ヨリ被相渡候付、可申上旨申述置候、
御書付差上申候、
右之通今日私共差支、御留守居付役隈元敬一郎相勤申
候付、御書付相添、此段申上候、已上、

辰二月九日　内田仲之助

糺様

追テ申上候、　御親征行幸当月下旬被仰出候御書付、

並今般朝政御一新付、万民御撫恤ノ儀専務等之御書付弐通ハ、触下へ廻達イタシ候様承知仕候旨、本書ハ私共ヨリ、内藤様其外様衆へ廻達仕置候、此段モ申上置候、以上、

七一　不逞ノ徒ノ検察ト出訴ヲ許ス

コノ日、朝廷ニテハ、大政変更ノ際ニ乗シ、不逞ノ徒名ヲ勤王ニ托シテ、良民ヲ害虐シ、或ハ下情上達セザルモノアランコトヲ慮リ、諸藩ニ令シテ之ヲ検察セシメ、且衆庶ノ直ニ太政官ニ赴愬スルヲ許シ、又諸道宿駅ノ伝通ハ厳重ニ印票ヲ照合セシム、ソノ令達左ノ如シ、

令達

今般

朝政御一新ニ付ては、万民　御撫恤之儀は専務之処、当今御国内御多事之折柄ニ付、自然安民之道等閑ニ相成候際ニ乗し、不逞之徒妄ニ四方ニ奔走し、名を勤王ニ仮り、良民を欺罔して金穀を貪り残忍ニ民力を致駆役等、甚以　御撫恤之御趣意ニ致齟齬候儀も、多分可有之候間、民間之於苦情は、仮令朝政に触候事ニ候共、聊無忌憚可申出候、尤領主・地頭等ニおゐても、厚　御趣意を以、民間より訴出候節は速ニ　太政官江可致言上候、猶又差掛り候件々、左之通被　仰出候間、領主・地頭より厚相諭候様可致候、

但従前ノ弊習を追て、言路壅蔽之事も難測候間、民間之者より直ニ

太政官江訴出候儀も勝手次第之事、

一五畿七道諸宿駅之儀、是迄迚も印鑑無之者は、継立申間敷筈之処、近来宮・堂上家来抔と唱、印鑑ニ引合無之而已ならす、無賃銭ニて人馬継立強談仕候者有之趣、以之外之事ニ候間、以来印鑑引合無之、且賃銭跡払等ニては、決て継立申間敷候事、

辰二月

東海道先鋒記
毛利元徳家記

七二　列藩ニ貢士ヲ出スコトヲ命ス

十日、朝廷列藩ニ貢士ヲ出スベキヲ令シ、藩ノ大小ニヨリテ員数ヲ定メ、五十日ヲ限リ京師ニ貢セシム、ソノ令

文左ノ如シ、

令文

一大藩　三員
一中藩　二員
一小藩　一員

右ハ今般　王政御一新被為　仰出、輿論公議ヲ執リ候御趣意ヲ以、各藩ヨリ貢士トシテ太政官ヘ指出候様、被　仰付候条、其御趣意ニ相基キ、国々国論ニモ可相代者人撰有之、指出候様　御沙汰候事、

但右拝承当日ヨリ五十日ヲ限リ、差出可申、尤其者参着次第弁事役所ヘ可届出事、

二月十日

七三　島津忠義慶喜追討出軍ニ付キ軍令ヲ発ス

〔付箋〕「茂久公・久光公仰出留より軍令引用ノ事」

コノ日、忠義公ハ慶喜追討ノ為メ、出軍ニ付軍令ヲ発セラル、ソノ文左ノ如シ、

一今度慶喜為御追討出軍被仰付候付テハ、朝廷之御大事、列藩立会之進軍ニテ、他之見聞モ有之事候条、末々ニ至迄、取締行届屹ト謹慎勉励可精勤候事、

一臨時之賞罰ハ、出陣先ニテ申談可相決事、

一暴卒押買ハ勿論、取引等之儀、入念可為厳重之旨、下々江取締可申付事、

一同列之諸藩江対シ、失礼暴動之振舞無之様、互ニ可申合事、

一命令ナクシテ、酒会禁制之事、

一押前等之前後守令、猥ニ不可乗越候事、

右条々堅固可相守旨可申渡候様、御沙汰候事、

慶應四辰二月十日　御取次　西郷吉之助

右糺江相渡

（注意）此ノ時迄、西郷氏ハ忠義公ノ御側役タリシ也、

七四　東征大総督宮ヨリ軍令並ニ廟算書ヲ東海東山・北陸三道総督ニ頒ツ

十二日、東征大総督宮ヨリ、軍令並ニ廟算書ヲ、東海・東山・北陸三道総督ニ頒ツ、其ノ文左ノ如シ、

七四ノ一　今度　聖断ヲ以テ、　御親征被　仰出候ニ付テハ、偏

ニ蒼生之塗炭ニ陥リ候ヲ被歎思召候、鴻大之　聖慮ヲ奉戴シ、速ニ　皇国平治、奉安、宸襟候様、御軍列ニ被　召加候大小諸藩、大ニ軍備ヲ厳ニシ、同心戮力尽忠誠、可遂成功候事、

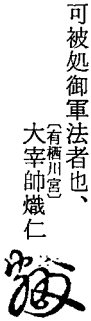
一海陸軍トモ進退駆引之儀ハ、其手々々之総督ニ委任被仰附候条、其旨可相心得事、

一私論ヲ以公事ヲ誤リ、各藩区々ニ不相成様、深ク心ヲ可用事、

一別紙陸軍諸法度条々堅可相守事、

右之条々於相背ハ、可被処御軍法者也、

慶應四年二月　　大宰帥熾仁〔有栖川宮〕



橋本少将〔実梁〕殿

柳原侍従〔前光〕殿

（注意）　東山道ハ岩倉大夫〔具定〕殿、同八千丸〔具経〕殿ニ作リ、

北陸道ハ高倉三位〔永祀〕殿・四條大夫〔隆平〕殿ニ作リ、奥羽鎮撫総督ハ澤三位〔為量〕殿・醍醐少将〔忠敬〕殿ニ作ル、

七四ノ二
別紙

陸軍諸法度条々

一長官々々之差図ニ随ヒ、諸事厳重ニ覚悟アルヘキ事、

一一勝ニ驕慢シ、一敗ニ挫折スヘカラサル事、

一進戦之節ハ、総勢ヲ二ニ分チ、其一ヲ先鋒トシ、其一ヲ中軍トシ、交番ニシテ可相勤事、

但路之遠近、地之広狭ニヨリ、二駅或ハ三駅ニ分配止宿之儀モ可有之事、

一行軍ハ六里内外ヲ以、定則トスヘキ事、

但敵境ヨリ先ハ、必ス申ノ刻ヨリ内、着陣勿論之事、

一総勢之内交番ニシテ、身方地方ニテハ十分之一、敵境ヨリ先ハ五分之一之人数ヲ以、斥候差出巡邏不怠可相勤事、

一各藩ヨリ一両人宛、総督陣営ヘ可相詰事、

一帰順之者ハ、先ツ先手ニ相加置、実行相顕レ候上、寛容之御処分可有之事、

一宿陣之不自由、宿駅人馬之湊等、無余儀次第ハ令勘弁、聊権威ケ間敷振舞無之様可相心得事、

一於軍中、上下貴賤寝食労逸ヲ可同事、

一浮説流言等、総テ軍勢之気鋒ニ相拘リ候事、堅不可唱、味方又ハ敵之情実難被差置事件聞及候節ハ、早速中軍ヘ可申出事、

一猥ニ神社仏閣ヲ毀チ、民家ヲ放火シ、家財ヲ掠ル等、

乱妨狼藉ハ勿論、押買等堅禁制之事、

一喧嘩口論又ハ陣場之争ヒ等、堅致間敷様可相心得事、

一外国人ニ行逢ヒ、乱妨無礼難捨置節ハ、召捕へ置、中軍ニ申出候ハヽ、曲直其国之公使へ相糺、至当之御処置可有之ニ付、猥ニ放砲斬殺等、堅禁制之事、

但外国人之居住所へ猥ニ不可立入事、

一銃砲弾薬並金穀等分取之品々ハ、中軍へ可申出事、

右之条々堅可相守者也、

海陸軍

慶應四辰年二月　　大総督

七四ノ三

廟算

一海・陸軍大総督、駿府城へ礎陣ヲ被据、諸手指揮被為在候事、

一東海・東山・北陸三道先鋒ハ、　御沙汰次第、随従之諸藩兵隊ヲ揃へ、速ニ進発、路次諸藩其他ノ方向ヲ定メ、二月中左ノ根拠ニ地方ヲ占ムルヲ要ス、

一二月中、先鋒根拠ニ相揃候上、巣窟打入期日ハ、追テ大総督ヨリ指揮可有之事、

但根拠ヘ進入ヲ賊兵相拒ミ、其他不得止時勢ニ至リ候節ハ、戦争勿論ニ付、決テ油断スヘカラサル事、

東海道ハ駿州興津・岩淵之両所ヲ見計ヒ、東山道先鋒ト牒合シ、勢ヲ分チ、甲府ヲ固保シ、本勢ハ同国沼津ヨリ豆州地ニ拠リ、時機ヲ見合、速ニ函嶺ヲ占メ、斥候隊ヲ用ルヲ要ス、

東山道ハ信州諏訪ニ至リ、東海道先鋒ノ動静ヲ察シ、勢ヲ分チ、速ニ甲府ヲ保チ、本勢ハ同国佐久郡ニ入リ、碓氷嶺ノ険ヲ保ツヲ要ス、

但東山ハ糧食・弾薬運輸ノ不便利ナレハ、尤モ地利ヲ選ヲ要ス、

奥羽先鋒総督之儀ハ、右二国ハ勿論、安房・上総・下総・常陸等大小諸侯其他有志之輩ヲ糺合シ、要衝ニ拠リ、東山・北陸二道総督ト牒合シ、江戸城ノ後ヲ衝クヲ要ス、

北陸道ハ信州地ニテ、上州沼田・草津等ノ接近要衝ニ礎陣ヲ据ヘ、斥候隊ヲ用ルヲ要ス、

右東海道ハ進撃ヲ主トシ、外二道ハ守防ヲ主トス、尤時機ニ依リ進撃勿論ナリ、

但東山・北陸二道ハ、大総督礎陣ト隔絶、気脈通シ

難キ故ニ、二道総督談合、攻守救応スルコトヲ要ス、

一三道中小藩諸侯ヲ以テ、宿駅取締被　仰付、京地ヨリ巣窟戦地迄之地理ヲ見定メ、六里内外程毎ニ宿陣所ヲ構ヘ、番兵ヲ置キ、諸兵通行ノ用便ヲ調ヘ、諸事ヲ監督スヘシ、又礎陣ヨリ敵地ニ臨ム連珠陣ヲ作リ、若シ先手一敗ストモ、後陣ニ拠リ喰止ム可シ、礎陣難保トキハ一歩退キ、後宿陣所ニ寄リ盛リ返スヘシ、更ニ敗走セサル覚悟ヲ肝要トス、

一兵粮弾薬運輸ノ便利ヲ整ヘ、永陣ニ堪ル覚悟急務トス、
　但礎陣ハ勿論、宿陣所トモニ兵粮ノ貯ヘ肝要トス、

一在陣中ノ小規則ハ、其手々々ノ総督ニ委任ス、一定ノ上諸兵隊ニ布令スヘシ、

一冗兵冗官ヲ省キ、軍費ヲ減スルコトヲ要ス、

且陣中混雑ハ節制不相立基ニ付、左ノ御布令被　仰出、依テ総督所ヘ申出之上、着到帳ニ記シ、時々人数調ヲナスヘシ、

（附注）此廟算末項中、左ノ御布令トアルハ、征東出張藩々ヘ太政官代ヨリノ達文ヲ指ス、茲ニ附載ス、

七四ノ四

征東出張藩々ヘ

一銃隊・砲隊之外用捨之事、

一隊長司令輜重掛等、実地実務之外、冗官用捨之事、
　但其主人之儀ハ、在京不苦候事、

一無用之衣類雑具類持参用捨之事、

右之通被仰出候条、総督所ハ勿論、太政官代事務掛ヘ、別紙雛形之通、早々附出候様御沙汰候事、

二月　　海陸軍務局

七五　徴士ハ旧藩ト関係無キコトヲ諭告ス

（十一日）コノ日、徴士ハ朝臣ト心得、旧藩ニ関係混合スヘカラサル旨ヲ諭告ス、其ノ文左ノ如シ、

諭告文

自各藩徴士被

仰付候者ハ、奉命即日ヨリ

朝臣ト相心得、勿論旧藩ニ全ク関係混合無之御趣意ニ

候間、此旨厚相心得可申事、

二月十一日

七六　諸藩ヲ分ツテ大中小三等ト為ス

コノ日、諸藩ヲ分チテ大・中・小ノ三等ト為ス、其ノ制左ノ如シ、

制定文

一大藩

但四十万石以上ヲ唱フ、

一中藩

但十万石以上三十九万石ニ至ルヲ唱フ、

一小藩

但一万石以上九万石ニ至ルヲ唱フ、

右之通、諸侯石高ヲ以三等ニ区別相立候様、被仰出候事、

二月十一日

大藩　八

加賀藩（高百弐万弐千七百石）　前田慶寧加賀守
薩摩藩（同七拾七万八百石）　島津忠義修理大夫
仙臺藩（陸奥、同六拾弐万五千六百石）　伊達慶邦陸奥守
尾張藩（同六拾壱万九千五百石）　徳川徳成元千代
紀伊藩（同五拾五万五千石）　徳川茂承中納言
肥後藩（同五拾四万石）　細川慶順越中守
筑前藩（同五拾弐万石）　黒田長溥美濃守
安藝藩（同四拾弐万六千石）　淺野茂長安芸守

中藩　三拾九

長門藩（高三拾六万九千石）　毛利敬親大膳大夫
肥前藩（同三拾五万七千石）　鍋島茂實肥前守
水戸藩（常陸、同三拾五万石）　徳川慶篤中納言
因幡藩（同參拾弐万五千石）　池田慶徳因幡守
津藩（伊勢、同三拾弐万三千九百五拾石）　藤堂高猷和泉守
越前藩（同三拾弐万石）　松平茂韶越前守
備前藩（同三拾壱万五千二百石）　池田茂政備前守
阿波藩（同弐拾五万七千弐百石）　蜂須賀茂韶淡路守
彦根藩（近江、同弐拾五万石）　井伊直憲掃部頭
土佐藩（同弐拾四万弐千石）　山内豊範土佐守
筑後藩（同弐拾壱万石）　有馬慶頼中務大輔
秋田藩（出羽、同弐拾万五千八百石）　佐竹義堯右京大夫
盛岡藩（陸奥、同弐拾万石）　南部利剛美濃守
出雲藩（同拾八万六千石）　松平定安出羽守
米澤藩（出羽、同拾八万石）　上杉齊憲弾正大弼
前橋藩（上野、同拾七万石）　松平直克大和守

莊内藩 出羽同上　酒井忠篤左衛門尉
郡山藩 大和、同拾五万千弐百八拾八石　柳澤保申甲斐守
高田藩 越後、同拾五万石　榊原政敬式部大輔
小倉藩 豐前同上　小笠原忠忱豊千代丸
柳川藩 筑後、同拾壱万九千六百石　立花鑑寛飛驒守
小田原藩 相模、同拾壱万三千百弐拾九石　大久保忠禮加賀守
福山藩 備後、同拾壱万石　阿部正方主計頭
佐倉藩 下総同上　堀田正倫相摸守
小濱藩 若狭、同拾万三千五百五拾八石　酒井忠氏若狭守
淀藩 山城、同拾万弐千石　稲葉正邦美濃守
二本松藩 陸奥、同拾万七百石　丹羽長國左京大夫
津山藩 美作、同拾万石　松平慶倫参河守
忍藩 武蔵同上　松平忠誠下総守
宇和島藩 伊豫同上　伊達宗徳遠江守
中津藩 豊前同上　奥平昌服大膳大夫
大聖寺藩 加賀同上　前田利鬯飛驒守
弘前藩 陸奥同上　津軽承昭越中守
對馬藩 同上　宗義達對馬守
松代藩 信濃同上　真田幸民信濃守
大垣藩 美濃同上　戸田氏共采女正

棚倉藩 陸奥同上　阿部正静美作守
新發田藩 越後同上　溝口直正誠之進
富山藩 越中同上　前田利同稱松

小藩二百二拾二

土浦藩 常陸、高九万五千石　土屋擧直采女正
高崎藩 上野、同八万弐千石　松平輝照右京亮
川越藩 武蔵、同八万四百石　松井康英周防守
明石藩 播磨、同八万石　松平慶憲兵部大輔
笠間藩 常陸同上　牧野貞利越中守
古河藩 下総同上　土井利與大炊頭
宇都宮藩 下野、同七万七千八百五拾石　戸田忠友土佐守
長岡藩 越後、同七万四千石　牧野忠訓駿河守
小城藩 肥前、同七万三千弐百五拾石　鍋島直虎欽八郎
岡藩 豊後、同七万四百四拾石　中川久昭修理大夫
吉田藩 参河、同七万石　松平信古刑部大輔
島原藩 肥前同上　松平忠和主殿頭
延岡藩 日向同上　内藤政擧備後守
宮津藩 丹後同上　本荘宗武弾正忠
新荘藩 出羽、同六万八千弐百石　戸澤正實中務大輔
平戸藩 肥前、同六万千七百石　松浦詮肥前守

松本藩信濃河六万石
濱松藩遠江同上
膳所藩近江同上
篠山藩丹波同上
唐津藩肥前同上
西尾藩参河同上
館林藩上野同上
大洲藩伊豫同上
中村藩陸奥同上
亀山藩伊勢同上
岸和田藩和泉、同五万三千石
上田藩信濃同上
久居藩伊勢同上
蓮池藩肥前、同五万弐千六百石
丸亀藩讃岐、同五万千五百拾弐石
龍野藩播磨、同五万千八拾九石
飫肥藩日向、同五万千八拾石
村上藩越後、同五万九拾石
臼杵藩豊後、同五万六拾石
掛川藩遠江、同五万三拾七石

戸田光則丹波守
井上正直河内守
本多康穣主膳正
青山忠敏左京大夫
小笠原長國佐渡守
松平乗秩和泉守
秋元禮朝但馬守
加藤泰秋遠江守
相馬季胤因幡守
石川成之宗十郎
岡部長寛筑前守
松平忠禮伊賀守
藤堂高邦佐渡守
鍋島直紀甲斐守
京極朗徹佐渡守
脇坂安斐淡路守
伊東祐相左京大夫
内藤信民紀伊守
稲葉久通右京亮
太田資美総次郎

岡崎藩参河、同五万石
丸岡藩越前同上
府中藩長門同上
秋月藩筑前同上
亀山藩丹波同上
沼津藩駿河同上
三春藩陸奥同上
山形藩出羽同上
關宿藩下総、同四万八千石
郡上藩美濃同上
津和野藩石見、同四万三千石
徳山藩周防、同四万拾石
大野藩越前、同四万石
田中藩駿河同上
尼崎藩摂津同上
鯖江藩越前同上
田邊藩紀伊、同三万八千八百石
三田藩摂津、同三万六千石
高槻藩摂津同上
犬山藩尾張、同三万五千石

本多忠民美濃守
有馬道純遠江守
毛利元周左京亮
黒田長徳甲斐守
松平信正図書頭
水野忠敬出羽守
秋田映季萬之助
水野忠弘真次郎
久世廣文隠岐守
青山幸宜峰之助
亀井茲監隠岐守
毛利元蕃淡路守
土井利恒能登守
本多正訥紀伊守
櫻井忠興遠江守
間部詮道下総守
安藤直裕飛驒守
九鬼隆義長門守
永井直介日向守
成瀬正肥隼人正

田邊藩 丹後同上　牧野誠成 豊前守
今治藩 伊豫同上　松平勝吉 内膳正
新宮藩 紀伊同上　水野忠幹 大炊頭
肥後新田 同上　細川利永 若狭守
沼田藩 上野同上　土岐頼知 隼人正
横須賀藩 遠江同上　西尾忠篤 隠岐守
高遠藩 信濃、同三万三千石　内藤頼直 若狭守
杵築藩 豊後、同三万弐千石　松平親良 中務大輔
加納藩 美濃同上　永井尚服 肥前守
福知山藩 丹波同上　朽木為綱 近江守
西條藩 伊豫、同三万石　松平頼英 左京大輔
高島藩 信濃同上　諏訪忠誠 因幡守
出石藩 但馬同上　仙石久利 讃岐守
吉田藩 伊豫同上　伊達宗孝 若狭守
安中藩 上野同上　板倉勝殷 主計頭
壬生藩 下野同上　鳥居忠寶 丹波守
松前藩 陸奥同上　松前徳廣 志摩守
岩村藩 美濃同上　松平乗命 能登守
村松藩 越後同上　堀直賀 左京亮
廣瀬藩 出雲同上　松平直已 佐渡守

上山藩 出羽同上　松平信庸 伊豆守
宇土藩 肥後同上　細川行真 豊前守
安藝藩内分 同上　淺野長厚 近江守
久留里藩 上総同上　黒田直養 筑後守
福島藩 陸奥同上　板倉勝尚 甲斐守
一關藩 陸奥同上　田村邦榮 右京大夫
高須藩 美濃同上　松平義勇 範次郎
今尾藩 美濃同上　竹腰正舊 竜若
岩城平藩 陸奥同上　安藤信勇 理三郎
鳥山藩 下野同上　大久保忠順 三九郎
因幡新田 同上　池田徳澄 修理
鳥羽藩 志摩同上　稲垣長行 平右衛門
大村藩 肥前、同弐万七千九百七拾石　大村純熙 丹後守
佐土原藩 日向、同弐万七千七拾石　島津忠寛 淡路守
高鍋藩 日向、同弐万七千石　秋月種殷 長門守
園部藩 丹波、同弐万六千七百拾壱石　小出英尚 伊勢守
松山藩 出羽、同弐万五千石　酒井忠良 紀伊守
足守藩 備中同上　木下利恭 備中守
備前新田 同上　池田政詮 信濃守
高取藩 大和同上　植村家保 駿河守

松岡藩（常陸同上）
水口藩（近江同上）
日出藩（豊後同上）
勝山藩（美作、同弐万三千石）
岩槻藩（武蔵同上）
刈谷藩（参河同上）
勝山藩（越前、同弐万弐千七百七拾七石）
人吉藩（肥後、同弐万弐千百石）
府内藩（豊後、同弐万千弐百石）
岡部藩（武蔵、同弐万弐百五拾石）
本荘藩（出羽、同弐万弐拾壱石）
府中藩（常陸、同弐万石）
八戸藩（陸奥同上）
守山藩（陸奥同上）
大溝藩（近江同上）
小幡藩（上野同上）
長島藩（伊勢同上）
飯野藩（上総同）
伊勢崎藩（上野同上）
佐伯藩（豊後同上）

中山信徴備中守
加藤明實能登守
木下俊愿鐵次郎
三浦弘次備後守
大岡忠貫主膳正
土井利教淡路守
小笠原長守左衛門佐
相良頼基遠江守
松平近説左衛門尉
安部信發摂津守
六郷政鑑兵庫頭
松平頼繩播磨守
南部信順遠江守
松平頼升大学頭
分部光貞若狭守
松平忠恕摂津守
増山正修対馬守
保科正益弾正忠
酒井忠強下野守
毛利高謙伊勢守

下館藩（常陸同上）
秋田新田（出羽同上）
庭瀬藩（備中同上）
鹿島藩（肥前同上）
泉藩（陸奥同上）
赤穂藩（播磨同上）
飯山藩（信濃同上）
亀田藩（出羽同上）
與板藩（越後同上）
栢原藩（丹波同上）
擧母藩（参河同上）
大多喜藩（上総同上）
綾部藩（丹波、同壱万九千五百石）
天童藩（出羽、同壱万八千石）
西大路藩（近江同上）
新見藩（備中同上）
結城藩（下総同上）
黒羽藩（下野同上）
茂木藩（下野、同壱万六千三百石）
田野口藩（信濃、同壱万六千石）

石川總管若狭守
佐竹義諶播磨守
板倉勝弘摂津守
鍋島直彬備中守
本多忠紀能登守
森忠典美作守
本多助成豊後守
岩城隆邦左京大夫
井伊直安右京亮
織田信親出雲守
内藤文成金一郎
松平正質
九鬼隆備大隅守
織田信學左近将監
市橋長義下総守
關長克伊勢守
水野勝知日向守
大關増裕肥後守
細川興貫玄蕃頭
松平乗謨縫殿頭

佐貫藩 同上総
佐野藩 同下野
飯田藩 信濃、同壱万五千石
鶴牧藩 同上総
豊岡藩 但馬 同上
三日月藩 播磨 同上
神戸藩 伊勢 同上
小諸藩 信濃 同上
岩村田藩 信濃 同上
湯長谷藩 陸奥 同上
備前新田 同上
因幡新田 同上
伯太藩 和泉、同壱万三千五百弐拾石
山上藩 近江、同壱万三千四拾参石
萩野山中藩 相模、同壱万三千石
土佐藩内分 同上
宮川藩 近江 同上
一宮藩 上総 同上
福江藩 肥前、同壱万弐千六百石
森藩 豊後、同壱万弐千五百石

阿部正恒 駿河守
堀田正頌 摂津守
堀親義 左衛門尉
水野忠順 肥前守
京極高厚 飛騨守
森俊滋 対馬守
本多忠貫 伊豫守
牧野康済 遠江守
内藤正誠 志摩守
内藤政養 長寿麿
池田政禮 丹波守
池田徳定 相模守
渡邊章綱 丹後守
稲垣太清 若狭守
大久保教義 中務少輔
山内豊福 摂津守
堀田正養 出羽守
加納久宜 嘉元次郎
五島盛徳 飛騨守
久留島通靖 伊豫守

多古藩 下総、同壱万弐千石
田原藩 参河 同上
三上藩 近江 同上
金澤藩 武蔵 同上
勝山藩 安房 同上
太田原藩 下野、同壱万千四百石
峯山藩 丹後、同壱万千百四拾四石
小泉藩 大和、同壱万千百石
足利藩 下野、同壱万千石
盛岡藩内分 陸奥 同上
三根山藩 越後 同上
長瀞藩 出羽 同上
菰野藩 伊勢 同上
西端藩 参河、同壱万五百石
岡田藩 備中、同壱万三百石
山家藩 丹波、同壱万八拾弐石
須坂藩 信濃、同壱万五拾三石
苗木藩 美濃、同壱万弐拾壱石
牛久藩 常陸、同壱万拾七石
新谷藩 伊豫、同壱万石

松平勝行 大蔵少輔
三宅康保 備後守
遠藤胤城 但馬守
米倉昌言 丹後守
酒井忠美 銚次郎
太田原勝清 銚丸
京極高富 主膳正
片桐貞篤 主膳正
戸田忠行 長門守
南部信民 美作守
牧野忠泰 伊勢守
米津政敏 伊勢守
土方雄永 聟千代
本多忠鵬 修理
伊東長辭 播磨守
谷衛滋 大膳亮
堀直虎 内蔵頭
遠山友禄 信濃守
山口弘達 長次郎
加藤泰令 出雲守

平戸新田 肥前同上
山崎藩 播磨同上
麻生藩 常陸同上
高富藩 美濃同上
小松藩 伊豫同上
黒川藩 越後同上
七日市藩 上野同上
相良藩 遠江同上
米澤新田 出羽同上
丹南藩 河内同上
清末藩 長門同上
下手渡藩 陸奥同上
芝村藩 大和同上
三草藩 播磨同上
大垣新田 美濃同上
小倉新田 豊前同上
西大平藩 参河同上
黒石藩 陸奥同上
柳本藩 大和同上
多度津藩 讃岐同上

松浦修左近将監
本多忠鄰肥後守
新荘直敬下野守
本荘道美宮内少輔
一柳頼紹因幡守
柳澤光昭伊勢守
前田利豁丹後守
田沼意尊玄蕃頭
上杉勝道駿河守
高木正坦主水正
毛利元純讃岐守
立花種恭出雲守
織田長易摂津守
丹羽氏中長門守
戸田氏良淡路守
小笠原貞正近江守
大岡忠敬越前守
津軽承叙式部少輔
織田信成筑前守
京極高典下総守

椎谷藩 越後同上
狭山藩 河内同上
敦賀藩 越前同上
母里藩 出雲同上
糸魚川藩 越後同上
柳生藩 大和同上
館山藩 安房同上
吹上藩 下野同上
生實藩 下総同上
宇都宮藩内分 下野同上
小野藩 播磨同上
淺尾藩 備中同上
小島藩 駿河同上
小見川藩 下総同上
櫛羅藩 大和同上
三日市藩 越後同上
麻田藩 摂津同上
安志藩 播磨同上
林田藩 播磨同上
吉井藩 上野同上

堀之美右京亮
北條氏恭相摸守
酒井忠経右京亮
松平直哉主計頭
松平直静日向守
柳生俊益但馬守
稲葉正善備後守
有馬氏弘兵庫頭
森川俊方内膳正
戸田忠至大和守
一柳末徳対馬守
蒔田廣孝相摸守
松平信敏丹後守
内田正學主殿頭
永井直哉信濃守
柳澤徳忠彰太郎
青木重義源五郎
小笠原貞孚幸松丸
建部政世三二郎
松平信謹鉄丸

下妻藩(常陸同上)　井上正己辰若丸
高岡藩(下総同上)　井上正順宮内少輔
請西藩(上総同上)　林忠崇昌之助
喜連川藩(下野無高)　喜連川縄氏左馬頭
濱田藩(石見、時ニ封ヲ失ヒテ美作ノ別邑鶴田ニアリ)　松平武聰右近将監
宍戸藩(壱、陸常万石ニ罪ヲ幕府ニ得位官、テヲ槍キ、鯖江藩ニ幽ス)　松平頼位主税

通計二百六十九藩

會津藩(陸奥、高弐拾八万石)　松平容保
姫路藩(播磨、同拾五万石)　酒井忠惇
松山藩(伊豫同上)　松平定昭
高松藩(讃岐、同拾弐万石)　松平頼聰
桑名藩(伊勢、同拾壱万石)　松平定敬
松山藩(備中、同五万石)　板倉勝静

會津以下六藩、当時方ニ之ヲ討ス、故ニ後ニ附記ス、

七七　諸藩ニ令シ藩士ノ江戸開成所教官ニ任セラレシモノノ姓名ヲ録上セシム

又朝廷諸藩ニ令シ、ソノ藩士ノ江戸開成所(旧幕府ノ洋学校)教官ニ任セラレシモノノ姓名ヲ録上セシム、ソノ達書左ノ如シ、

達書

諸藩ヨリ江戸開成所ヘ抜擢、又ハ雇ニ相成居候者、名元取調早速弁事役所ヘ申出候様、被仰出候事、

二月十一日

【参照】

諸藩ヨリ幕府開成所ヘ採用人名

鹿児島　肥後七左衛門
小濱　杉田玄端
佐野　神田孝平
桑名　小林鼎輔
泉　林正一郎
宇和島　佐々木貞庵
佐倉

荒井鐵之助
和歌山
柳川春三
松江
入江文郎
千村家来
田中芳男
福山
石川長次郎
杉亨二
佐原純吉
津
榊令輔
松本
辻新次
大垣
宮本玄道
佐倉
佐波銀次郎

七八　相良長發・西郷隆盛東征ノ途ニ就キ島津忠義酒饌ヲ下賜ス

コノ日、相良長發・西郷隆盛兵ヲ率キテ、東征ノ途ニ就キ、忠義酒饌ヲ下賜ス、

二月十一日　雨後雪

一一・二・三番隊并一番大砲隊半座、相良治部殿并西郷吉之助殿抔主宰ニテ、四ツ時分繰出行軍、東海道筋ヨリ桑名ヘ会軍、関東下向相成候、

君公御式台ヘ御出御酒被下候由、

七九　島津忠義請願書

コノ日、忠義封土十万石ヲ献シテ、軍政ヲ宏張センコトヲ請フ、其ノ文左ノ如シ、

請願書

宇内万国之形勢は、古今之運行従ふて、大に沿革仕、我

皇国も亦、古来之政風ニては其間ニ崛起難成候処より、王政復古衆議抜萃更始一新未曽有之御時節ニ付ては、

将来其功急度相立候様有之度奉存候、臣忠義熟惟るに、西洋各国凡開国維新之功を遂る所以之者は、先兵勢を盛大にし、不虞を鎮定する之国力を備へ、然して万里外ニ雄飛し、其威を四方ニ輝し、攻守之権を掌握いたし候儀ニ御座候、抑

朝廷上之儀不被為得止事ニは候得共、兵馬不備、器械不盈御薄力之故を以、無勿体も屢蒙塵之辱を被為受、御失体を相醸候儀と奉存候間、今日之急務は大ニ海陸軍を興張せられ、

親兵厳列乱賊不可犯之御威力被為備度、積年奉懇禱候、然処即今之形勢

皇国統一之御成業に不至、理財之道被為立兼候御儀と奉恐察候付、代々奉預候領地之内拾万石、万分一ニは候得共、為御用途返献仕度奉願候、全体封建之制ニては、其力離解分裂、各国比敵難相成候付、復古之実義ニ従ひ、鎌倉以前之如く奉還候て、至当之儀と奉存候得共、未時勢其宜を不得次第も可有御座と奉存候、従来為

皇国寸補報恩仕度、日夜至願仕候得共、不肖短才藩屏之任を汚し、毫髪之詮も無御座不堪浩歎、前件一片之赤誠

御憐察被

仰付、御許容被成下候様、御執奏奉願候、頓首百拝、

二月十一日　〔島津忠義〕薩摩少将

〔忠義公建議書・島津忠義家記にて校訂〕

【参照】

御書付一通

但御大政御一新ニ付、御領地之内、拾万石為御用途御返献被遊度、御願之儀、

御官名

非蔵人

鴨脚〔光長〕加賀

右ハ今日二條御城内国掛方へ罷出、右加賀江面会演舌之上、差出候処、今日上・下参与方出勤無之候付、預置候旨申聞候、

右之通今日私相勤申候間、此段申上候、以上、

辰二月十一日　内田仲之助

糺様

八〇　徳川慶喜恭順ヲ家中ニ諭達

徳川慶喜征東ノ報ヲ得テ、罪ヲ一身ニ負ヒ、東叡山ニ退居謹慎シ、以テ罪ヲ待ツヘキニヨリ、予ノ意ヲ体認シテ、恭順ヲ失フヘカラサルヲ家中ニ諭達ス、ソノ書左ノ如シ、

諭達

此度、御追討使御差向可被遊段、被仰出候や之趣、遙ニ奉承、誠ニ以驚入奉恐入候次第ニ候、右ハ全ク予か一身之不束より生し候事ニて、天怒ニ触候段、一言之申上様無之儀ニ付、何様之御沙汰有之候共、無遺憾奉命致し候心得にて、別紙之通奏聞状（第七九二号の本紙参照）（ママ）差出候、依之東叡山ニ退き、謹慎罷在、罪を一身ニ引請、只管朝廷江御詫申上、億万之生霊、塗炭之苦を免れ候様致度と、至願此事候、就ては何れも予か意を体認し、心得違無之、恭順の道取失ハさる様、可致候、

（静寛院宮日記・戊辰日記）

八一　樺山彦太郎・鮫島元吉ヨリ花山院家理ノ残党処分ノ件ニツキ桂久武ヘ報告

樺山彦太郎・鮫島元吉ヨリ、花山院家理ノ残党処分ノ件ヲ国老桂右衛門ニ報ス、其ノ書左ノ如シ、

報知書

今般花山院殿御隠居家理卿（前中将家威ノ父）西州江御下向、諸所江御潜伏浮浪之徒を集、長州同志と唱へ、剰同国下ノ關辺江も其党潜居町兵等ヲ余多かたらひ、花山院殿内命と申触し、豊前四日市ヲ暴発シ、長州之名を借り、軍器之印ハ薩・長を偽り居、終ニ同所御許山江楯籠、其外天草辺江も同類有之由、相聞得候所より、当正月中旬より長藩野村右仲兵隊引列、豊地為鎮撫出張いたし、賊之魁首及応接説諭相成候得共、渠より粗暴之挙動有之、不得止誅戮し召捕候者共、斬罪梟首相成、前文花山院殿儀も防州室積辺江流浪之所より是亦長藩より致応接、勤　王之御志被為立候ハ、、当今王政御一新之折柄ニ付、一先御帰京被成名義ヲ御正し、西州御下向可然、今通り浮浪之徒ヲ被誘候ては、各藩疑心ヲ抱可申、程好御進為申上由候得共、一円御承引無之、無致方随従之輩召捕賦候所、其度も渠より発砲いたし候を都て召捕、花山院殿は無異議御附士両人一緒ニ室積在家江留置、警固相付、夫々京師御届相成候由、其余党逃去候者も有之、亦は天草辺同類蜂起之向も疾相聞得居、右右仲兵隊は素より、隣国迄も召捕之手配

ニ相及候由ニて、右通豊前四日市混雑之事件、鮫島元吉細々承得候ニ付、精々致探索、尚亦豊後日田御出勢御国許人数江引合、且形行御届可申上賦ニて、為細索去月廿九日下ノ關出船、去ル朔日小倉城下香春町駅所迄参掛候処、昨廿九日昼時分薩州兒島次郎事、上下三拾四人引列兵器相携、筑後松崎出立、豊前中津之様通行為相成由候、右ニ付兼て案内有之候小倉藩より、致面会度段駅役より申参、直様応接方三浦治右衛門外壱人、政府より清水勘解由・牧野彌次右衛門其外等出会、追々家老小笠原織衛儀も同断ニて、承候趣は前文次郎事昨日通行ニ付、右治右衛門より及応接候所、弥薩州と之事候ニ付、何方御出張之段問尋候得共、為差返事も無之、花山院殿江御用筋有之旨申ニ付、従軍人数は浮浪下輩と相見得候得共、其者共よりも家老悴ニて、当分番頭相勤居候者と為申由ニ付、治右衛門より花山院殿御身上之相様、且御許山之趣等申聞候所、少は仰天之姿も見請、疑敷儀も有之候、右ニ付、いケ様尊藩之御人数ニても候哉、問掛候付、決て弊藩之者ニては有之間鋪、当時豊後日田江は先幕役立退ニ付、土地為鎮静少々人数出張候得共、中津辺江人数繰出候儀、無心元と及返答候折柄、亦々右人数之内弐拾四人、前件次郎名前之先触を以、国許重役より飛脚到来、一応国許江為致帰国、同人以差図進退申付候間、駅々人馬可継立との事ニて、追々香春之様着相成由相達、就てハ其期ニ至り、夫成召置候ては浮浪之為、御国名を穢候儀も可有之及愚考、一旦致応接、薩兵之真偽可及尋問致談判候処、夜入着相成候得共、夜分及応接候ては、渠元より前後ニ差迫り候姿も有之、尤日田江差向候得共、同所罷通がたく、四日市辺も同断之所より人数引分ケ、別て恐怖之儀も相聞得候付、いケ様式ニ相及も難計、殊更同所は当分小倉城下ノ事ニて、近比町立混雑之涯ニ付致遠慮、明朝出立之砌、町外ニおゐて応接之筋致決定、若薩名相謀候者ニて、浮浪之所業致分明、難差留逃散之期ニ至り候ハヽ、捕方之手配被成置候儀ハ、御国法次第と致評議候所、同国も先達てより前文右仲、別段問合之趣も有之、弥御藩ニて無之候ハヽ、国中通路之儀も問糺、依申分可召捕含之由ニ付、同二日暁、先立て出立いたし候者江鮫島元吉付足軽ヲ以、薩州と姓名為申掛、其方何方之御藩候哉相尋候処、同く薩藩兒嶋次郎と申ニ付、其名不致承知候、御変名ニても候

哉申聞候所より、実ハ兒玉小介ニて、我之家来ニて候、併同人ハ下ノ關江渡海いたし、花山院御方江可参と申、相別レ候由申出候ニ付、其者留置、外両人参掛候者江同断為相尋候折柄、同人等駈出跡かへりいたし、其徒共早手配之次第洩聞候哉、御内宿屋江立帰、終ニ六弾銃発砲、刀剣抜放シ候所より、手配之兵隊押掛、無異議拾弐人召捕、拾人切捨弐人逃去、右ニ付其場少々及混雑候付、早兒玉小介事不入手ニ候ては、浮浪之所業を以、御国恥を醸出シ候も難計は勿論、同人脱走之身とは乍申、各藩之手ニ被捕候ては、為士情難黙止歎敷相考、同人事同国之内道法四里相隔候大橋之浦江罷居との事故、早々付足軽國分平八郎差遣、弥兒玉小介ニ相違無之哉、於其儀ハ前件花山院御事、且御許山之事件申聞、若哉歎願之筋も有之候得は、役頭江可取次応其意候ハ、、可列参申付差出候、然処同所ニおゐて面会之上形行申聞候所、別て相驚候体ニ有之、左候ハ、、役頭江致面会度旨、同人江相頼候、且亦薩州脱走ハ我一人ニて、其余浮浪之徒と返答為申事を小倉兵隊共聞取余徒之宿所江推参、直ニ銘々生捕候を小介相察し、動揺之色相顕候ニ付、無致方式ニ被及、平八郎并小倉藩より召捕、早々香春之様列帰候上、同人より形行申出候、依之国中騒立隣国江洩聞得候は、案中之式ニ相成候付、直様下ノ關滞在同役樺山彦太郎江元吉より飛脚差立候所、同四日夜香春江参着、長藩野村右仲儀は、四日市より兵隊引列、小倉領之内新町トいふ所迄出張、同人も早速元吉方迄同三日夜参着、早浮浪鎮静之手配もいたし置候段申ニ付、右之次第申聞候所、別て致安心、於其儀は御許山賊党同盟之者ニ相違有之間鋪、何篇相談ニ加度承候、就ては同人儀、兼て元吉懇志之者候ニ付、其筋ニ致返答、併兒玉事ハ各藩之御手数ハ不相掛、早々国許江為致帰国、国法ヲ以及糺問候筋ニ申入相請取、浮浪共取片付等は、自相談ニ可相加段申入置候処、前段右仲より承候趣は、小介儀は右通ニて、隣国之産浮浪之者は、其国々江掛合、其余下輩ニ至り候ては、罪之軽重ニ依り追放、左候て銘々所持之銃器等は、小倉兵隊之気請ニも可相拘、同国江引渡呉候ハ、、如何可有之との儀ニ有之、幸我々趣意ニ落合候ニ付、其儀は最初より決議之上ニ候間、其筋ニ御含可有之致返答、基小介家来抔と一同之者共、口々為申儀も有之候得共、長崎・天草辺蜂起いたし候巨魁之浪士ハ、結城下総介

ニて同人同意之小介と相見得候得ハ、主従ト申訳ニも無之、尤下総介儀は、筑後松崎駅ニおゐて、四日市之一巻飛脚到来、夫より同人ハ長崎之様為引返由ニ付、右通之御取計御同意と致返答、浮浪共ハ小倉藩引請、右通之計ニ致決定置候、左候て右仲儀は、同五日国許江引取相成、私共儀は小介江是迄之次第承届候所、脱走ノ身トシテ薩名を謀り、浪人引列兵器相携、諸国ヲ騒し候儀無申訳段申ニ付、一通ニて召置、同人事駕籠乗付、中途厳重ニ取仕末いたし、前件御兵具方足軽平八郎、并彦太郎召列越候足軽内藤直右衛門・小野龍左衛門才領ニて、同六日暁香春町出立、夜白通行、同九日夜五時分出水米ノ津着、同十一日御当地江着之日賦ニ申付置候、

一前件浮浪鎮撫之一条京師御届之儀は、如何仕候て可然哉、偏ニ頼入との相談之趣、小倉重役より承届候、併右は帰国之上、重役共吟味之趣可有之、致返答置候、然処同国より兼て御国江重役を以、御使者差立候賦罷在候間、幸之折柄ニ付、此度不取敢奉行職之者両人位可差上候、依て何篇差図旁宜敷頼入候段、彼方重役より私共相談承届申候、

一前文浮浪下輩之内全情実不相分、凡下同様之者は、小倉藩嶋村志津摩兵隊下使ニいたし置度儀も、承届置申候、

一小介所持之諸書付并長州浮浪徒所置之書面等数通、差上申候、

一小介所持品之儀は、取調之上付足軽共へ請取方申付置候得共、混雑之央ニて一々難取分、同人一緒ニ送越申候付、只今難申上候、且又所持之内御紋付挑灯等も数張有之候、

右通御座候間、此段申上候、以上、

下ノ關辺滞在
横目　樺山彦太郎
右同詰
横目　鮫島元吉

辰二月十一日

右衛門様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

八二　島津忠義参内拝謁

十二日、忠義昨日参内ノ命ヲ拝シ、本日参内拝謁ヲ賜フ、

修理大夫（島津忠義）

別段之　思召有之候間、明午刻無遅々参内之事、

二月十一日

八三　徳川慶喜東叡山ニ屏居シ王師ノ東下中止ト家名存立ノ周旋ヲ請フ

コノ日、徳川慶喜江戸城ヲ田安慶頼（中納言、家達ノ父）・松平齊民（越後守確堂ト号ス、津山藩主慶倫ノ父）ニ託シ、東叡山大慈院ニ退去シ、書ヲ松平慶永ニ贈リ、王師ノ東下ヲ中止セラレンコトヲ嘆願スヘキ旨ヲ託ス、静寛院亦書ヲ入道公現親王（輪王寺宮）ニ贈リ、慶喜ノ屏居ヲ監督シ、徳川ノ家名ヲ存立セシムルノ周旋ヲ請フ、ソノ書類左ノ如シ、

八三ノ一　松平慶永への書翰

此度御追討使御差向可被為在哉之趣、遙ニ奉承知、誠ニ以驚入、奉恐入候次第御座候、右は全臣慶喜一身之不束より生し候儀ニて、天怒ニ触候段、一言之申上様も無御座次第ニ付、此上何様之御沙汰御座候共、聊無遺憾奉畏候所存ニて、東叡山ニ謹慎罷在、其段下々江も厚申諭し、仮令官軍御差向御座候共、不敬之儀等、毫末も不為仕心得ニ御座候得共、弊国之儀は四方之士民輻輳之土地ニも御座候得は、多人数中ニハ、万一心得違之者無之とも難申、右辺より恭順之意を取失ひ、不慮之儀等有之候節は、猶更奉恐入候而已ならす、億万之生霊塗炭之苦を蒙候様ニては、実以不忍次第ニ付、何卒官軍御差向之儀ハ、暫時御猶予被成下、臣慶喜之一身を被罰、無罪之生民塗炭を免れ候様仕度、臣慶喜今日之懇願此事ニ御座候、右之趣厚御諒察被成下、前文之次第御聞届被為在候様、涕泣奉歎願候、此段御奏聞被成下候様奉頼候、以上、

二月　慶喜

（越前松平家文書）

別紙

本紙奉申上候、京・攝事件之節、詰合居候松平肥後守（容保）并要路之役々、同様奉恐入候ニ付、御処置奉伺候心得ニて、為慎置候間、夫々御沙汰被成下候様奉願候、以上、

二月　徳川慶喜

（戊辰日記・徳川家達家記）

八三ノ二

静寛院宮より公現親王(輪王寺宮)への書翰

此度ハ、誠ニ存よらぬ大事出来致し、朝廷江対し恐入まいらせ候、当家の浮沈此時と、日夜苦心致し居候、慶喜ニも深く恐入られ、謹慎之為ニ御山内へ退去、少々ハ恭順のかと相立候やと存まいらせ候、定めて謹慎之事とハ存候へ共、此上心得違・不行跡等ニてハ、実ニ心配の事に候まゝ、右様の事等も候ハヽ、よく〳〵御説得遊ハし候様、願置まいらせ候、付添参り候家来共、残らす詰切の様子乍、もし〳〵慶喜初内々他行なと候てハ、よろしからす候まゝ、御門々出入にも御心付遊ハし、厳しく御守衛有らせられ候様願まいらせ候、御対顔も有らせられ候ハヽ、よく〳〵慎れ候様御説得の様、くれ〳〵も願まいらせ候、私よりも此程使上京致させ、家名相立候様願候へ共、京都の御様子も分兼、いか様の御さた有らせられ候やと心配致しまいらせ候、何卒当家相立候様、其御所様よりも、御取成の事願まいらせ候、以上、

輪王寺宮様へ　　静寛院

(静寛院宮日誌)

【参照】

其一

二月十二日

一此度上様御奏聞之趣モ有之、被遊御謹慎候ニ付、今暁第四字之御供揃ニテ、東叡山へ御成有之、

一六ツ時弐寸前、大広間御駕籠台ヨリ被為成、

御先立　若年寄(平岡丹波守道弘)　御側(服部筑前守常純)

御刀　御小姓

御供　若年寄(淺野美作守氏祐)　御側(赤松左衛門尉範忠)

中略

一東叡山へ御謹慎中、西城之儀、田安中納言殿(慶頼)・松平確堂(斉民、前美作津山藩主)へ御頼被成候旨、被仰出之、

一　松平確堂

右ハ御委任ニ付、登城御用相済テ退散、

(続徳川実紀)

其二

二月十一日

慶喜謹慎よろしからす候てハ、取成も致兼候趣、諸藩

より申来り候ニ付、慶喜上野山内江退去致し、家政向ハ田安中納言・津山確堂へ頼候趣、慶喜より天御方（天璋院、故家定公夫人）へ申入れ、天御方より承る。（下略）

二月十二日

卯刻過、慶喜退去相済候事。（下略）

（静寛院日誌）

其三

十二日（二月）。払暁、終ニ東叡山中塔中大慈院え御移転御謹み、小臣（勝義邦陸軍総裁）御供に立たず、陸軍士官等へ思召を説諭す、皆勇気と憤激と凛然として涕血す、俗吏は其方向を失して青色而已、

（海舟日記）

八四　廣澤真臣ノ大総督府参謀ヲ罷メ、尋テ参与西郷隆盛・林通顕ヲ参謀タラシム

コノ日、廣澤真臣（兵助）ノ大総督府参謀ヲ罷メテ、内国事務専務タラシメ、参与西郷隆盛・林通顕（玖十郎）ヲシテ、参謀タラシム、（八四ノ一）

廣澤兵助

右大総督参謀被差除、自今以後内国事務専務ニシテ、致所勤候様被仰付候、

毛利元徳家記
広沢真臣履歴書

（八四ノ二）西郷隆盛履歴書ニ云、二月十四日大総督宮参謀拝命仕候、

（八四ノ三）十四日達書

宇和島藩
林　玖十郎

御親征ニ付、大総督参謀被仰付候事、

職務進退録

八五　海江田盛時大学校設立意見書

十三日、海江田盛時（彦之丞）大学校設立ノ意見書ヲ上ル、ソノ書左ノ如シ、

大学校取調并愚考

大学寮令ノ義解ニハ、其寮之事一切ニ式部省ヨリ支配ス、職員并ニ位序左ノ如シ、

一大学頭一人（従五位上）学生ヲ簡試シ、釈奠ノ事ヲ掌ル、位田八町、其禄ハ絁四疋、綿四屯・布拾二端・鍬二拾口ヲ春秋二度給ス、以下ノ給禄皆同シ、

一大学助一人（正六位下）禄ハ絁三疋・綿三屯・布五端・鍬十五口

一大学博士一人（正六位下）博士及助教ハ、経ニ明ニシテ、徳行師ニ堪ヘタルヲ取用ヒテ経業ヲ教授シ、学生ヲ課試スル事ヲ掌ル、

（禄ハ大学助ト同シ）

一大学大允一人（正七位下）禄ハ絁二疋・綿二屯・布四端・鍬十五口

一助教二人（正七位下）職掌博士ト同シ、禄ハ大允ト同シ、

一大学少允一人（従七位上）禄ハ絁二疋・綿二屯・布三端・鍬十五口

一音博士二人（右同）音ヲ教ル事ヲ掌ル、禄ハ少允ト同シ、

一書博士二人（右同）書算博士ハ業術優長ノ者ヲ取用ヒテ、其業ヲ教ル事ヲ掌ル、禄ハ少允ト同シ、

一算博士二人（右同）禄ハ少允ト同シ、

一大学大属一人（従八位上）禄ハ絁一疋・綿一疋・布三端・鍬十口

一大学少属一人（従八位下）禄ハ大属ニ同シ

一学生四百人（五位以上諸王諸臣ノ子孫、及東（大和）西（河内）ノ使部、又ハ八位以上ノ子請願スル者、皆十三已上十六以下聰令ナル者ヲ取用ヒ、式部省ノユルシヲ経テ、経業ヲ分チ受ル事ヲ掌ル、

一使部廿人（史部トハ大和河内国ニテ史官或ハ博士トナリ、姓ヲ賜フ者総テ之ヲ史ト云ヘリ、皇城ノ左右ニ在テ、前代ヨリ業ヲ継

一直丁二人

以上四百三十七人

一偖テ子弟ハ入学九年ト期シ（廿四歳マテ）、学校中ハ長幼ヲ以序シ、月次三度暇ヲ給ス、初テ入学ノ時ニハ、其師ヘ布一端ヲ束脩トシ、外ニ酒食ヲ差出ス、博士・助教是ヲ分取スル定制ナリ、此世マテハ経書悉ク古註ヲ用ヒ、大経（礼記左伝）・中経（毛詩周礼儀礼）・小経（周易尚書）ト三等ニ分チ（孝経論語ハ学者兼テ習フ）、学生先ツ素読シテ後一経ヲ通シ、又一経ト兼通セシムル仕向ニテ、博士・助教毎月三度（休日ノ前日）考試ノ法有テ、子弟ノ素読講義ヲ聞テ、勤惰ヲ記置、毎年七月ニ至リ、大学頭等又其芸業優長ノ者ヲ試ミ、既ニ其受業セシ内ヨリ、大義八条ヲ問フニ、六条以上ニ通スル者ヲ上トシ、四条以上ヲ中トシ、三条以下ヲ下トス、若シ又入学九年之間学業至ラサル人ハ、放退ノ律アリ、

一学生ノ中、二経已上ニ通シテ出仕ヲ願フ者アラハ、大義十条ヲ試問シテ、八条以上ヲ通シ得ハ、太政官ニ送リ其願ヲ達セシム、

一諸国ニテ学生ノ考課ヲ経テ、上等ノ者ハ大学寮ノ学生ニ補ス、

一学生ノ内ニ講説ハ不得手ナレトモ、文藻ニ長シテ、其

才秀才進士ニ堪タル者ハ、同ク又諸国ヨリ挙送ス、
一年中五月ト九月ハ田暇・授衣暇トテ、学生一切ニ暇ヲ給ス、外ニ臨時ノ暇ヲ乞フ者ハ、上官ニ申ス、然ルニ年中不勤日数百日ニ満チタル人ハ、退放ノ律アリ、
一考課ノ次第ハ九等ニ別チ、上・中・下ノ三名アリ、秀才ハ博学高才ノ者ヲ、当日卯ノ時ニ、方略ノ策二条ヲ試ミ出ス、然ニ其日中ニ対策シ、文理倶ニ高キ者ヲ上ノ上トス（正八位ヲ上トス）、文高ケレトモ理ノ平ナル、或ハ理高ケレト文ノ平ナルヲ、上ノ中トス（正八位下トス）、文理倶ニ平ナルヲ上ノ下トス、文理粗通セルヲ中ノ上トス、文理劣滞セルヲ不第トス、明経モ又貢挙ノ法有リ、二経以上ニ通シタル上ノ上ニハ、授ルニ（正八位下トス、上ノ中ニハ従八位上トス）次第アリ、又二経外ニ一経ニ通セシ者ハ、又一等ヲ加ヘ給ス、進士貢挙ノ法モ同様ニシテ、時勢ニ明習シ、并ニ文選爾雅ヲ読得タル甲第ニ（従八位下）、乙第ハ（大初位上）ト等級アル事此ノ如シ、
是上古　王朝ノ制ナリ、多クハ唐典ヲ取捨致セシト察セラル、
右ニ付、愚考仕候処、古制悉皆、今日ニ適合仕候儀、無覚束候得共、畢竟古代ノ制ヲ考候事ハ、今日ノ為メ他邦ノ事ヲ学ヒ候モ、亦我国ノ為ト奉存候間、今日大学校被召立候ハヽ、右之古制ヲ御斟酌有之、先々博士・助教等之間、其任ニ堪候者六七名モ御選用有之、猶又篤ト為遂評議候テ、等級名位迄モ吟味ヲ尽シ、其上ニテ場所御見立、天下之俊秀ヲ御養育有之度奉存候、就テハ此場所御建立之上ハ、中央ヲ国学所トシ、一面ヲ漢学所トシ、又一面ヲ洋学所ト三局ニ御召立、各其成業之人ヲ長官トシ、諸生モ亦タ御人選ニテ、才能ノ士ヲ御許容有之候ハヽ、自然中外之国体モ相分リ、且人々之見聞モ相開候テ、旁可然ト奉存候、偖又上古之事ヲ考候ニ、第一大学校所之御手当薄、少々之処ヨリ諸生モ往々荒逸シ、衰弊出来候テ、却テ無用之長物ト罷成候事、度々見得申候間、此度ハ此弊不出来様、前以大学校高何万石ト田地ヲ以テ御分配、万般御優待有之、且又総裁・副総裁如キ頭役被召立、本締被仰付候ハヽ、至テ永善之御事ト奉存候、将又入学諸生ハ、アマリニ多ク候テハ、優待モ出来兼、且駁雑之弊モ見得候ニ付、一師匠ニ拾人、或ハ拾五人位之賦ヲ以入学為致、御人

選ヲ以御差許相成候ハヽ、天下之栄光ニモ相成、人々之励学モ一入可然事ト奉存候、

右荒増之取調ニテ、至テ雑々敷候間、尚又御賢考之上、御回教之程奉願候、以上、

辰二月十三日　　海江田彦之丞

八六　外国公使朝見ノ議ヲ決シ、島津忠義等ノ奏議ヲ公卿・諸侯ニ採納スルヲ諭ス

十四日、朝堂会議アリ、宮中ニ於ケル彼我ノ礼節ニ関シ、議論百出ス、夜ニ入リ叡慮ヲ候ヒテ定マリ、公使ヲ京師ニ召スコトニ決ス、是ニ於テ十五日、公卿諸侯ニ公使朝見ノ事ヲ暁諭シ、去ル七日、忠義等連署ノ疏ヲ示ス、然ルニ後宮ニ於テ、公使召見ニ異論ヲ唱フルモノアリ、議定ノ公卿之ヲ憂フ、岩倉具視・松平慶永ト共ニ御前ニ候シ、君主カ他国ノ公使ヲ召見スルハ、万国普通ノ礼タルコトヲ具奏ス、上之ヲ納レ給フ、ソノ暁諭書、左ノ如シ、

八六ノ一　暁諭書

方今外国之事情

御洞察被　遊候処、世態変革一朝之儀ニ無之、被　知食候、随テハ別紙七日ニ戴ス列藩建言之次第モ有之候条、建言之通

御決定之

思召候間、為見被下候事、

島津忠義家記
鍋島直大家記

八六ノ二　春嶽私記

春嶽私記ニ云、十四日、公太政官ヘ御出仕之処、俄ニ御参　内相成候様、岩倉殿(具視)ヨリ御達有之、下参与之面々モ同様、未半刻頃参　朝之処、右ハ外国公使参　朝之儀、彼ヨリ不申出已前、此ヨリ被　仰出度段、浪華東久世殿(通禧)ヨリ御申越、小松(帯刀)ヨリモ後藤(象二郎)迄申来ニ付テナリ、申刻頃ヨリ奥御廊下ニ於テ、総裁宮・岩倉・中山(忠能)・正三(正親町三条実愛)・(実則)徳大寺等之諸卿公、並下参与迄、御一席之大評議ナリ、拝礼之節、握手或ハ屈膝等ニ付テ之俗論甚敷、更ニ不相決シテ夜ニ入、遂ニ　叡慮伺ト申事ニ相成、戌半刻頃迄御手間取、亥刻前ニ至リ、漸ク京師ニ被召参　朝可被命ト御決議有之、其段早々浪華ヘ御返事有之由、拝礼之実際ニ至リテハ、極内状ハ未決之由、岩倉殿歎話セラレタリ、御場処之儀モ、南殿条城両議有之、遂

ニ南殿ニ被決タリ、十五日在京諸侯総参　内被命、外国交際之儀御布告有之、下参与之面々モ参集ヲ被命タリ、此時外国人ヘ　御対面之儀、後宮之物議等有之、未決ニテ当路之公卿殊之外苦悩セラル、暮時前、公岩倉殿ト御一処ニ　天前ヘ被為候、更ニ交際之事情詳悉極言御明弁有之、御退出之後、岩卿猶滞座ニテ御諫諍被申上、漸クニシテ拝礼モ可被命ニ御決定有之由、

八六ノ三　公卿・諸侯奏議

方今外国之事情

御洞察被遊、越前宰相始献言申上候通、

御決定之就

思食、猶亦為御見被下候趣、謹テ拝見仕候、依之御請書差上候付、宜敷御執

奏可被下候、以上、

二月十五日　　島津少将（忠義）

島津忠義家記

八七　大坂裁判所総督醍醐忠順等外国公使ニ応接シ天皇近日召見ヲ告ク

コノ日、大坂西本願寺ニ於テ、大坂裁判所総督醍醐忠順・副総督伊達宗城、兵庫裁判所総督東久世通禧、外国事務掛及ヒ諸藩家老等列座ニテ、各国公使ト相会シ、新ニ外国事務局ヲ置キ、交際之事ヲ管スルヲ諭シ、且　天皇近日将ニ公使ヲ召見セントスルヲ告ク、ソノ始末左ノ如シ、

一東久世殿発話、我日本政体復古

帝自ラ政権ヲ握リ、外国之交際モ、一切

朝廷ニテ曳請、裁判可致旨意ハ、過日兵庫ニ於テ布告セシ如ク相違アルコトナシ、此節外国事務局ヲ建立シ、交易通商一切ノ諸事件、悉ク外国事務官之裁決ニアルヲ以テ、今日改メテ

朝廷守護ノ列藩ト共ニ、各国公使ニ会同シ、此盟約ヲ定ム、自後普ク日本人民ト外国人民トノ交際、厚ク誠実ヲ尽シ、互ニ疑惑ナキヲ以テ主意トナサン、故ニ大小ノ事件、外国ニ関係スルノ務ハ、外国事務局ノ専任ナルヲ以テ、我等ニ就テ

帝ニ建言スルヲ要セヨ、

各国公使曰、先般兵庫ニテ布告アリシ其証明白ニシテ、今日改テ列藩会議、

帝普ク政令ヲ下シ、両国之人民ノ為メ、広ク信睦ヲ

求メ、互ニ誠実ヲ旨トナスハ、我各国ニ於テモ、兼々渇望セシ処ニシテ、感悦ノ至ニ堪ヘス、自今
朝廷
帝ヲ以テ日本ノ主府ト仰キ、万事其政令ヲ奉セントス、
一又曰、此度万国ト我カ
帝ト条約ヲ改メシ上ハ、各国公使ニ
帝自ラ対面シ、盟約ヲ立ン、故ニ不日上京アルヘキ旨、各国公使ヘ可申入
帝之命ヲ奉シ候、
公使曰、恐入候、談合之上明後日否可申上、
一又曰、当今戦争之後ハ、京攝及諸所ニ鎮撫之師ヲ出シ、過半其政令行ハレ、既ニ各国之諸侯ヲシテ、徳川慶喜征討之師、京ヲ発セシ上ハ、不日ニ其成功アルベキハ勿論ナリ、自ラ横濱・箱館外国人在住之場所ハ、
朝廷ノ官吏ヨリ人民安堵ノ令ヲ下スベシ、則慶喜ヲ征討スル事実、明白ノ罪状書面ヲ布告スヘキナリ、
公使曰、慶喜ヲ討伐ノ師、既ニ京師ヲ発セシ上ハ、関東ノ形勢安心ナリカタシ、若シ早ク
帝ニ拝謁スルコト能ハスンハ、速ニ浪華ヲサリ、横濱ニ在ル人民之為メニ、彼地ヲ鎮撫センコトヲ欲ス、
一又曰、明日中ニハ上京之日限申来ルヘク、夫マテ滞坂、其上進退セラルベシ、
公使曰、
帝ニ謁スル期限之日数ヲ確定シ、以テ此事ヲ約セン、
一又曰、今日必相分ルベシト雖、弥確定スルハ、明十五日ト定ムベシ、
公使曰、然ラハ明後十六日朝十字、米国公使館ニ於テ再会シ、各般之諸事件ヲ約定セン、
右之通ニテ相済、申之刻各国公使退出セリ、

太政官日誌

八八　大総督熾仁親王征途ニ献言ヲ奉ル

十五日、征東大総督熾仁親王征途ニ上ルニ方リ、献言ヲ奉ル、勅シテ闈外ノ権ヲ委シ、錦旗・節刀ヲ授ク、是ニ於テ親王参謀正親町公董・西四辻公業、下参謀林通顯・

西郷隆盛、錦旗奉行穂波経度・河鰭實文等ヲ従ヘ、筑前・津和野二藩ノ兵ヲ率キテ啓行ス、ソノ献言書左ノ如シ、

献言書

今般熾仁東征大総督ヲ奉蒙、今日発途可仕候、然処関東ハ姦凶之藪淵、天下之豪族ニ御座候ヘハ、朝廷御安危之分、実ニ今日之一挙ニ御座候、熾仁其命ヲ奉畏候ヨリ、寝不安席、食不甘味、只管簡拔之明ニ奉答対度志念ニ御座候得共、才弱敵強其効難建欤ト、夙夜慨歎罷在候、然トモ正賊不並立ハ、必然之勢ニ御座候ヘハ、　陛下赫々之御徳威ニ依リ、海内之侯伯ヲ奚率シ、協心戮力忘身暴露、逆豎ヲ不日ニ斃シ、上安宸襟、下濟黔黎度至意ニ罷在候、乍然内外一心、上下同体尽力不仕候テハ、其廉モ難見儀ニ御座候、幸ニ当今侯伯及士庶人、名義ヲ重シ　天朝ヲ尊コト、近古未曽有之事ニ御座候ヘハ、陛下刑賞黜陟ヲ明ニシ、勧懲之道御示被為遊候ヘハ、海内速ニ　王化ニ可奉服候、然ル処此砌人情探索仕候処、政令多門ニ出テ、一事両端前後齟齬仕候事件モ有之、物論沸騰之由承及痛心罷在候、隨テ管見之廉モ有之候得共、東征期逼、軍務鞅掌、奉献言隙モ無御座、無拠黙止仕候間、向後何卒聖聴ヲ開張シ、下情ヲ洞察シ、億兆之臣民　王化ヲ奉渇望之心ニ被為充、中興之鴻業速ニ被為建之御処置、区々之心奉冀望候、熾仁総裁之大任ヲ辱シ、代天工雖統百揆、為人駑鈍、且遠離左右深入敵地、累世蟠結之賊徒ヲ芟夷仕義ニ候ヘハ、専心ヲ寄軍務不申候テハ、其功難建候、乍恐　陛下此上事無大小、諸有司ニ諮諏シ、公明正大之道ヲ被為開、且諸軍暴露之労ヲ御憐察、政道一途ニ御勉励被為遊候ヘハ、海内之臣民何許可奉感戴哉熾仁生平之至願不過之候、依テ右件不顧忌諱奉献言候、何卒其微衷ヲ憫ミ、御察納被仰付度義、冀望之至ニ御座候、熾仁誠恐誠惶頓首百拝、

二月十五日　　有栖川宮家記

八九　土佐藩戍兵仏艦ヂユプレークスノ兵員ト争闘シ十余人ヲ殺傷ス

コノ日、土佐藩兵ノ堺浦ヲ戍ル者、佛艦ヂユプレークス(Duplex)ノ兵員、十七人ノ上陸徘徊スル者ヲ襲撃シ、十余人ヲ殺傷ス、内外国事務諸員周旋シテ、終ニ二十三日ニ至リ、

堺妙國寺ニ於テ、兇行者二十人ニ死ヲ賜フ、自刄者十一人ニ及ヒ、佛国ノ臨監者、自余ノ処刑ヲ止ンコトヲ請フ、朝廷令シテ自余ノ兵士九人ヲ土藩ニ還付セシム、ソノ関係書類ノ重要ナルモノ左ノ如シ、

八九ノ一　外国掛上申書

東久世公堺表ヘ御立越、善寳院龍海、北新地之増番休七ナル者、現ニ当日之顛末ヲ見聞セシ箇条左之如シ、

一十五日四字頃、川蒸気船一艘・バッテイラ一艘、拾四人程乗組、一艘八人乗組、一艘八人之内七人、住吉辺ヨリ上陸（原註、人数之儀ハシカト不分明）

一仏人六名、旭茶屋ニテ休息スルコト、凡ソ一時余、

一土州警衛人数二十八人、供廻リ拾七八人、鳶口ヲ持ツモノ十人程、旭茶屋之東ノ口土壁ヲ打破リ、家人ヲシテ去ラシメ、夷人処置ハ此方ニテイタスベシト、二階ニ登リテ発砲セリ、砲丸六人ヲ倒スト見請タリ、

一土人、仏人弐名ヲ追フテ二十人程追掛、川蒸気船ヲ鳶口ニテ引寄、直ニ発砲ス、其節士官ト覚ヘタルモノヲ打取タルヨシ、其他之モノハ、砲丸ヲ避ケテ水中ニ沈没セリ、

一仏国人一名残リ居候者ハ、破戸ノ石垣中ニ隠レタリシヲ、鳶之者之ヲ見付、鳶口ヲ持テ無理ニ打付ケ、仏人ハ倒レタリ、倒レシ仏人ハ、暫時之間ニ蘇生セシト見ヘ、バッテイラ船ニ乗移タリト見ヘタリ、

申之上刻ナルベシ、

一異人乗リシ船（原註、バッテーラ船ト曰）ハ、一丁程ヲ隔テ発砲ス、其旗章ヲ打タリ、

申之上刻頃出船、

一川蒸気船之器械ヲ損シタリト見ユ、

海底ヨリ見出シタリシ死屍疵書、左ニ、

一士官ト見ヘタル者壱人

額ヨリ脳ヘ抜候砲丸一ケ所、左手脈所ヨリ手之内ヘ抜砲丸一ケ所、左之親指之先ヨリ高指之先ヲ打切ル、

一水夫壱名

右之目ニ疵アリ、外ニ無疵、

一水夫壱名

背ヨリ脇腹ヲ打抜、

一水夫壱名

前ニ手疵ヲ負候モノニ抱キ付テ沈没セリ、

一水夫壱名

両眼打抜キ、アギト少シク疵アリ、脇腹打抜、

一水夫壱名

口之脇ヨリ打込、裏ヘ抜ル、
一水夫壱名
背ヨリ右之腹乳之上ヘ抜ル、
右之通相違無御座候、
二月十六日十二字

五代才助
西園寺雪江
中井弘蔵

外務省記
外国事務局叢書

八九ノ二　小松清廉書簡

大久保一蔵様　小松帯刀

御用封ヲ以テ申上候通、土州堺表ニテ云々之義ハ、誠ニ不容易重大之事件ニ付、自速ニ御評議、総裁並内国事務・外国事務早々御下坂相成、深ク御手不被召付テハ、実ニ不相済義ハ勿論之事ニテ、則御吟味相打決候之儀ハ、急速相片付不申候テハ、以来之為夫限之事ト奉存候故、是非参与之内ヨリモ、四五人之処ハ下坂被仰付度候、佛国之事ニハ御座候得共、ケ様之事ニ相成候ト、各国公使モ、議論モ致シ候事ニ御座候ヘハ、久世公・宇和島公御出ニハ御座候得共、下之処甚無人、五代壱人ニテ誠ニ込入候付、速ニ御下坂之処、御周旋被下度奉願候、昼夜外国人ヘ曳合、内国之人数取鎮方ハ勿論、難捨置公事訴訟モ有之、壱人ニテ実ニ致方モ無之、誠ニ苦慮千万御推察可被下候、只今ヨリ佛公使等ヘ談シニ出掛、差急キ用向迄、早々如此御座候、何卒御執計可然御頼申上候、早々以上、
二月十六日

外務省記

以上数条文中往々読ミ難キモノアリ、他書之参考スヘキナキヲ以テ、一ニ原文ニ従フ、

八九ノ三　土佐藩司令士上申書

泉州堺為取締被差置罷在中、昨十五日外夷海浜ニ於テ乱暴致シ候様、市人ヨリ訴出候ニ付、直様立越候含ニテ、人数相調候処、御軍監府ヨリ配下引率、急々出張候様御沙汰ニ付、即罷出候処、御軍監府御出張ニ相成居候テ、道中ニ於テ外夷乱暴之場所御尋申候処、手引之者差立候様、御演説有之中、市人我藩御人数モ、西ヲ目掛走リ行候ヨリ、手引来ヲ不待、跡ヲ慕ヒ浜辺市

中へ参候処、戸ヲ閉、門ヲ鎖、大ニ恐懼之模様有之、如訴夷人乱暴致居候ト相心得、走リ行候中、同所ニテ夷人両人ヘ、御人数之中応接ニ及否ヤ、行兵共ニ応接致候得共、通弁官之者附居不申、彼勿論言語不通、逃去之形有之ヨリ、先相執ヘ、然ル後談判ヲ遂、可撃ヲ討候含ニ御座候処、果シテ両人之中一人脱走致シ、剰ヘ其節御印之幟ヲ横取シ、稍シテ取帰シ候ヘ共、右等現在之暴挙、況ヤ最初ヨリ外国奉行之命ヲ不伝、通弁官ヲモ不取、我政府之許シヲ不受、卒然ニ入港イタシ、終ニ上陸、猥ニ婦女子ヲ恐怖セシメ、或ハ社閣ヲ猥ニ穢シ候段、一々言語ニ絶シ候次第ニ付、彼逃ルヲ追ヒ、同湊ニ至候処、彼等両人ニテ無之、十余人計バッテイラニ乗リ居、同船ヘ彼夷人モ乗移、已ニ出船之形相顕候処、如此大暴発之夷人、其侭返シ候テハ、第一御国辱ニ相成而已ナラス、取締之兵ヲシテ右様之如ク返シ候テハ、私職掌モ相立不申ト相居リ、不得止御軍監府之御下知ヲモ不待、為打払候間、此段御達申候、以上、

辰二月十六日

外務省記

八九ノ四

伊達宗城上申書

以飛檄得貴意候、然ハ昨夜以来、返々及報告候於堺佛ト土藩之事、今朝ニ至リ、土藩方為取調候処、何分佛ヘ答ニ及ヒ候様、明白ニ不至、無止東久世一同、佛公使宿寺ヘ罷越、及応接候心得之処、多用云々ニテ不致面会候、尤無程書通ニテ懸合趣、通弁原註徳川臣塩田三郎也ヲ以テ申候故引払、英公使宿寺ニ参居候処、別紙翻訳相添差越候故、写差出シ候、実ニ不容易大危急ニ至、焦慮当惑此時ニ御座候、勿論無他策故、五名之者存亡ニ不係、相渡義緊要ニ付、追々手配之上、東久世ニモ行向相成候、此上両三人ニテモ尋出候ハヽ、亦談判之手懸出来可申、万一不尋出時ハ必ス開事端、右可及力平穏ニ応接ハ可致心得候処、全可相整哉甚懸念仕候、先々不取敢此段申上候、

一上京之時モ此事件発候ニ付、取消之姿ニ相成候、是マテ以御鼎力、日頃迄御沙汰相成、今一歩之処ニテモ、意外之憂患ト相至、御互ニ切歯痛憤ニ不堪、乍然此度モ厳当然之御裁断届候ハヽ、右挽回モ可仕、尚是相伺可申候、

一佛・伊・孛・亜ハ第二時乗船、佛之外明朝出帆之由、

英・蘭ハ明早天乗船、出港ハ未タ不相分候、概略右之趣申上候、恐々、

二月十六日　　宇和島少将（伊達宗城）

三條大納言（実美）殿

岩倉具視殿

外務省記

八九ノ五　佛国軍艦塔載某報告摘録

千八百六十八年三月十一日（我二月十八日）兵庫発、米国公使フアン・フアルケンボルク（R. B. Van Valkenburgh）氏ノ公信、別紙同年三月八日蒸気ジユブレキス（Dupleix）号船乗組ペチトール氏報告撮要、

小蒸気ニハ乗組拾五人、内一人ハクワルトルマストル・ロミユール、今一人ハ等二等工師ヂユレルニテ、小鯨船ニハ、旗手パリス、見習士官グイリヨン乗組タリ、旗手パリスハ小蒸気ヲ岸ニ着ケ、グイリヨンヲ留メテ、人数ヲ守ラセテ、近傍ヲ測量シ居レリ、ヂユレル及ロミユール両人、埠頭ヲ散策スルノ許可ヲ受ケ上陸シ、後チ他ノ数人モ亦タ上陸セリ、暫クシテ一人ノ双刀士ニ逢ヒ、彼方ニ招カレ、忽チ一隊ノ兵士ニ取巻レタリ、而シテ兵士ハ、ヂユレル、ロミユールノ手ヲ取リ縛セントセリ、ロミユールハ之ヲ免レントセシカト、ヂユレルハ其為ス所ニ任スヘシト勧メタリ、ロミユールハ、ヂユレルニ漸クニ小蒸気ノ方ヘ退クヘキヲ示シ、不意ニ其捕リ押ヘタル兵士者ヲ振離シテ、船之方ヘ行キシニ、兵士等ハ之ヲ追テ ロミユール船ニ飛込ミ、ステムノ縄ヲ切リ、火夫ニ蒸気ヲ起セト呼ヒシトキ、両人共ニ打タレテ死シタリ、是ヨリ右ノ兵士等ハ数分間連発セリ、乗込ハ不意ノ襲撃ヲ受ケ、唯水ニ飛込ミ船後ニ隠ルヽ外、他之考ヘナカリシカ故ニ、其数人ハ溺死セシモ測ラレス、最早活キタルモノアルノ様子ナケレハ、兵士等ハ発砲ヲ止メテ退キタリ、乗込七人ヂユレルノ外ハ皆重傷ヲ受ケタリ、右ヂユレルハ混雑ニ乗ジテ水ニ飛込、水夫之内一人、発砲ノ頓止ニ乗ジテ船ヲ押出シ、艫ヲ取リテ走リ出テ、再ヒ砲丸ヲ受クルコトナクシテ、船ニ達スルヲ得タリ、パリスハ本船ニ帰リテ此異変ヲ告ケタルカ故ニ、余ハ（ペチ・トーアルス）ウユニユス及ヒジユプレキス船ノ艀船ニ、兵力ヲ具フルヲ命シ、直チニ医官トパリスト共ニ、小蒸気ノ方ヘ急キタルニ、途中ニテ我小蒸気ノ帆ヲ揚ケテ来ルニ逢フ、船中ニハ七人アリテ、内一人無疵ナルノミ、外ニ

二人ノ死骸アリ、因テ見習士官クリヨン共七人ハ、行衛相分ラス、恐クハ先ツ打タレテ後チ溺レタル者ナルベシ、

八九ノ六　前書中死傷人員

即死二人
負傷六人
無難一人ヂユレル
後、水底ヨリ見出シタル者七人
パリスト云人ハ無事、

外務省記

死傷之数、二書齟齬スルモノアリ、孰レカ是ナルヲ知ラス、

八九ノ七　英国公使書翰

以書状致啓上候、然ハ去ル十六日ノ誤六八五午後、堺表ニ於テ、仏国軍艦附属川蒸気乗組人数、非道之殺害ニ及候段、同日夜中第一時頃、拙者儀各国同列聞及候時、皆一同憤怒イタシ候事、閣下達御承知之通御座候、夫ヨリ十一ケ時ヲ相経候原註、右殺害ニ及候ヨリ凡十八ケ時節、閣下達ヨリ各国公使へ始末ヲ被申述候言訳ハ、全ク詐言ニテ、行衛ヲ不知仏人之儀ニ付、注進無之ヲ聞キ、猶一層公使共憤怒イタシ候事ニ候、右強悪ヲ悪ムハ勿論、且　御門政府ニ於テ、夫迄之取計方不宜ヲ満足ニ不思情ヲ示サンカタメ、拙者並各国公使共、大坂ヲ退去イタシ候、猶引上候節、閣下両人へ申進候ニハ、行衛不知仏人精々探索ヲ遂、万一彼等殺害ニ逢候ハヽ、必包ミ隠シ無之様トノ事ハ、閣下達モ定メテ記臆セラレ候事ト存候、然ルニ右非命ニ逢ヒ候仏人之死骸ヲ引渡セシ手数モ、最早今日ニ至テ全ク相済候上ハ、仏国公使ヨリ右無故国民ヲ殺害セラレ、政府並国章ヲ侮リ候段、　御門政府ヨリ十分其処置ニ及ヒ可申様、申立候筈ニ候、右申立ル大意、仏国公使ヨリ聞及候処、無理無之、全ク公平ナル儀ト存候間、成丈遅滞無之、早速　朝廷ニ於テ御承知有之候様致度候、

右様之暴悪所業ヲ捨置候時ハ、　御門汚名ヲ受候故、早速十分ナル処置ヲ得テ、汚名ヲ雪キ、悪人ヲ差押ル権威有之証拠ヲ被立候事、　朝廷之大事ト存候、右ニ非サレハ外国ニ於テ、　朝廷ヲ高崇スルヲ不可得候、此段可得貴意如此御座候、以上、

二月十九日　　〔Sir Harry S. Parkes〕ハルリー・ヱス・パークス

大坂在留

外国事務総督

東久世中将

伊達伊豫守

両閣下

外務省記

八九ノ八　小松清廉書翰

堺之儀追々申上候通ニテ、及発砲候人数二十人、昨日割腹之御運ヒニ相成候半トシテ、佛公使ヨリ申出候趣有之、趣意ハ別紙ヲ以申上候、差向キ之義故、〔東久世通禧〕久世公・〔伊達宗城〕宇和島公ニテ御裁決御答相成申候、一人ニテモ助命之事ニテ、無此上仕合御同慶奉存候、

山階宮・伊豫守様御同伴、今日佛之軍艦へ御出ニ相成申候、細事可申上候得共、過刻後藤氏出立上京相成候ニ付、同人委細心得相成候趣ニ付、筆略仕候、佛ヨリ昨日差出候書翰ハ、後藤氏持参故、別段不差上候、此旨要詞迄如此御座候、以上、

二月廿四日二字　　小松帯刀〔清廉〕

木戸準一〔孝允〕郎様

廣澤兵〔真臣〕助様

大久保一〔利通〕蔵様

八九ノ九　舊邦秘録

明治元年

一佛国公使曰、外国ニ対シテハ不都合、御門政府ニ対シテモ不忠ノ至、佛ニ対シテモ此上モナキ無礼之事、此節之事ハ佛一国ニ限ラス、外国人ト云所ニ候得ハ、佛公使一人ニテ、申上候事ニモ不至候付、前以各国ヘ申談候テ、全体　御門政府ニ対シテモ、佛ニ対シテモ余程之恥ヲ与ヘ、外国ヘ対シ不都合之儀、三ケ条相当候、此節柄　御門政府ニ敵対イタシ候同前ニ心得候、若此上不都合之儀有之候テハ、外国交際之事モ夫限之事ニテ、戦争ニモ相成候故、以后之御所置第一之事ニ候、右之事件モ各方ハ御分リ相成候間、京師之御役人ヘ不残此趣意貫徹イタシ候様、御申上相成度候、

一御所置之儀ハ、此節号令ヲクタシ候隊長両人、其外発砲イタシ候人数、堺表ニヲヒテ御所置之節ハ、外国人士官ハ勿論、兵卒ニイタルマテ出張可致候、右解死人〔下手人〕

所置相当之上、死人手負等之人数、家内為養料十五万ドルラルヲ、政府ヨリ御差出可相成、右償ハ土州ヨリ差出候様有之度候、

一外国人ニ対シ、以後之事モ有之候得ハ、一同安堵モ出来兼候間、此度相示候道理相立候タメ、外国事務大総督之御方、此舶ヘ御出相成、御挨拶有之候得ハ、各国ニ対シ面皮モ相立、日本国ニ達シ候テモ安心可致候、土佐侯モ一緒ニ御出ニ相成度候筈ニ、土佐在国ニ候間、同行之儀不相叶候、又曰、左様ナラハ土佐城下近所ヘ二艘蒸艦可差越、其処ニテ土佐侯御地ニテ、御挨拶相成度事、

一土佐之方ニ役人一人、ベニース船ヨリ両三人、土佐ヘ差越候方都合可宜、併両三日前ニ右役人ヲ差越候方ナレハ、尚更可然候、右之事件ハ各国公使談合之上、申上候事ニ候、此上ハ少々モ無減少、速ニ御所置可有之候、

一長谷様〔参議、信寓〕

勅使御下坂之儀ハ、至極御入念之事ニテ、何時ニテモ御出相成度候、

一開港場所外国人参リ候処ニテハ、土州之兵卒先ツ当分之内、御差留相成度事答承、件々何分久世ヘ申談、御門政府ヘモ相伺報知之上、早々所置振可及候云々、右之通相嘶、御所置可相叶哉之旨及尋問相調候、英公使ハ別段御面会ニ候処、一同相談ニ預候訳ニテ、此節ハ別ニ公平之所置ニ候、弥期日通リ可相調哉ト、大ニ掛念イタシ候気味也、

八九ノ一〇　大久保利通日記

明治元年戊辰二月

十六日

一太政官ヘ出席、去ル十四日於堺表、仏人ヘ土佐人数ヨリ及砲発、手負七人・即死二人、七人ハ死体不相分由申来候、小大夫〔小松帯刀〕書状今夜各国公使上京一条御手当有之候、

八九ノ一一　土方日記

明治元年二月十六日

十六日　晴

朝拝如例、早朝ヨリ岩倉殿ヘ罷出拝謁、色々御用有之夫ヨリ上屋敷ニ行、大小監察ニ致面会、七時比引取候所、小野湊馬場蒼心及要五郎等来候ニ付、致小酌候テ、

皆々暮比引取候事、入夜五半比ニ至リ、又々被為召候ニ付、参殿之所、今月泉州堺表ヨリ来ル、我藩ヨリ為鎮撫右地ニ差出置有之候兵隊共ト、仏人ト争闘之事出来、仏人三人即死、七人負傷、五人行方不知、二人ハ無事ニテ引取候由、

右ニ付、色々御用出来、実以テ不容易次第ニ付、大ニ御心痛被為在、直ニ岩倉様ヘ罷出、御使者之趣赴申上、拝謁之上、段々御議論相伺、夫ヨリ引取候所、又々大久保市蔵方ヘ参候様被仰付、参候テ致面会引取候、否鶏鳴比ニ相成候、休足イタシ候、

九〇　七日ノ島津忠義外五名ノ連署建言書採納ニ決ス

コノ日、忠義朝命ニ依リ、留守居内田政風仲之助ヲ従ヘ、参内セシニ、去ル七日越前侯（松平慶永）外四侯ト共ニ建議セシ外国交際ノ議ハ、各所ニ意見ヲ徴シ、終ニ採納ニ決セシニヨリ、公卿・諸侯ニ示ス旨ヲ達セラル、ソノ書類左ノ如シ、

九〇ノ一　達示

方今外国之事情　御洞察被　遊候処、世態変革一朝之儀に無之、被　知食候、隨ては別紙七日ニ載ス列藩建言之次第も有之候条、建言之通　御決定之　思召候間、為見被下候事、

九〇ノ二　留守居届

御書附二通

内一通

朝廷より御添書

一通

外国交際之儀ニ付、越前侯并此御方外四藩様より御献言之儀、

参与

東園中将様（基敬）

坊城侍従様（俊章）

右は今十五日五ツ半時、太守様被為召、若御所労被為在候は、御重役　御仮立江可罷出旨御達ニ付、御手前様御出被成候処、御別紙之趣、右両人より写取候様、左候て今日中御請書可被差出旨御達ニて、御下り相成申候、御別紙二通差上申候、右之通

今日私御同伴仕候間、此段申上候、以上、

辰二月十五日　　内田仲之助(政風)

関山(関山)
糺様

追て被遊　御承知候上、御請書御差出被成度奉存、
此段も申上候、以上、

【参照一】

大原重徳建白書

此度六藩ヨリ、献言之趣蒙
勅問奉敬承候、愚昧小臣存意言上仕候モ、恐縮之至ニ
候得共、聊愚存言上仕候、献言之趣意ハ、万国洞察之
人々、殊ニ万世不抜之事柄故、忽御奏上之事ニテ、御
氷解被遊候御模様ト奉存敬承仕候、乍去尚又存意候ハ
、可申上ト之
聖慮、誠以難有存候ヘハ、伏臓可仕筋ハ毛頭無之候間、
一二言上仕、奉汚
聖聴候、
一是迄徳川政権ヲ執リ、我意ヲ張リ、
朝廷ヲ奉軽蔑候時節ト雖、攘夷被
仰出、天下有志之輩、如何計難有カリ、何卒報国ト
思込、身命ヲ投候者幾千人、斯ル次第ハ、皆国辱ヲ
歎キテノ事ニテ、遂ニ徳川天罰ヲ蒙リ、暫行方モ不
知相成、速ニ　大政御掌握被遊、兼々思召之通リ、
攘夷ニ可推遷ト、諸臣ヲ始メ天下之衆諸無僻之人々、
神州之正気モ可引立事、立テ可待抔申相喜居候、乍
去天下未タ治平之半ニモ不至、紛乱多端之折柄、中
々以攘夷可申出様モ無之、何分国内御平治之上ハト
存込居候処、献言之末語ニ至リ、参
朝ヲモ被命候様、御賛成被遊候様ニト有之候ヘハ、
無程夷人モ入京致シ候様可相成候、左候テハ彼尾州
ヨリ言上有之候国事ニ死亡之者共ヘ、地所ヲ賜リ、
其霊ヲモ可祭ト之難有
御沙汰モ一時ニ消滅可仕、然ハ
朝廷之御儀ハ何カ御実ヤラ、御不条理ニテハ実以衆
諸総テ向フ所ヲ不弁、
朝廷ヲモ誹謗仕候様之事ニ可立至ト、深恐縮歎慨ニ
不堪事ト奉存候、乍併既ニ御氷解被為在候上ハ、是
迄御祈願被為在候
神祖ヲ奉始、御代々之
御神霊ヘモ御氷解之趣被仰上、衆諸ヘモ十分御布告
相成、同氷解仕候上被許候様之御事ニモ相成候ハ、、

少シハ承服モ可仕候ヘ共、只今言上有之、諸臣之
勅問モ如形ノ事ニテハ、迚モ感服ハ仕間敷、慶喜暴
政之時ヨリモ甚敷、人々異存ヲ懐キ、更ニ擾乱可仕
ト、千憂万苦不堪言語事ニ有之候、仰願クハ、何卒
今暫之処被差延、天下相定候上、御許容被為在候様
仕度、此儀下文ニ述候、全体之処政権御掌握被遊候
哉否、忽夷人ヲ被近附候様之御儀被為在候テハ、是
迄年来攘夷之
聖諭ハ皆御偽言ニテ、全徳川ヲ徒ニ困苦セラレ候迄
欤、但此上ハ打亡シ、和親交易ヲ
朝廷ニテ被遊度儀御心組ニテ、正議ヲ御主張被遊候
様ニ相当リ、天下ノ有志ニ対シ面皮モ無之、悲泣血
涙之事ニ候、元来夷人ハ犬羊ト唱ヘ候ヘ共、近来ハ
大ニ事情モ相分リ、応対モ易ク抔薩藩士モ申居候間、
薩藩士ニ殊更ニ被命、国内之実情ヲ明白ニ申聞セ、
政権
朝廷ニ帰スト雖モ、慶喜之乱未落居、紛紜擾々、中
々外国交際トコロニ無之筋ヲ懇ニ申聞セ、国内治平
之見込相立候迄、何事モ見合呉候様、尤右交際之事
御聞済ニ相成候上ハ、二年三年之後タリ共信義ニ於
テ相変ル事ナケレハ、何ソ延日ヲ論スル事アランヤ、
信ヲ守レハ日之延ル程固ク相成候ハ、神州人之定情
ニテ、夷人ト異ナル所ニ候、此辺ヲ能々了得為致候
様、薩士ニ被命候ハヽ、御請可申ト奉存候、ケ様ニ
不被遊候テハ、慶喜モ未服罪事故、忽異存ヲ生ル事
可知事ニ候、又天下之衆諸モ又異存ヲ起シ、更ニ慶
喜ニ属シ候者モ出来可致、左候得ハ更ニ擾乱ト成可
申候、ケ程之事ニテ献言ハ尽キ不申候得共、何程書並
ヘ候テモ、其趣意ハ唯今夷人入京候テハ、忽人心立
騒瓦解可仕候間、延日被　仰出候ヨリ外ナク候、偏
ニ此延日之事懇禱仕候、死罪誠恐誠惶頓首、

二月十六日　　重徳

大原重実手記

【参照二】

春嶽私記節録

十五日在京諸侯総参内被命、外国交際之儀、御布告有
之、下参与之面々モ参集ヲ被命タリ、此時外国人ヘ
御対面之儀、後宮之物議等有之、未決ニテ当路之公卿
殊之外苦悩セラル、暮時前公、岩倉殿ト御一処ニ　天
前ヘ被為候、更ニ交際之事情詳悉極言、御明弁有之、

御退去之後、岩卿猶滞座ニテ、御諫諍被申上、漸クニシテ拝礼モ可被命ニ御決定有之由、

【参照三】

宗城通禧書簡

一各国公使上京拝謁ノ儀、御決定被仰出候条、誠以為皇国大事御互ニ雀躍致候付テハ、ケ条ヲ以御申越ノ趣、於当方可遂吟味ニ付テハ、明十六日第十時談判後、五代才助指登申候、

公使坂地発足、十八日(伏見一泊)・十九日御対面(早朝上京第一字、敬二字敬参内)、即夜伏見迄為引取、翌廿日下坂、

右ノ都合ニ致テハ如何哉、御対面十九日ニ御決定ニ被為在候ハヽ、前条ニ可取極候、若又主上御不例ニテ、十九日ニ為行兼候ヘハ、其積ニテ指延可申候、日限・剋限等約束通リニ不参候テハ、西洋人ニ対シ、不信義ニ御座候テ、折角ノ盛典モ水泡ト可相成ト苦慮仕候、帯刀(小松)ヨリモ右ケ条可相伺候トモ、一応申入候、早々頓首、

二月十五日第一字

宗城(伊達東久世)通禧

三條亜相公

閣下

時下御自愛専要奉存候、乱筆海恕是祈ル、

付紙

十九日着京、

廿日参内拝謁、

右ニテモ宜哉、西洋人滞京日数無之方可然存候、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
明治元年二月四

九一　議定兼内国事務総督松平慶永等ニ命シテ各国公使朝見ノ事ヲ掌ラシム

明治元年二月十六日、議定松平慶永・参与後藤元煒等ニ命シテ、各国公使朝見ノ事ヲ掌ラシメラル、

復古記

各通

越前宰相〔松平慶永〕
後藤象二郎〔元煒〕
大久保一蔵〔利通〕
木戸準一郎〔孝允〕
廣澤兵助〔真臣〕
中根雪江〔師質〕

今度外国人上京、参内御用掛被仰付候事、

内国事務局叢書
春嶽私記

九二　山内豊信父子ニ堺浦争闘ノ処分ヲ命ス

復古記

明治元年二月十七日

山内豊信父子ニ命シ、大坂ニ赴テ堺浦争闘ノ事ヲ処分セシム、翌日豊信疾ヲ以テ、老臣ヲ差遣スルヲ稟ス、九二ノ一

土佐前少将

昨十六日、於堺港、仏国人深浅之測量致居候処、其藩士無故砲撃致候趣、不容易儀ハ申迄モナク、各国新ニ御交際ノ儀ハ、先般　御布令モ有之、万国之公法ニ依リ参朝等之儀モ、自分及建言御採用モ被為在候折柄、右様

之次第出来候テハ、被対各国信義不被為立、殊ニ
朝廷御興廃ニモ拘リ候危急之大事、全ク於其藩醸成候
義、於前少将格別尽力至当之応接処置可致候、別紙十五日ニ見エタリ佛国公使ヨリ差出候間、申達候事、
但病気之趣ニハ候へ共、
皇国浮沈之大重事ニ候間、精々所労相扶、下坂可
致候事、

外務省記
山内豊範家記

昨十六日ノ字、宜ク一昨十五日ニ作ルベシ、蓋シ山
内豊範上申書此誤ヲ伝ルナリ、

九二ノ二　大久保利通日記

明治元年戊辰二月

十七日

一早天、小大夫(小松帯刀)ヨリ又々書状到来、仏人殺害一条ニ付、
十七日第八字迄死体取揃可差送、若其通不参候ハヽ、
如何様御詫有之候トモ、承知不致トノ事候由、別テ大
難事ト申来、早々一両人下坂イタシ候様申来候、小生
下坂ニ相決シ、三條公ヘ参殿相伺、其通イタシ候様御
許容ニ付、早々出殿、
太守公ヘ拝謁、伏見ヨリ一字出帆、順風ニテ四字過着
坂、裁判所ヘ出席、久世公・宇和島侯ヘ拝謁、小大夫
ヘ逢細事承候処、今朝死体不残引渡、安心イタシ候由
ノ噺也、

九二ノ三　土方日記

明治元年二月

十七日　雨

朝拝如例、早朝ヨリ被為召候テ、致拝謁候所、家老深
尾鼎(重先)参殿ニ付、堺一条之事被仰聞、尚又御書付類共、
拝見被仰付候、同人ヘモ致面話候テ、九前比ヨリ又々
二條城代ニ御使被仰付候テ参候所、三條公ニモ、今日
ハ押テ太政官代ヘ御参出被為在候、堺一条ニ付テナリ、
山階宮様・春嶽侯亦、堺一条ニ付下坂被仰出候事、八
時比ヨリ前田同行ニテ、川東万岩方ニ行、肥前両生及
水野等ト愉快ニ酒共飲候テ、遂ニ致一泊候事、

九二ノ四
明治元年二月十八日　土佐少将(山内豊範)

別紙之通同姓前少将へ
御沙汰有之候、此度之事件実以不容易次第ニテ、新ニ
各国
御交際被為在、先般　御布令有之候へトモ、未万国之
公法ニ依リ
御交際之御規則モ不相立、殊ニ
御国内モ未タ御平定ニ立至ラス、内外之事件、日夜
御寝食モ不被為安候折柄、カヽル患害ヲ醸成シ、深ク
宸襟ヲ被為　悩候、少将事ハ当主之儀ニモ有之、
皇国之御艱難厚ク相心得、父子同心速ニ奉安
叡慮候様被
仰出候事、

外務省記
山内豊範家記

九二ノ五
明治元年二月十八日
今月十六六、宜シク五ニ作ルヘシ日、於堺港仏国人測量ノ折柄、私藩
士容易ニ砲撃ニ及ヒ候事件、今般外国御交際被為在候
御初政ノ時ト申、
皇国信義ノ得喪ニ関係仕、奉悩
宸襟候ヨリ、私儀所労タリ共下坂仕、至当ノ取締仕候様
勅旨欽遵誠以恐懼仕候、勿論右事件ニ付テハ、迅速下
坂仕、藩士共糺問措置可仕心得ニテ、乍恐
勅命ヲモ不奉竢訳ニ候得共、私儀此頃持疾差重、脳痛
疲労平臥ニ罷在、舟輿扶病ノ儀モ難相調、不得止家老
以下重臣共、為名代為致下坂、至当ノ措置仕早々奉安
叡慮候様、尽力可仕旨申聞差遣候、私ニ於テモ病躯勉
励仕儀、少ニテモ相調候ハヽ、続テ発程可仕候、
二月十八日
山内容堂
山内豊範家記

九二ノ六
明治元年二月
十九日佛国公使書翰
御門マセステ之
外国事務掛伊達伊豫(宗城)守閣下ニ呈ス
佛国帝マセステ全権ミニストルヨリ
御門政府へ充テ指出セル書面
於大坂湊佛国ソンゼツトウエヌス船中
千八百六十八年三月十二日

三月八日、堺表ニ於テ、土佐之人佛国海軍之者ニ対シ、暴戻ノ挙動ニ及候ニ付、其償トシテ、佛国ミニストル其国帝政府ニ代リ、左ニ挙ル箇条通リ、所置アランコトヲ

御門マセステ政府ニ請ン、

第一箇条

堺ニ於テ土佐ノ人、兵隊ヲ指揮セシ士官両人并仏人ヲ殺害セシ者、残ラス此書面京師ヘ届キシ後、三日ノ内右暴行ニ及ヒシ場所ニ於テ、日本ノ官員并佛国海軍兵隊ノ眼前ニ於テ首ヲ打斬候事、

但当節大坂ニアル土佐ノ家老、其場ニ立会可申事、

第二箇条

殺害ニ逢ヒシ士官并水夫ノ家族等、扶助ノ為トシテ十五万ドルラル高ヲ土佐侯ヨリ差出シ、是ヲ佛国政府ヘ可相納事、

第三箇条

親王ノ内、　朝廷之外国事務第一等ノ執政タル人、佛国兵隊ノ指揮官ヘ其政府ヨリ詫辞ヲ申入ル丶為、ウエヌス船中ニ来リ可申事、

第四箇条

土佐侯自分、ウエヌス船中ニ来リ、堺表ニ於テ自国人、仏人ニ対シ暴行ニ及ヒシ事、如何ニモ気之毒ニ存候、就テハ宜寛恕セラレ度候トノ趣ヲ、自分申述ラレ候事、尤之カ為土佐之城下近辺ニ右船ヲ相廻スヘク候事、

第五箇条

以来土佐之者共兵器ヲ帯、外国人之為開キタル港ヲ通行シ、又ハ爰ニ滞留スル事ヲ厳敷禁スル事、佛国ミニストルニハ、右五ケ条速ニ一々所置アラン事ヲ望ム、此公平ナル申立ヲ其通所置セラレ、事落着スル上ハ、此程悄然離間セシ懇情平和ノ交際ヲ改メテ速ニ取結ハン事ヲ望ム、

外務省記

九二ノ七
明治元年二月

山内豊信ヘ達書

土佐前少将

先般以

勅使厳重被

仰付候通、於堺表其藩士対仏人及暴動候始末、已ニ各国御交際被為在候上ハ、公法ニ依リ御所置可被遊

思召ヲ以、
朝廷御取糺被
仰付候処、各国公使申談之上、佛国公使(Léon Roches)ヨリ別紙箇条
之通、願出候ニ付、其筋ヲ以御処置被
仰付、尤第一箇条之儀ハ、来ル廿三日朝、於同所執行
可有之候、就テハ東久世前少将・宇和島少将ヘ被
仰遣候儀モ有之候条、右指揮ヲ受可取計旨、
御沙汰候事、
但所労ニ付テハ、名代之重臣早急可致下坂候事、
二月

外務省記
山内豊範家記

九二ノ八
明治元年二月

山内豊範ヘ達書

土佐少将

別紙之通、同姓前少将(山内豊信)ヘ被
仰出候条、其旨厚ク相心得ヘク候、尓後右様之暴挙ヨ
リ御国難ヲ醸成、奉悩
宸襟候儀無之様、闔藩ヘ鄭重可相示
御沙汰候事、
二月

外務省記
山内豊範家記

九二ノ九
明治元年戊辰二月

大久保利通日記

十九日
一第七字宇和島侯佛船ヘ御出、公使ヨリ各国公使談合之
上紙面差出シ、土佐人処置ノ一条、廿三日迄相運候様
トノ趣ニテ、是ヲ奉シ早々上京候様承知、今晩十二字
比発船イタシ候、

九三　議定・内国事務総督山内豊信再ヒ解職ヲ請フ

明治元年二月二十一日
是ヨリ先、議定内国事務総督山内豊信、病ヲ謝シテ其職
ヲ辞ス、未ダ報セス、適家臣堺港争闘ノ事アリ、
是日、再ヒ書ヲ上リ、罪ヲ引キ、見職ヲ解カンコトヲ請

フ、

九三ノ一

私儀、曩之亥年及昨卯年ノ夏、

勅命欽奉上京仕候得共、従来之持疾、客土ノ風気ニ被中候哉、両度共発動仕、御暇奉願帰国仕候、乍然

朝廷ノ御為奉尽微衷度、天下政権

朝廷ニ相返シ候様、愚考建議仕、追テ此度ハ所労タリ共、取繕上京候様重キ

勅命ニヨリ、療養中ニハ候得共、難有欽奉入覲仕候処、大政御更始被為遊、不肖ノ私迄議定・内国事務総督ノ両官職ニ被　命不堪恐悚、然共辞譲モ不仕御請申上、大政維新ノ御基本相立候様、夙夜苦心仕候得共、当春モ如先度持疾発動仕、殊ニ今月初メヨリ胸痛甚シク、難苦ヲ忍ヒ廷議ニ与リ候儀ハ、予メ覚悟仕居候故、心底ニハ奮励仕候得共、唯其志而已ニテ、体躯困羸、万一ノ御奉公モ難相調、益以恐悚仕候、仍テ反覆思惟仕候ハ、涓埃ノ報効モ無之、此侭臥床ニ日月ヲ送リ候ヨリハ、寧暫時ノ中両官職辞シ奉リ、専ラ療養而已仕候得ハ、却テ速ニ快愈ニ赴可申哉、体躯康健ニ復シ候上ハ、報国ノ赤心存込候丈ケ、職務黽勉仕候儀相調可申、今日ノ事務輻湊ノ折柄、右様休官ノ儀奉願候ハ、惶懼ノ至ニ候得共、誠以テ万不得已情実縷述仕候ニ付、此段不悪様御聞取被　仰付度、奉伏願候也、

二月十三日　　山内容堂

山内豊範家記

九三ノ二

明治元年二月二十一日

此度堺表ニ於テ、私家来共仏国人ヘ対シ妄挙仕、皇国ノ安危ニ係リ候重大ノ事件ヲ引起シ候ヨリ、奉労聖慮、私儀多罪惶懼可申上様モ無御座候、自今世界ノ公法ヲ以、外国御交際被為在候砌、殊ニ私儀当官職ニ被差置候上ハ、彼表道程隔遠、前日之妄挙全ク不存訳トハ乍申、平生家来共ヘ号令厳明ニ行届居不申ヨリ、右等不容易事件ヲ生シ候ニ付、此上

朝廷寛宥ノ　御沙汰ヲ以、官職如元被差置候共、私儀自省慚懼仕候ニ付、議定・内国事務総督共、御免奉蒙度奉存候間、此段宜様御評議被　仰付度、奉伏願候也、

二月廿日　　山内容堂

山内豊範家記

九三ノ三

明治元年二月二十日

豊範家記ニ云、豊信客歳宿疾ヲ勉励シテ出京セシニ、二月初旬ヨリ胸痛甚シク、殆ト危篤ニイタリシカ、医薬験アリテ、漸ク快愈ニ及ヘトモ、イマタ鞅掌ノ職務ニ堪カタケレハ、本官ヲ辞シ奉リタキ旨ヲ上疏セリ、

九三ノ四
明治元年二月二十日

豊範家記ニ云、豊信病ニ依テ辞表ヲ上リ、イマタ免職ノ　御沙汰モアラサリシニ、堺浦暴動ノ事アリシヨリ、自ラ省ミテ安カラヌ事ナリトシ、重テ辞職ノ書ヲ上リヌ、

九三ノ五
大久保利通日記
明治元年戊辰二月

廿一日

一休日、昼后三條公（実美）へ参殿、岩倉公（具視）御出、木戸（孝允）・廣澤（真臣）参ル、土州御処置ニ付、段々御論有之、是非号令官両人ニテ相済候様、談判不出来ヤト御尋ニ付、迚モ相調不申、乍併戦争ニ御決定相成候得ハ、談判不調ト申訳モ無之ト委曲申上候、今晩入夜帰、今晩得能（良介）入来、

九三ノ六
中外シンブン二号
慶応四年二月二十一日

仏蘭西人、泉州堺ニ於テ殺害セラレシ事（横浜新聞ノ訳文）

今二十一日、亜墨利加ノ軍船モノカシー兵庫ヨリ当港ニ来着ス、亜墨利加・普魯社・以太利ノミニストル同船ニテ帰リ来レリ、英ノミニストルハ、上京ノ支度ニテ尚彼地ニ滞留ス、

此船ノ載セ来リシ書状ヲ見ルニ、去ル二月九日備前ノ士官、死刑ニ処セラレタルヲ怒リ、日本人復讐ノ為ニ佛国水夫ヲ許多切害セシ由ヲ申越シタリ、蓋シ土佐人カ、又ハ土佐人ノ装ヲナシタル備前人ナラン、窃ニ思フニ、諸国ノミニストル、先日備前士官ノ切腹ヲ止メナハ、佛国水夫モ命ヲ失フ事無ク、日本政府ニ於テモ、此事件ヨリ起ルヘキ災ヲ免レン、

右人殺ノ一件、諸説紛々タリト雖モ、左ノ書多分ハ実説ナルヘシ、

西洋三月十二日、即日本二月十九日、神戸ヨリ出タル書翰ノ文

昨日キウシウト名クル船ニ、一封ノ書ヲ託スト雖モ、思フニ此モノカシー船、却テ速ニ到着スヘシ、依テ

短文ヲ以テ一事ヲ報告ス、日本二月十五日、堺ニ於テ一小船ニ乗リ居タル佛国ノ水夫共、不意ニ土佐兵隊ノ為ニ襲ハレ、切害セラレタル者十一人、水ヲ泳イテ其場ヲ逃レシ者ハ僅ニ一両人ニ過キス、是レ明白ニ兼テ巧ミタル偽計ト見ヘ、最初ヨリ其子細ヲ告ル事モ無ク、又水夫ノ内小船ノ外ニ誘出サレ、其後取巻カレタルモ有リ、諸国ノ公使右罪人ヲ速ニ刑罰セン事ヲ京都ニ訴フルニ、土州ハ勿論、京都政府ニテモ至極心ヲ用ヒテ、之ヲ尋ネ出シ、刑シテ以テ外国人ニ謝セント欲スルノ様子ナリ、既ニ其罪人ノ内捕ヘラレタル者モ有之由、

昨日神戸ニテ、右ノ死骸ヲ埋葬ス、諸国ノミニストル悉ク葬ニ会ス、其時墓前ニ於テ、佛国ノミニストル彼死人ノ同僚ニ向ヒ、後日必ス大ニ死人ノ為ニ復讐ヲセント云ヘリ、

右死人ノ内刀剣ヲ以テ殺サレタル者ハ、只一人ニテ、其余ハ皆銃丸ニ中レリ、○或説十六人ノ内死者十一人ト云、

ウキリス、サトウノ両人再ヒ京都ニ入リ、サトウハ土佐侯ノ側ニ在ル由、

前便ニ諸国ノコンシユル皆、大坂ヲ引払ヒシ由ヲ申送リシカ、英吉利コンシユルハ、イマタ彼地ニ留在スト云、江戸ヲ攻メンカ為ニ、京都ヨリ三万ノ大軍ヲ発スルトノ風聞アリ、

右文中ニ云ヘル如ク、キウシウ船ニ託シタル書状到着セハ、堺ニ於テノ人殺ノ始末、明白ニ相分ルヘシ、依テ其以前種々ノ異説アリトモ、敢テ信セサルヘシ、

九三ノ七
明治元年二月二十二日

東久世通禧書翰

芳札謹誦候、御多祥抃悦存候、然ハ佛・土之一件、頃来御焦念之程奉察候、先便ヨリ申上候通、誠以程克談判ニ相成、為

皇国大幸御同慶之儀ニ候、付テハ土州人刑罰之儀ニ付、御懸念被成候儀、万機敬承候、尤発砲之人ト申テ、二中隊ヲ極刑之目的ニハ無之、乍去十六日之仏人之勢ニテハ、

皇国百万之生霊之塗炭ニ関係シ、

王政復古之盛典モ已ニ地ニ墜可申ト、実以失生色次第、

幸哉今日之勢ニ立到リ、誠以皇運之盛ナルヲ感佩スル

ノ期ニ御座候、尓後之憂戚モ御尤ニ存候得共、目前之困難ニ比スレハ、如何様ニモ処置可付存候、尤外国局ニオイテ、土州ヘ発砲人数相調可申出、一昨日申付候処、昨日二十七人、号令官二人、合二十九人申出候得共、多人数ニ付、猶又発砲ニ及候者、篤ト取調候様申付候処、号令官共ニ合二十人ニ取調申候、右人体簿書ヲ以、今日十二時ヨリ発船、伊豫守兵庫表ニテ、談判致候心得ニ御座候、今度之処、先日之備前之儀ト相違ニテ、甚タ暴戾ヲ極メ、且佛之死人合十六人（死ノ下、恐クハ傷ノ字ヲ脱シ、六ノ字ハ七ノ誤ナラン）ニ付、士官両人位ニテハトテモ不相済、重テ談判ニ立到リ候テハ、前日ヨリノ手ツ、キモ水泡ト可相成、重テ夫ヨリ減少之談判之儀ハ難相成候、

一土州人士法ヲ以テ、割腹ニ治定、明廿三日、堺妙國寺ニ於テ刑之、

一土人帯兵器候者、開港場指留之事、

右御処置相済後、期限相立候様談判可致候事、

所置済迄ハ咄出来カネ候、

御懸念之筋御尤ニ存候得共、右等ヨリ外国局ニオイテ取計出来カネ候間、左様御承知可被成下候、

一英・蘭両公使上京拝謁、委曲長谷相公ヘ申置候、今日兵庫表談判之様子、後藤象次郎明日帰京可申上候、

一長谷下坂、兵庫ニテ仏軍艦ヘ乗込、挨拶有之、

朝廷ヨリ御叮嚀之儀ト西洋人申居、至極之都合ニ御座候、猶委曲之儀、長谷ヨリ御聞取可被下、今日上〔洛カ〕坂ニ相成候、

右之件々荒増及貴報候、早々大乱毫海恕万禱候也、

二月廿二日十二字　　通禧

副総裁
（三条・岩倉）
両公
閣下

内国事務叢書
外務省記

九四　外国事務局輔東久世通禧・伊達宗城各国公使ニ復書シ犯罪者ノ処刑ヲ告ク

明治元年二月二十二日

是ヨリ先、佛国公使レヲン・ロッシュ（Léon Loches）、書ヲ外国事務総督伊達宗城ニ致シ、堺港争闘ノ処分ヲ要求ス、英・伊以

下各国公使モ亦書ヲ致シテ、速ニ其求ニ応センコトヲ陳ス、廷議其言ニ従フ、是日外国事務局輔東久世通禧・伊達宗城、各国公使ニ復書シ、明日ヲ以テ犯罪者ヲ刑スルヲ告ク、

九四ノ一

二十二日佛国公使ヘ復書

西暦三月八日、堺表ニオイテ、貴国軍艦ヨリ、士官并水夫十七人、沿海浅深測量之為メ、於堺表上陸イタシ候ヲ、発砲ニ及候段、実以暴激之所業ニ立到、実以是迄

皇帝政府ヨリ各国ニ対シ、信実ヲ尽サレ候交際之主意ニモ相背キ、別テ慚悔之至候、依之一同会議之上、万国之公法ニ依リ、今後遺念無之様、篤ト衆議ヲ尽シ候上、

皇帝政府ヘ言上イタシ、約定之日限ヲ誤ラス、別紙土佐兵隊暴行ニ及候人数、士官二人、兵隊十八人都合二十人、不残明廿三日我日本之刑法ニ基キ、於堺表刑罰ニ可処候、就テハ貴国ハ勿論、各国之検使立合之上、処置可致候、

但殺害ニ逢ヒシ士官并水夫之家族扶助金トシテ、十五万ドルラルヲ、佛国政府ヘ土佐国ヨリ差出候儀ハ、堺表之処置落着之上ニテ、期限ヲ相定メ可申事、

土佐侯兼テ

皇帝政府ヨリ上京イタシ候様、申達置候ニ付、不日着坂之上、速ニウエヌス船中ニ来越相成可申、

右ニ付土佐海辺ヘ貴船相廻サレ候ニ不及事、

外国総裁之親王山階宮、堺表落着之上、土佐人暴行挨拶、且ハ

皇帝政府ヨリ今後益外国交際上ニ付、信義ヲ被尽両国人民之為メ、実意相顕シ度、応接之為メ来訪可相成事、

土佐人兵器ヲ帯シ、開港内ノ徘徊差止置候事、

右之通ニ候間、疑念ナク篤ト了解セラレン事ヲ希フ、謹言、

辰二月廿二日　　伊達伊豫守
　　東久世前少将

佛国
モンシユア・レオン・ロツシユ
閣下

外務省記

書中別紙原記ヲ佚ス、但シ二十人姓名ハ、下之処刑之条下ニ見ユ、

九四ノ二
明治元年二月二十二日

英・伊以下各国公使ヘ復書

西暦三月八日、於堺表仏国人ニ対シ、土佐兵隊之者、暴発ニ及候儀ニ付、過日貴翰ヲ以テ被　仰聞候趣、委細致承知、右事件早速衆議ヲ尽シ、万国之公法ニ依リ、皇帝政府ヘ言上之、則明二十三日、右暴行ニ及ヒタル士官二人、兵隊十八人、都合二十人、我日本之刑法ニ基キ、刑罰可処候、委細之儀ハ佛国公使ヘ申遣置候ニ付、尚同人ヨリ御聞取可被下候、此旨如此御座候、以上、

二月廿二日　　伊達伊豫守
東久世前少将

英
伊
孛
蘭
米
公使姓名

閣下

外務省記

九四ノ三
明治元年二月二十三日

本日佛国公使書翰

此程、堺表ニオイテ、仏人ヲ殺害セシニ付、死刑ニ処セラルヘキ土佐二十人之内（原註、此内三人ノ首長ヲ籠ル）拾壱人メニ到リ、暫ク見合セラレン事ヲ、日本在住佛国全権ミニストルヨリ、宇和島（伊達宗城）少将閣下ニ願フ、

日本在住佛国全権ミニストルレオン・ロッシュ於
ウエヌス船中
千八百六十八年
三月十六日

外務省記

案スルニ註文三ノ字恐クハ二ノ誤、

九四ノ四
明治元年二月二十三日

舊邦秘録

諸名士詩歌

妙國寺自殺士之詩歌

慶應四年二月、仏人十六人攝津海ヲ測量シ、十五日泉州堺ニ至ル、此時土州藩堺ヲ戍リシカ、仏人ノ来ルヲ見テ、直ニ砲撃セシニ、或ハ傷キ、或ハ死スルモノ半ニ至レリ、佛国公使大ニ怒リ、我政府ニ迫リ、日本顕官仏艦ニ至リ、謝スル事、日本士官刀ヲ佩ビテ、外国人居留地ニ入ルコトヲ禁スル事、償金十五万元ヲ出シ、且仏人ヲ殺シタル人々ヲ刑ニ処スル事等ノ数ケ条ニシテ、三日間ニ答ヲ求メ、若シ遅延セハ、兵端ヲ開クヘシトイヘリ、政府ハ直ニ土州侯ニ処置ヲ命ス、侯即十五万元ヲ出シ、仏人ヲ殺セシ廿人ノモノニ命シ、同月二十三日堺妙國寺ニ於テ自殺セシム、佛国公使臨テ之ヲ見ル、皆各々怕ル色ナク、辞世ノ詩歌ヲ吟シ、潔ク割腹セシカハ、十一人ニ及ビタル時、公使大ニ驚キ恐レ、神色沮喪シ、請フテ死ヲ止メシトゾ、十一人ノ姓名年令及辞世ハ左ノ如シ、

箕浦元章 通称猪之吉 年二十五

除却洋気答国恩、決然豈可省人言、唯令大義伝千載、一死元来不足論

西村氏同 通称左平治 年二十四

風に散る露となる身はいとはねどこゝろにかゝる国のゆくすえ

池上光則 通称三吉 年三十八

皇国の為ニ我身をすてゝこそ茂るもくらの道ひらきせん

大石良信 通称甚吉 年三十八

我もまた神のみくにのたねなれハ猶いさきよき今日の思ひ出

杉本義長 通称広五郎 年三十四

皇国のミ為となしたわがいのち捨る今はに胸のすずしさ

勝賀瀬稠迅 通称三六 年二十八

かけまくも君のみためとひとすちにをもひ迷はぬ敷島の道

山本利雄 通称哲助 年二十八

塵ひちのよしかゝるとも武士の底のこゝろはくむひとそくむ

森本重政 通称茂吉 年三十九 〔ママ〕

人こゝろくもりかちなる世の中に清心の道開きせむ

北代堅勝 通称建助 年三十六

身命はかくなるものとうち捨てゝとゝめほしきは名の

みなりけり

稲田楯成 通称貫之丞 年二十八

時ありて咲散るとても桜花何かおしまん大和たましゐ

柳瀬義好 通称常七 年二十六

魂をこゝにとゝめて日の本の武き心を四方に示さむ

頼古狂最後ノ一詩

古狂縛ニ就ク十日以前、宮原節庵（京都人）宅ニ於テ、詩会アリシ時ニ作リシ詩ナリ、此比幕府ヨリ天下慷慨ノ有志者ヲ捕縛スル説アリテ、古狂モ心中自カラ幽鬱不楽、依テ此作アリト、青柳高鞆（義雄）氏獄中ノ記録ニ見タリ、

鬱陰又陰鬱不開、今宵快人意、大雨一声雷

九四ノ五
明治元年二月二十四日

二十四日復書

昨夜被差立候貴翰、致拝見候、然ハ昨日、堺表ニオイテ仏国人ヲ殺害セシニ付、死刑ニ処スベキ土藩人二十人之内、十一人処死刑候処、残ル九人丈ハ、見合呉候様被願候ニ付、得其意候、右ニ付

朝廷ヘ言上致置候、堺出張役人ヘモ右同様申渡候、以上、

外国事務総督

宇和島少将

佛国公使

モンシユア・レオン・ロツシユ

閣下

外務省記

按スルニ、当時既ニ外国事務総督ノ官ナシ、蓋シ宗城未タ新官ノ命ヲ拝セサリシナリ、

九四ノ六
明治元年二月二十四日

東久世通禧書翰

山階宮今廿四日、於堺表仏軍艦ヘ御乗込御挨拶、明廿五日於神戸、英之甲鉄船ヘ御出、御挨拶之事、

一土州刑人之儀、九人丈命乞之儀、佛之見証人ヨリ申立候、

右ハ

朝廷之権威ヲ見ル為、始メハ強ク申立、始メテ威権之行ハル、ヲ見テ、又自国ノ仁恕ヲ示スナラン、何ニシテモ、九人之命ヲ助ケ得テ、御同慶之儀ニ御座

候、委細象次郎ヨリ可奉申上候、匆々大乱毫海恕是祈、

二月廿四日第七時　通禧

宗城

三條亜(実美)相閣下

外務省記

九四ノ七
明治元年二月廿四日

二十四日仏公使上書

於大坂港ウエヌス船中

千八百六十八年三月十七日

御門陛下ニ呈ス、

陛下并貴政府高位之諸有司等、此程堺表ニ於テ、土佐之人佛国海軍之者ヘ対シ、極メテ凶暴之所業ニ及ヒシトノ報ヲ聞キ、深ク憂戚セラレシ趣ヲ以テ、佛国帝ニ代リ、余申置タル償之箇条ヲ、急速其通リ処置アリシハ、偏ニ貴国政府、外国人及ヒ国民ニ対セラレ、公平友睦且果断アルノ趣意ヲ示メサルヽ確証ナリ、

右様之証ヲ示メサレシ上ハ、余ニオイテモ、余カ淑徳ナル

皇帝之厚意ヲ表シ、死刑ニ処セラル、モノ、内十一人、既ニ其刑ニ処セラレ、其余九人ノモノハ、今当港ニアル余カ国海軍之指揮官等之求請ニヨリテ、差留メシ趣、余モ不取敢是ヲ聞届ケタレハ、右九人之者助命之儀ヲ許容シ給ハランコトヲ爰ニ願フナリ、

陛下ニハ、愛民之心情深キヲ以テ、必ス此事ヲ許容シ給ハンコト、更ニ疑ヲ容レサル処ナリ、左スルトキハ此事ヲシテ、全日本国ヘ遍ク知ラシムルコトニ至ルヘキ哉、是迄外国人ヲ以テ、仇讐ノ如ク思ヒシ人々等モ、向来右様之誤惑ナキ様、尽ク心意ヲ氷解セシムルコト出来スヘキ哉、外国人ニハ唯其兄弟タランヲ欲スルノミナリ、謹言、

日本在留

佛国全権ミニストル

レオン・ロッシュ

外務省記

九四ノ八
舊邦秘録

明治元年戊辰二月

土佐少将家来弐拾人、於堺表貴国之海軍ヘ対シ及暴行、

其罪ヲ正ス之期ニ至リ、拾壱人ヲ切テ、後跡九人助命致シ候様、過日貴翰ヲ以申立之趣可致採用旨朝命有之候ニ付、拙者共ヨリ御報如此御座候、以上、

二月廿九日

肥前〔鍋島直大〕侍従
宇和島〔伊達宗城〕少将
東久世前少将〔通禧〕

佛国公使
モンシュア・レオン・ロッシュ
閣下

九四ノ九
明治元年二月三十日

土佐藩へ達書

土佐少将

其藩士、堺表ニ於テ外国人ニ対シ暴行シタル二十人、兼テ割腹被　仰付処、於其場仏人ヨリ歎願ニ倚リ、九人ノモノ暫時見合朝廷ニ　奏聞致呉候様申出、其後別紙上ニ見ヘタリ之通、再応助命之儀願出候ニ付テハ、此節之所置専外国ヘ関係イタシ候儀ニ付、出格之寛典ヲ以、死一等ヲ免シ、其藩ヘ被下置候条、流罪可申付事、

二月晦日

外務省記
官中日記

官中日記ニハ、三月朔日ニ載セタリ、

九四ノ一〇
明治元年三月一日

土佐藩請書

今般土佐守藩士、於堺表外国人ヘ対シ及暴行候事件ニ付、仏人ヨリ依歎願、　御寛典之御処置被　仰出奉畏候、早速大坂表土佐守ヘ申遣、其上ニテ御請可申上候得共、不取敢此段御請申上候、以上、

山内土佐守内
山内右近

山内豊範家記

九四ノ一一
明治元年三月

佛国公使書翰

御門政府
外国事務掛
東久世前少将

伊達伊豫守

両閣下へ

昨日(原註三月八日)、佛国コルウエット・エット・デユプレツキス船乗組候者、右船指揮之命ニヨリ、士官両人附添、堺港へ相越、港内深浅之測量致居候処、土佐之人無故此モノへ間近ニ迫リ、鳥銃ヲ以テ俄ニ襲ヒ打、拾七人之内三人已ニ即死、七人手疵ヲ負ヒ、纔ニ壱人無難脱遁レ、其他之者ハ(但シ士官一人附添)、何処へ行キシヤ、更ニ不相分候、如此之事件ハ、世間稀ニ見聞致候事ニテ、最戦狭(原註本ノマヽ)之所行ト可申、就テハ佛国ミニストル、ウヱヌス船中へ一ト先引取居、尚右行方不相知人々、残ラス死生ニ拘ハラス此方へ御差返シ被成候様、明朝第八時迄猶予致居候間、此段大坂ヲ領セラル当時之政府へ申進置候、万一右之通御処置無之ニ於テハ、何様之御訳御申入被成候トモ、夫ニ係ラス、カヽル文明国之法則ニ違ン事(原註、原書不分)ナハス、殊ニ此程取極メシ約定及条約之文ニ背違シ、又当今　御門政府近傍ニオイテ重役ヲ勤メ、本ト其大名之家来之処置行ハレ候、是ニ対シ相当ト心得候所置ニ及候事ニ有之候間、此段申進置候、謹言、

於大坂千八百六十八年三月九日

日本在留

佛国全権ミニストルレオン・ロセス

外務省記

九五　去年江戸邸変後諸家へ預ケラレタル藩士婦女子及ヒ佐土原藩士等人名書

一去年江戸邸変後諸家へ預ケラレタル藩士婦女子及ヒ、島津淡路守(忠寛、佐土原藩主)家来等藤堂和泉守(高猷、津藩主)ニ托セラレ引渡サレタル人名書(一月十六日)

(記)

稲葉美濃守(正邦、淀藩主)申渡書　○小人目付二人伺書　○藩士名面　○島津淡路守家来名面　○小人目付二名届書

○柴山良助外三名伺書外三件　○堀勘兵衛外四名口書外数件　○藩吏届書外口書数件

宇和島屋敷へ廻達セラレタル浪士人名書

九五ノ一(島津忠義)

松平修理大夫家来并嶋津淡路守家来共、藤堂和泉守家来へ引渡人名前

原書ハ、旧幕府小人目付小川高信ノ所有ニシテ、即チ

本書人員護送セシ一人ニシテ、其手扣ニ係レハ、確実ナルモノナリ、

慶應四辰年二月十七日、品川沖ニテ行速丸へ乗組、

松平修理大夫家来并島津淡路守家来共、於州鳥羽湊藤堂和泉守家来へ引渡候名前書付、

（志脱カ）

辰二月十六日美濃守殿

御小人目付

足立八郎次

小川佐左衛門

右者此度松平修理大夫家来并島津淡路守家来共、於志州鳥羽湊藤堂和泉守家来へ引渡可申旨、丹波守殿被仰渡候段、御目付川村大和守申渡ス、

但右家来共、於佃島人足寄場、同所奉行ヨリ請取、品川沖ニ罷在候外国船行速丸乗組罷越可申事、

志州鳥羽湊ニテハ差支ノ趣ニ付、勢州大湊へ相廻ル、

藤堂和泉守家来

綱取長兵衛

外足軽二人

右ハ藤堂家へ御頼相成、為案内乗組

丹波守殿　　川村大和守

九五ノ二

今度松平修理大夫家来、於志州鳥羽湊藤堂和泉守家来へ御引渡相成候ニ付、私共船中為取締罷越可申旨、被仰渡候処、去十一日美濃守殿御書取ニテ、万石以上之家来出殿之節ハ、鄭重之取扱、且書状文面等モ認方相改可申旨、被仰渡候上ハ、私共身分ニテ、和泉守家来重役之者へ引合候テハ、自然不都合之儀出来可申哉モ難計奉存候、依之此段申上候、以上、

御小人目付

辰二月十六日　　足立八郎次

小川佐左衛門

右申上候書付御下ケ無之、

九五ノ三

松平修理大夫家来

兒玉彌右衛門

堀　勘兵衛

川崎四郎左衛門

伴　太郎左衛門

東郷七之助

入江駒之丞

臼井直記
堤　彦太郎
半田源太郎
山本辰次郎
玉置周次
桑山甚助
玉置健蔵
齋藤八郎
八郎弟 齋藤直次郎
八郎弟 足軽小頭 關　助之進
同人足軽 比野友吉
修理大夫医師 澁谷龍貞
澁谷良徳
同人悴 同　八十八
同　龍見
宇都武右衛門
八木平太郎
同　善八郎
柳瀬半助
深瀬幸蔵

安藤武八
折田善次郎
川口源次郎
村岡誠之進
川口源蔵
前田勇吉
足軽 比野乙吉
篠崎彦十郎若党 久保尚助
堀勘兵衛若党 中村新助
肥後七左衛門悴敷間番 肥後隆之助
奥小性 小野嶋宗八郎
同人足軽肝煎 帖佐藤太左衛門
同人足軽 池田喜平次
同人家来斎藤八郎妻 は　る
総領 齋藤錬之助
二男 同　銀次郎
三男 同　甲子蔵
同人家来 留守居添役 脇田一郎
小野半左衛門
別府五左衛門

松永庄右衛門
庄右衛門倅 同 庄之助
外山忠之助
落合惣次郎
玉置七郎
庄右衛門二男 松永平蔵
医師黒田正栄厄介 白石吉之助
足軽小頭 横田蔵助
足軽 増山紀左衛門
大篠甚吉
岩本新次郎
国許人足 袈裟之進
善助
八十七
濤次郎
芝田町ニ罷在候仲間 清太郎
彌八
彦八
甚八
太郎

太郎八
柴山良助小者 藤七
二郎
堀勘兵衛下男 太郎
八木平太郎倅 八木鉦太郎
同人祖母 ふて
同 姉 きく
同 弟 赤蔵
絵師 有田省吾
斎藤八郎実母 一人
玉木七郎倅 〔ママ〕
健次郎妻 うめ
同 娘 まさ
ゑん
同人男子 玉置幸次郎
同 娘 すみ
玉置周次妻 かね
同 倅 玉置六之助
同 次男 同 由次
同 娘 れん

比野官吾妻　は　ま
同　倅　比野鋭蔵
同　次男　同　清次
同　三男　同　万五郎
同　娘　かね
有田省吾母　とま
同　妹　てい
竹内雅春倅　竹内亀太郎
同　妻　かな
松永庄之助妻　もと
同　娘　せい
同　倅　松永芳熊
柳瀬半助妻　くら
同　妹　きく
同　倅　柳瀬平次郎
同　同　半次郎
同　同　万次郎
同　人母　もん
横田倉助妻　いく
同　倅　横田平次郎

同　万次郎
大篠笹吉
鈴木善兵衛
石神十郎
木原直右衛門
小野曹之助
小野金之助
同　熊之丞
富永岩吉
同　金次郎
成田休庵
休庵妻　こと
同　娘　なお
同　いそ
同　倅　成田休之丞
渋谷良貞妻　つや
同　良徳妻　とめ
同　倅　澁谷正太郎
同　甲蔵
入江駒之丞母　妙泰

同人妻　りせ
同　悴　入江金太郎
同　娘　こふ
同　娘　しつ
桑山甚助女　いよ
同　妹　きち
成田休庵娘　とゑ
小野金之助妻　ます
同　悴　小野喜勢次
同　娘　けん
同　ゑい
国許人足　嘉蔵
花川金蔵
金蔵母　一人
同　妻　一人

九五ノ四

島津淡路守家来

検本諒一郎
稱江才之進
新原健之進

郡司直助
相川總太郎
同　總助
中島七郎
中澤納治
前田源兵衛
直助弟　郡司熨斗郎
小林万蔵
齋藤利兵衛
恒吉半兵衛
和州十津川郷士宇右衛門悴　前倉武一
赤塚一郎右衛門
兒玉佐兵衛
同人足軽　内田清吉
橋本徳次郎
中武彌右衛門
岩本幸蔵
検本諒一郎若党　戸塚虎袈裟
称江才之進若党　上浦金彌
検本諒一郎草履取　傳吉

〆百六十六人
辰二月

九五ノ五

松平修理大夫医師
黒田正榮厄介
白石吉之助

右ハ今般松平修理大夫・嶋津淡路守家来共、於志州鳥羽湊、藤堂和泉守家来ヘ御引渡ニ付、御船ニテ御差登セ、同所迄罷越候処、修理大夫家来脇田一郎ヨリ右吉之助儀ニ付、別紙之通寄場奉行ヘ申立置之旨申聞候間、私共ヨリモ同人ヘ相尋候処、豊前小倉藩作事方相勤候勘之助粹ニテ、去卯十月江戸表ヘ罷越、黒田正榮方厄介相成居候由、且当時主家ニハ父モ相果、外ニ知縁等モ無之候間、病気快気之上ハ、京都表ニ知人有之、右方ヘ罷越度候間、和泉守様御家来ヘ引渡呉候様申聞候間、一応和泉守様御家来ヘモ、吉之助申立之趣ヲ以及相談候処、難受取旨申聞候、然ル処勢州大湊ニ於テ、修理大夫・淡路守家来共、請取申度旨、和泉守家来ヨリ申来候ニ付、二タ見沖迄御船ニテ罷越、同所ヨリ端舟ニテ為乗替、右吉之助ヘ前書之次第柄ニ付、江戸表ヘ連帰可申候間、本船ヘ残置、普請役神山周平ヘ相預ケ、心付ノ儀申談、私共両人ハ為引渡大湊ヘ罷越、右相済帰船仕候処、右吉之助儀何方ヘ逃去候哉相見ヘ不申、尤見物之小船数艘罷出候間、右船ニテモ乗移逃去候哉、更ニ相分不申旨、神山周平申聞候間、尚又船中相改候処、相見ヘ不申、右吉之助所持之衣類其外共、右周平ヘ預置申候、此段申上候、以上、

御小人目付
足立八郎次
小川佐左衛門

差出申候別紙ハ略シ、差上不申、

九五ノ六
一昨廿五日朝、酒井左衛門尉様ヨリ御使者ヲ以、御屋敷内ヘ召置候浪人、八王子并上州・相州辺ヘ致乱妨、且御同所様御家来、市中ニテ屯所ヘ鉄砲打込、為相騒候証拠慥ニ有之候付、右浪人引渡候様被仰聞候ニ付、右浪人取締之儀ハ、兼テ厳重ニ申渡、勿論近頃市中乱妨等有之候得ハ、専薩州浪人ト申唱候由風聞承リ候付、門限之儀夜五ツ時限リ申付置候得共、密々忍出、右及所業候者有之候モ難計候付、尚又取調可及御挨拶旨相

答候処、其段御重役へ可申聞旨被申置、間モナク無体ニ被及砲発候、右浪人之儀ハ、益満休之助・藺牟田尚平関係ニテ、浪人取鎮之タメ致出府居哉ト、兼テ相伺居申候、就テハ浪人御取シラへ致、名ニ―如何様之訳ニテ昨日之御挙動ニ被及候哉、右御趣意柄承知仕度、其場ヲ相忍罷出候儀ニ御座候、私共儀ハ相当之御沙汰奉待心得ニ御座候、此段旁奉伺候、以上、

御名家来

十二月廿六日　　柴山良助
　　堀勘兵衛
　　兒玉彌右衛門
　　川崎四郎左衛門

本文伝奏屋敷ニテ、御目付中へ差出候書付写、

一　倉澤文輔
　　外ニ
　　五人

右上州辺へ御用之者尋方ニ付、被差遣候事、

十一月廿五日　　篠崎彦十郎印

本文浪人へ相達候書面写

一本文人数へ相洩候定府参内人数之儀ハ、大圓寺へ相付、寺社奉行へ訴出候処、是以幕船ヨリ被相送申候、

一御屋敷取囲候諸侯人数、左之通承得、右外譜代大名名前承得不申候、

酒井左衛門尉（忠篤、庄内藩主）　間部下総守（詮道、鯖江藩主）　松平中務大輔（親良、桑名藩主）
鳥井丹波守（忠宝、壬生藩主）　酒井大學頭（忠良、羽後松山藩主）

一慶喜儀ハ、上野へ慎居候哉ニ風説承申候、

一譜代旗本人数之儀ハ、追々人気離叛候哉ニ承得申候、

一會藩之儀ハ、江戸西丸下屋敷へ罷居哉ニ承申候、

一彦根侯江戸屋敷會藩乗取候評判承申候、

一桑藩之儀モ江戸屋敷へ罷帰居候段、承申候、

九五ノ七

藤堂和泉守様
御留守居
藤井鼎助

右去ル十三日、内田仲之助へ差越、去ル七日於江戸稲葉美濃守様ヨリ、江戸御留守居呼出、薩州・佐土原両藩屋敷へ罷在候男女百六拾人余、吟味之趣有之、召捕及糺明候処、右ハ不審之廉ハ関係無之者ニ付、其藩ハ中間之国ニ付、薩・佐へ引渡方取計呉候様、御頼被成候、尤勢州ニハ船ヨリ送遣候様可取計トノ趣、被相達

候由、江戸ヨリ申来候ニ付、為引合罷出候トノ口上ニテ御座候、

篠崎彦十郎家来　久保尚助
堀勘兵衛家来　中村新助

九五ノ八

丹羽様御預

澁谷龍貞
同　龍見
同　龍徳
澁谷八十八
宇都武右衛門
八木平太郎
同　善八郎
柳瀬半助
比野乙吉
深瀬幸蔵
安藤武八
折田善次郎
川口源次郎
村岡誠之進
川口源蔵
前田勇吉

水戸様御預

桑山甚助
堀　勘兵衛
兒玉彌右衛門
伴　太郎左衛門
東郷七之丞
入江駒之丞
臼井猶喜
川崎四郎左衛門
堤　彦九郎
半田源太郎
山本辰次郎
玉置周次
玉置健蔵
比野友吉
落合武一
關　助之丞
齋藤直記次郎

齋藤良之助
玉置七太郎
柴山良助
酒井左衛門尉様へ御預
南部彌八郎
揚屋入
肥後七左衛門
右之悴壱人
花崎重蔵
小野平左衛門
小野島壮次郎
松永庄左衛門
右子三人
落合孫右衛門
宗次郎
白金最上寺へ
堤伴四郎
同伴之丞
堤亀太郎
三雲喜八郎

九五ノ九
一上御屋敷御長屋廻等総テ致焼失、土蔵迄相残居候由、尤正月十一日各邸被召上候旨、阿部美作守(正静)様ヨリ花川金之進へ御達之由、別紙木原尚右衛門ヨリ差出候付、差上申候、尤御蔵御在金之儀、御用達中ヨリ御当借三千両御返金并毎年同人共へ御割渡、且年末諸御払用見賦ニテ、凡五千両余御格護相成居候哉ト取覚申候、尤焼失之有無ハ承得不申候、

一藤堂様ヨリ私共御引受ニ付テハ、朝夕御賄一汁一菜、香之物、昼ハ御茶漬被下、尤山田着当晩并同所出立前晩御酒并御取肴被下、道中筋宿手当等至極御丁寧之御会釈ニテ、小供等ヘハ御菓子等被下、且又病人并婦人・子供ノ儀ハ、下輩迄駕籠御手当相成候、

一幕艦乗船中ハ、朝昼晩一汁香之物ニテ、賄小供ヘハ菓子差出、丁寧之会釈ニテ候、

一御屋敷ヘ被召置候浪人、諸所押込致乱妨候風説、折々承申候付、取締向之儀益満休之助・藺牟田尚平ヘ相尋候処、浪人共ニハケ様不埒之者ハ、決テ無之候ニ付、致安心候様兼テ承居、既ニ旧臘中旬頃ニテモ候哉、市中乱妨等有之候ヘハ、専薩州浪人ト申唱、別テ恨憾之

儀ニ付、此御方へ被召置候浪人へハ、右様不埒之者無之段、奉行所へ致御届呉候様、右両人ヨリ申出候程之事ニテ致安心、風聞而已之事ト存居候処、諸所乱妨致強盗、不相当之金子致所持居候由、説以承申候、

一御兵具方足軽之内ニテ、市中致押込、金子不相応致所持居候哉ニ風聞承申候間、右ハ御取調相成候ヘハ、相分リ候儀ト奉存候、尤当分御国元へ罷下居申候、

一酒井家市中廻リ、屯所へ鉄砲打込為相騒候者共ハ、淡路守殿御屋敷へ罷居候伊東四郎左衛門・竹内健蔵・本場十蔵・毛利覺介所行之由承申候、

一御屋敷取囲候人数、大概幕勢譜代大名手勢相混、都合五万人程之由承申候、

一廿五日朝、他出等ニテ諸所ヨリ奉行所へ被列越候面々ヨリ、別紙六通差出候付、差上申候、「右ハ旧臘廿五日、混雑之形行右之通御座候間、此段申上候、以上、

御金方　　堀　勘兵衛

御徒目付　　兒玉彌右衛門

江戸手形所書役　　川崎四郎左衛門

右同　　山本辰次郎

右同　　堤　彦太郎

右同書役助　　東郷七之丞

原程
卯三月五日

九五ノ一〇

私共事江戸詰并定府ニテ相勤罷在候処、旧臘廿五日朝六時分、上御屋敷四方兵器相備取囲ミ、酒井左衛門尉様御使者、篠崎彦十郎江致面会度、御門番江取次申出候付、詰人数并益満休之助・藺牟田尚平、彦十郎御長屋江打寄及評議候処、右者決テ浪人取調之儀ニ可有之、弥其通之儀ニ候ハヽ、被召置候浪人江曲事有之候ハヽ、此方ニテ如何様トモ可致所置、尤右之趣御承知無之候ハヽ、閣老方江可及御届趣ヲ以申張、是非不及闘戦、神妙ニ可致応接、浪人一条ヨリ　御国難ヲ醸出シ、且致砲発等候テハ、浪人同盟之姿ニテ、右嫌疑申開者モ無之候付、可成相忍候筋ニ評議一定之上、西御門外上番所ニ、酒井家使者江篠崎彦十郎・脇田市郎・一(ママ)關太

郎・柴山良助致面会候処、当御屋敷江御召置之浪人、市中江押込致強盗、且八王子并上州・相州辺江致乱妨、剰相州荻山中陣屋乱妨之節ハ、備置候武具ハ不及申、金壱万両余奪取、当御屋敷内江持運候儀、慥ニ申立候者有之、其上酒井左衛門尉家来市中廻リ人数、屯所江鉄砲打掛為相騒候儀、証拠致分明候付、右浪人総テ御引渡相成候様、幕命致承知候段申述候付、此方江召置候浪人謹慎之儀ハ、兼テ厳重ニ申付置、門限モ夜五ツ時限ニ申渡置程之儀ニハ候へ共、若哉密々忍出、右及所業候モ難計候付、何分此方ニテ一応取調、可及御挨拶趣申達候処、其段重役へ可申聞申置、右使者引取、間モナク西御門通御長屋へ無体ニ鉄砲掛、西辻番所へ火相掛、御物見跡并御長屋へ追々致連焼候付、御役所へモ致放火候ハ、案中ト見受候故、倶々申合之上総テ焼失仕申候、其場実ニ忍兼候時機ニ候へ共、詰人数ニハ何方迄モ相忍可致、正論評議之上、篠崎彦十郎・立花直記・脇田市郎・白石彌左衛門列立、西御門方へ為取鎮走向ヒ、私共ニハ銅御門へ走付、酒井家魁首へ致面会、一応田町屋敷へ同道談判度申述候処、彼方へ致出会候様申聞候付、致同道差越候処、於赤羽根橋公辺ヨリ被相達候儀有之候間、鳥居丹波守様御家来可致同道承リ、友平新三郎案内ニテ、最初南町奉行所へ―〔ママ〕差越、夫ヨリ同夜伝奏屋敷へ案内候付、相控居申候、然ルニ翌廿六日迄、何等挨拶モ無之候付、別紙写之通、連名之書面右新三郎へ取次差出候処、御目付中へ慥ニ差出候段、返答承届申候、然処同廿八日、水戸家并丹羽左京大夫様へ、銘々左之通御預相成申候、

水戸家御預

御留守居付役　柴山良助

御金方　堀勘兵衛

御徒目付　兒玉彌右衛門

手形所書役　川崎四郎左衛門

御細工奉行　伴太郎左衛門

右同　堤彦太郎

手形所書役
山本辰次郎
右同
東郷七之丞
表御小姓
臼井猶喜
奥御小姓
入江駒之丞
表御小姓
齋藤八郎
御馬乗
玉置周司
右同
玉置鍵蔵
中小姓
桑山甚助
右同
半田源太郎
八郎三男
無勤

齋藤直次郎
御留守組小頭
關助之進
御庭方付役
日野友吉
丹羽家御預
奥医師
澁谷龍亭
御広敷医師
澁谷龍徳
龍亭二男
無勤
澁谷龍見
御進物蔵手伝
宇都武右衛門
龍徳嫡子
澁谷八十八
御貸付方付役
安藤武八
御兵具方足軽

村岡誠之進
右　同　前田勇吉
右　同　川口源次郎
右　同　川口源蔵
右　同　折田善次郎
御留守組小頭　柳瀬半助
御庭方付役　日野乙吉
御兵具方足軽　八木平太郎
右　同　八木善八郎
篠崎彦十郎家来　久保直助
堀勘兵衛家来　中村新助

一右ニ付、追々評定所へ呼出之上、左之通尋問御座候、

堀勘兵衛

右へ尋問之趣ハ、其方屋敷へ数多之浪人相集、諸所市中等へ押込為致乱妨、且野州辺又ハ相州荻之山中陣屋ヲ焼払、武器類又ハ莫大之金子掠取、追々奪取候金子、浪人且野村彦五郎ヨリ相請取、蔵方用金ニ為召仕ニテ可有之、其方金方役之儀ニ候ヘハ、不存儀モ有之間敷、委細承知之上、右之取計ニモ相成候半、屋敷内武器類・金子等持込候儀、分明ニ相分リ居候段申聞候付、浪人相集居候段ハ、致承知居候得共、何様之訳ニテ召置候儀、私ニハ全不致関係、益満休之助・藺牟田尚平引受関係之事ニテ、何等之事モ不致承知、勿論夜分門限等モ厳重致取締候由、兼テ承居候付、右様之儀ハ有之間敷ト存居候、乍然外方乱妨之儀ハ、風説ニハ承候得共、浪人共右様之次第、初テ承申候、尤彦五郎并浪人共ヨリ金子相請取、蔵方用金ニ召仕候儀曽テ無御座、篠崎彦十郎任沙汰、浪人方入用ニテ休之助ヘ相渡候金、凡三千両余ニモ相及候ヘ共、是以何様之用金ニ召仕候儀モ不存、彦

十郎差図ニテ引渡候事ニ御座候、其外賄方入用金之儀ハ、別段其向ヘ時々相渡候、勿論私共儀、浪人同盟ニ無御座段形行申出置候、

一　　兒玉彌右衛門

右ヘ尋問之趣ハ、前文浪人共於諸所致乱妨、致強盗候儀ハ勿論、私ニモ同盟ニテ倶々及右始末候半ト、勘兵衛同様申聞候付、私儀ハ此節定府、家内共国許引越ニ付、旧臘十一日蒸気船ヨリ江戸ヘ着船致シ、其涯ヨリ田町屋敷ヘ上陸仕候処、同廿五日朝、大勢異様之体ニテ上屋敷取巻キ、別テ非常之模様承リ、直ニ走越候処、前文通之及時機、就テハ私事、浪士同盟ト申訳ニ無之、尤彼共ヨリ金子等相受取タル儀、曽テ無之由、其向ノ者ヨリ承居候段、申出置候、

一　　川崎四郎左衛門

右ヘ尋問之趣ハ、浪人之内上州辺ヘ無拠差遣候付、若哉道中ニテ相咎候者有之候儀難計、其節薩藩ニテ不審之者ニ無之段、申取之書面相渡候様、益満休之助ヨリ申出、別紙写之通相認、致自判相渡被置候処、右書面所持之者被相捕、致白状候趣有之由ニテ、前文書面差出、彦十郎自筆ニ相違無之欤ト被相尋候付、彦十郎儀ハ兼テ唐様相習、間々和様モ相認候得共、不見馴手跡ニテ突留、自筆トハ難申段申述候処、自判ニ相違無之候付、自筆ニ有之間敷、家老代ヲモ相勤候者、カ様之書面相渡程之儀ニテ、其方ニモヲノツカラ其次第存候筈、仮令浪人倶々不致乱妨候ヲモ、其趣意柄存候得ハ、同盟ニ相違無之、一言之申訳有之間敷、且酒井左衛門尉手ヘ相付、致降参候儀モ相違有之間敷申聞候付、右浪人一条ハ益満休之助・藺牟田尚平ト申者関係ニテ、其外詰人数江趣意柄存候者無之、尤酒井家手江致降参候儀ニテ更ニ無之、浪人御取調ヲ名ニシ、屋敷内御取荒之御趣意柄致承知度タメ、罷出候儀ニ候段申述候処、右ハ浪人同盟之嫌疑有之、右始末ニ相及候段、被申聞候得共、再応前文之通申答置候、

九五ノ一一

伴　太郎左衛門
入江駒之丞
臼井猶喜
齋藤八郎
東郷七之丞

堤　彦太郎
山本辰次郎
半田源太郎
澁谷龍徳
玉置周司
玉置鍵蔵
桑山甚助
齋藤直次郎
比野友吉
關　助之進

右江尋問之趣ハ、其方共儀、前文浪士同盟ニテ可有之哉之旨被相尋候付、我々共儀、右様之者ニ曽テ無之、右之訳柄等申入レ之タメ、酒井家手江相付、罷出候儀ニ御座候段申出候処、然ハ右浪士致乱妨候儀、存居候哉ト被相尋候付、乱妨致シ候風聞ハ承候得共、屋敷内へ被召置候浪人ニテハ有之間敷存居候段、申出置候、

一右ニ付去月十七日評定所江呼出之上、其方共儀不埒之筋無之候付、無御構幕艦ヨリ帰国致シ候様被相達、同日佃島ヨリ御小人目付足立八郎次・小川佐左衛門乗組、且又藤堂和泉守様御引受之由ニテ、御家来綱取長兵衛・竹内金次郎同様乗組、翌十八日品川沖出船所致汐掛、同廿三日志州鳥羽港江着船、同廿五日勢州山田御師上部大夫方江上陸、藤堂和泉守様御家来森内三郎兵衛・山岡璠之進出会ニテ、同人共引受、種々御丁寧之御会釈ニテ、同廿八日山田出立、昨夕伏見へ着仕申候、

一兒玉彌右衛門儀ハ、御船翔鳳丸乗付御徒目付ニテ、乗頭白石彌左衛門一緒ニ、旧臘十一日江戸へ着船、其涯ヨリ田町御屋敷江止宿致居候処、同廿五日朝徳川家人数大勢、鑓銃携持上御屋敷取囲ミ、別テ変動之向承候ニ付、直ニ両人一緒ニ上御屋敷へ駈付候処、前文之次第ニ御座候、

一柴山良助儀呼出之節、尋問之廉々申訳無之処ヨリ、致懐中居候短筒ヲ以致自殺候段、於評席彌右衛門承届申候、

一篠崎彦十郎・立花直記儀、西御門外ニテ、砲丸ニテモ相当候哉、相果居候段承申候、

一關太郎儀為取鎮、西御門外迄差越候処、容易ニ鎮静方行届兼候体ニテ、御屋敷内へ引返候中途、酒井家

手勢相支へ、暫時迫合候得共、迚モ通抜候儀不相成候付、其場ヲ忍ヒ、京都表江罷登ル含ニテ、篠崎彦十郎家来田代清之丞ト致変名軽輩之儀ニテ、差返呉候様申聞候得共不聞入、是以酒井家手勢ヨリ、伝奏屋敷へ被列越申候、尤前文迫合之節、左之腕へ鉄砲疵二ケ所、右足踏違ヒニテ、歩行相整不申候、然処一同御預之節、牢屋へ被込置候処、病気ニテ佃島へ為養生差越、於同所致病死候由承申候、

一白石彌左衛門・兒玉雄一郎・天沼勇右衛門(原保辰カ)・黒田松(マ)兵衛(マ)・山下總右衛門儀ハ、廿五日混雑之節行衛相知レ不申、如何様砲丸ニテモ相当候哉ト被察申候、

御留守居組小頭　大崎庄八
右同
同人嫡子　大崎米次郎
同人三男　大崎猪之助

右三人儀高輪御屋敷へ被召置候処、酒井家手勢同御屋敷取囲候砌致切腹候由、米次郎妻ヨリ承申候、

御留守居付役勤　小野半左衛門
半左衛門嫡子　小野曹之助
御留守居組与力　松永庄右衛門
御留守居組小頭　松永庄之助
御庭方付役　松永平蔵
御留守組足軽　大篠甚吉
御小姓与　有田省吾
御留守居組小頭　横田蔵助
御屋敷番之頭　花川金之進

右九人揚屋へ被込置候処、病気ニ付親類等へ引取、致介抱候付、未江戸表へ罷在申候、

御絵師
竹内雅春
御兵具方足軽
手塚正之進
右同
中村覺左衛門
御兵具方足軽
野元兵太郎
右同
岩元龍次郎
右同
益山喜左衛門
御国人足
龍太郎
右同
次郎八
右同
鹿次郎
右同
勇七

右同
次郎右衛門
右同
甚八
篠崎彦十郎家来
安右衛門
右拾三人揚屋并牢屋ニテ、死・病死候段承申候、
御細工奉行
伴太郎左衛門
表御小姓
臼井猶喜
奥御小姓
入江駒之丞
表御小姓
齋藤八郎
御馬乗
玉置周司
右同
玉置鍵蔵
中小姓

桑山甚助
右同
半田源太郎
八郎三男無勤
齋藤直次郎
御広敷医師
澁谷龍徳
御留守居組小頭
關助之進
御庭方付役
比野友吉
御進物蔵手伝
宇都武右衛門
御貸付方付役
安藤武八
御兵具方足軽
村岡誠之進
右同
前田勇吉
右同

川口源次郎
右同
川口源蔵
右同
折田善次郎
御留守居組足軽
柳瀬半助
御庭方付役
比野乙吉
御兵具方足軽
八木平太郎
右同
八木善八郎
篠崎彦十郎家来
久保直助
堀勘兵衛家来
中村新助
右弐拾五人、私共酒井家手へ談判中走集候付、同様
御預等ニ相成申候、
奥医師

澁谷龍亭
同人二男　澁谷龍見
右二人、撒兵手ヨリ評定所へ被列越、前件之通御預相成、尤於評定所ニ一通尋問有之候処、浪人同盟ニ無之段、申出置候処、私共同様爰元へ着仕申候、
御国人足
右同　袈裟市
右同　彌三次
右同　十右衛門
右同　太郎八
右同　大八
右同　清太郎
右同　彦八
右同　太郎
右同　嘉平次
右九人於諸所被召捕致入牢居候処、此節同様爰元へ着仕申候、
大賦
右同　伊地知清左衛門
右同　永田兵四郎
右同　佐々木源次郎
田町人足
右同　太吉
右同　金左衛門
右同　熊助
右同　亀助

明治元年(1868)

右同　十助
右同　權之丞
右同　太郎助
右同　孫次
右同　萬蔵
右同　喜次郎
右同　平助
右同　四平
右同　兼太郎
右同　源四郎

右同　助市
右同　礒吉
右同　市太郎
右同　源右衛門
右同　喜左衛門
右同　四郎助
右同　市蔵
右同　彌右衛門
右同　彌兵衛
右同　休八

田町人足　金七
右同　善七
右同　直助
右同　直八
右同　元次郎
右同　八郎
右同　善之助
右同　仲八
右同　八左衛門
右同　喜八

右同　彦市
右同　休次郎
右同　吉兵衛
右同　良助
右同　善次
右同　金四郎

右四拾三人諸所へ相忍、又ハ物貰体ニテ、江戸へ罷居候段承申候、

塗物師　潁川與市
張物師　塚田伊兵衛
右同　飯島紋十郎

右三人、田町御屋敷へ被召置候処、廿五日、混雑之節ヨリ家内召列、江戸表諸所へ罷在(原傍)居候段承申候、右外ニモ同様之者有之哉承申候得共、聢ト名前承得不申候、

九五ノ一二

去年十二月廿五日、江戸芝御屋敷変事之砌、定府又ハ詰人数之面々、召捕等ニ相成、水戸様并丹羽様等御預ニテ、此節藤堂家へ引渡、徳川船ヨリ志州鳥羽迄送来、今度彼地ヨリ藤堂様御受取御差送相成候付、達貴聞、去ル四日於伏見、為請取方御留守居付役勤永山左内被差出候処、彼御方付添森内三郎兵衛等へ出会、人数書引合相請取、別紙之通銘々書付ヲ以形成申出、右付直様其許之様罷下候様被仰付候、左候テ前文通之始末ニテ困窮ノ賦ニ付、人数ニ応シ、七才以上之者へ金三両ツヽ、被成下、九州路大払ヲ以、用心金見計ヲ以相渡、其段其許へ申越候様、大坂御留守居へ申越候、且又藤堂様御請取後、万端御引請、道中旁御丁寧之段、申出候付、爰許御留守居へ為致吟味、夫々御挨拶向等相済候、ヲノツカラ其許着之上ハ、細事申出ニテ可有之候得共、夫々口書等都テ相添、此段申越候条、中将様可被達御聴候、以上、

但

別冊并口書等都テ御用済次第、可被差返候、

辰三月八日　　關山　糺(金生)

島津圖書(久治)殿
桂　右衛門(久武)殿
川上龍衛(久齢)殿
新納刑部(久憲)殿
町田内膳(久憲)殿

九五ノ一三

阿部美作守へ

松平修理大夫奸臣共、兵仗ヲ以テ、宮闕ニ迫リ、奉侮幼主私論ヲ主張シ、先帝御委托之摂政殿下ヲ廃シ、恣ニ宮・堂上方ヲ黜陟シ、或ハ家来共浮浪之徒ヲ語合、屋敷へ屯集、江戸市中押込強盗致シ、酒井左衛門尉人数、屯所へ砲発乱妨、其他野州・相州等所々焼討、刦盗ヲヨヒ候証跡、分明ニ有之、殊ニ此程

御上洛ノ前路ヲ遮リ、砲発乱暴、終ニ京坂之間不容易事態ニ押移候段、畢竟修理大夫奸臣共之所業ニ出候事ニ有之、依之各邸共被召上、在府之家来共一同、急速国許退去候様可致候、

右之趣松平修理大夫家来共へ可被達候、

名前略ス

右ハ旧臘廿五日、江戸此方上屋敷徳川氏ヨリ人数差向、詰人数并定府之男女連越、諸家へ預等罷成候処、去月七日、

其御許様御留守居呼出、護送之儀及頼談、御承知相成居候処、同十七日此方人数男女名前、前書之通乗船相成、同十八日出帆、志州鳥羽港江同廿三日着、勢州山田迄差越候処、病気之者有之、三日滞在、夫ヨリ陸地差越、木津川下リニテ、伏見表へ去ル四日着、於同所御遣之名書通、無相違相受取申候儀、別条無御座候、請取証書依テ如件、

御名

留守居

慶応四年辰　三月七日　　新納嘉藤二印

内田仲之助印

藤堂和泉守様御内

井關文之進殿　　森内三郎兵衛殿

藤井鼎助殿　　山岡瑠之進殿

伊藤總左衛門殿

九五ノ一四

藤堂藩

横目

森内三郎兵衛

外交掛

山岡瑠之進

賄役

伊藤總左衛門

賄方掛

正木五郎兵衛

同

澤村五兵衛

同

竹村市郎左衛門

同

水谷泰太郎

右人数道中付添之人数　江戸ヨリ蒸気船ニテ鳥羽迄付添之人数　藤堂藩

綱取長兵衛
竹内金次郎

請取証一通

但

藤堂様ヨリ江戸詰人数等御差送ニ付、請取之儀、新納嘉藤ニ私名前連印、

御取次

藤井鼎助

右ハ今日藤堂和泉守様御屋敷江持参、右鼎助へ面会、男女多人数御預被下、御手厚御取扱之次第具ニ演説、御挨拶被仰進候旨申述、請取証書壱通相渡候処、正ニ致落手可申上旨、申聞候付罷帰申候、

右之通、今日私御使者相勤申候間、別紙相添、此段申上候、以上、

辰三月七日　内田仲之助

糺様

九五ノ一五

金弐拾四両

右ハ和州十津川郷士、前田正久・前倉武一殿居官平洋（原保）学為修行、江戸へ致出府居候処、去年十月比、銘々大小拵方仕度御座候間、何卒右入用之金子、御拝借被仰付度段願出、無拠儀御座候、同一人ニ付金八両ツヽ拝借被仰付候、左候テ返上方之儀ハ、宿許ヨリ相達次第、上納之賦ニテ、証文差出置候得共、旧臘廿五日一条ニテ、焼出仕候間、右金子上納之儀、十津川頭取方へ御達可被下候、且又右三人初江戸へ出府中、月々相渡候月俸料、又ハ書籍等取入候儀、一帳相記置候得共、右同断之節焼失仕申候、右差引残リ金弐分ト銭五拾文計、相残リ居候哉ニ取覚候得共、是以同様之儀ニ御座候間、右之段モ頭方へ御達可被下候、此段申上候、以上、

江戸手形所書役　堤彦太郎

辰三月五日

九五ノ一六

口上覚

私共事、定府ニテ田町御屋敷へ被召置候処、旧臘廿五日朝、上御屋鋪外廻リ兵器相備、多人数相囲ミ候段承候付、早速走付候含罷在候処、幕府撤兵多人数、田町御屋敷内へ押入、御用之儀有之候間、御奉行所へ可致

案内申聞候付、致同道差越候処、一通於同所与力共ヨリ、上御屋敷へ被召置候浪人、同盟ニテハ無之欠ト相尋候付、同盟ニテハ無之、勿論浪人多人数罷居候段ハ、兼テ存居候得共、素ヨリ関係之事ニテ無之候付、右一条ハ何事モ存不申段、申述置候、然処松平内膳正様へ御預被仰付罷在候処、去月十七日評定所へ御呼出之上、其方共儀嫌疑之筋無之候付、無御構幕府蒸気船ヨリ帰国被仰付候旨被仰渡、即日佃島ヨリ乗船、同十八日品川沖出帆、同廿八日志州鳥羽港へ着船、同所ヨリ藤堂和泉守様御家来へ御引渡之上、今日伏見へ着仕候、尤親七左衛門儀モ同様、差越候儀ニ候処、右ハ御用有之被留置候旨、松平内膳正様御家来ヨリ致承知候、此段形成申上候、此等之趣、被仰上被下候儀奉願候、以上、

三月四日　　小野島總八郎

中小姓　　肥後隆之助

九五ノ一七

旧臘廿五日、御屋敷変動之次第ハ、別紙之通ニテ、私事ハ取鎮方且田町御屋敷ニテ、一先致談判度申合、關太郎・白石彌左衛門西御門ヨリ出、松本町へ出候処、酒井等之人数有之候付、關太郎ハ右へ鎮方ニ参リ、彌左衛門・私ニハ同道、三田通へ参リ候処、同所ニテ何方之人数カ、野戦筒ヲ打掛候付、私ニハ三田通之方ニ行、尤其節御物見焼失最中ニテ、右之煙中ニ紛レ、其砌彌左衛門ハ相分、行衛相知レ不申候得共、多分ハ其節死亡ニ及候カト被察候、左候テ其節黒川鉾太郎（原脱）儀モ跡ヨリ参、同道田町へ差越度候処、最早同人数ニテ難参、三田裏町知者方明二階借入忍居、同日夜中鉾太郎（原脱）ニハ忍、親類内神戸侯藩中之内へ差遣候、私ニハ廿六日七ツ時分秋月侯へ差越、御留守居田村増吉へ致面会、昨日ヨリ之形行旁ニ付、京地迄差越、実事申達度候得共、何分私名前ニテハ通行イタシ兼候付、御藩中之内同道相願度旨申談候処、幸今晩京地迄飛脚差立候付、直ニ出立可致候、尤当屋敷ヨリ致同道候テハ不都合ニ付、田村増吉谷ツ山辺同道致、夫ヨリ鈴木來助・水筑弦太郎差立候付、致同道候様承候付、則致同道、東海道原駅継立、柏原辺迄差越候処、箱根関所番人之由ニテ、江戸表ヨリ御用有之候付、早々立帰リ候様御用状致到来候旨申聞候付、右ハ何様之御用筋ニ候哉、此方共ハ主人極々急用ニテ、京地迄差越候者共ニテ、子細

無之申答候得共、イツレモ御立帰無之候テハ、自分共ニテ御用状ノ儀ヲ、其侭御差出申訳ニ参不申旨申聞候付、無余儀任其意江川太郎左衛門殿人数、小田原侯人数警衛ニテ、正月四日北町奉行小出大和守殿へ、小田原侯人数ヨリ引渡候付、同人於評席致面会、如何之訳ニテ秋月侯へ右同立之儀、致談判候哉之旨相尋候付、右ハ兼テ隣国ニテ、万事互ニ頼頼レ候儀ニ御座候、左候ハヽ田村増吉ト申者ハ、兼テ知人ト申訳ニモ無之、使者等之節致面会候迄ニ有之候得共、此節之一条ハ国事ニ相拘リ候大事件ニ付、猶更之事御座候旨相答候処、右ハ承届候、然処今般其方主人屋敷変動之一条モ、本藩ニ決テ子細無之候得共、諸浪人相集、其上市中夜盗押込、又ハ野州辺・相州荻山中辺乱妨等為致、追々相集候趣等之次第、ヲノツカラ不存筈ニテハ無之筈申聞候付、右浪士一件ニ付ハ、自分共全ク関係イタシ候儀ニ無之、右浪士之儀ニ付テハ、益満休之助外壱人致関係候者有之、兼テ同人ヨリ申聞ニハ、浪士之一件ニ付、平常詰合人数ニハ決テ差構ヒ無之、相離候儀候旨申聞、其通ニテ一切不存事ニ御座候半、然留守居ハイツレ重役之場ヲ兼務之事候得ハ、何事モ時々不承筈ハ無之、左候ハヽ外役向無之候得ハ、添役相勤候得ハ、イツレノ筋ニモ相談不承子細無之、留守居一存ニテ、右様大儀又ハ大金差出筈之儀ヲ可取計ニモ有之間敷候旨、再応強問イタシ候得共、右浪士一件ニ付テハ、何様御尋御座候得共、存タル儀無之旨相答候、一通相分候付、諸家御預之格ヲ以、揚屋入申付候旨、秋月侯御藩モ共ニ申達、同夜揚屋入同九日評定所へ呼出、寺社奉行初出席、先日町奉行小出大和守ヨリ委曲承候得共、一通猶又相尋候旨ニテ、同様之趣共相尋、猶留役ヨリ吟味可致旨ニテ引取、又候留役ヨリ再三相糺候得共、幾応御座候共、不存旨申切候処、口書為致吟味相済候付、引取候様申達候付引取、左候テ二月五日又々評定所江呼出、北町奉行小出大和守ヨリ吟味相分候付、揚屋入御免、寄場奉行へ諸家御預之格ヲ以御預之段申達候付、同日寄場へ差越候事、

但

御出入町与力秋山久蔵ヨリ内々申聞候ニハ、内実ハ近々廻漕方御船ヨリ、志州鳥羽辺迄御一同御廻之筈御内定ニ候間、御案(安)心被成下内々為知申候、

左候テ二月十七日幕府船へ乗組、同廿五日勢州山

田へ着、藤堂家へ御厄介等相成候儀ハ、別紙之通
ニ御座候、
右之通御座候間、形行御届申上候、以上、
辰三月六日　　脇田市郎

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年二月 五

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

一万国ノ通誼ニ循ヒ、外国公使ヲ召見スルヲ布告ス、三職モ亦副書シテ、天下ノ大勢・宇内ノ公法ヲ示諭ス 二月十七日
記 布告書
三職副書
藩吏届書
一藩老外国交際ヲ開クヘシトノ建議、納レラレタルコトヲ藩地ニ報ス 二月十七日
記 藩老届書
一藩老御親征ノ達命ヲ藩地ニ報ス 二月十七日
記 届書
別紙(有栖川帥宮以下任命書)
留守居届書
藩吏届書
一各国公使ノ客館ヲ定メ、加賀以下六藩兵ニ命シテ之ヲ警護ス 二月十七日
記 達書
一従征諸軍ニ令シ、往来必ス印票ヲ用ヒシメラル 二月十八日
記 達書
藩吏届書
一九州鎮撫総督澤宣嘉部内諸藩ニ令シテ、其向背ヲ問フ 二月十八日
記 口達書
一外国事務局ニ令シテ、外交ノ聖旨ヲ各国公使ニ伝諭セシメラル 二月十八日
記 達書
一御親征扈蹕先後隊ヲ別チ、兵員ヲ定メ、且内侍所守衛

ヲ置キ、大坂行在所、及ヒ太政官代ノ地ヲ定メシム二月二十日

記　行幸供奉先陣ノ達書

回達書八条

別紙（扈蹕兵員書）

留守居届書

藩吏通牒

一諸職任命二月二十日

記　辞令八通

復古記案文

一墨是可銀ノ価位ヲ定メ我貨幣ト同ク通用セシム二月二十日

記　達書

参照　外国掛書翰

一五畿内元代官地貯蔵米、切封解除ノコトヲ達セラル二月二十日

記　留守居届書

一藩ノ軍艦期日来航遅延ノコトヲ稟ス二月二十日

記　上申書

一藩兵五隊上京ノコトヲ稟ス二月二十日

記　上申書

留守居届書

一藩内天保通寶通価ヲ定ム二月二十日

記　藩老申渡書

一〔ママ〕

参照　大久保利通日記節録

一忠義御親征行幸供奉ヲ命セラル二月二十一日

記　御沙汰書

留守居届書（次項ニ并記）

一忠義京都守衛ヲ命セラル二月二十一日

記　御沙汰書

留守居届書

一初メテ太政官日誌ヲ刊刻ス、後之ヲ裁判所鎮撫使及ヒ諸藩ニ頒ツ二月二十日

記　四月五日達書

留守居届書（二十六日ニ載ス）

一御親征役員士卒ノ人員ヲ上申ス二月二十二日

記　上申書

留守居届書

一但馬生野銀山分捕金弐万両ヲ納付ス二月二十二日

記　届書

藩吏通牒書

一藩長崎守衛士ニ弔慰金ヲ下与ス二月二十二日

記　藩老申渡書

一古金銀ヲ以テ、姑ク地下相場ニテ通用セシメラル二月二十三日

記　御沙汰書

留守居届書（次項ニ載ス）

一苞苴私謁ヲ戒飭セラル二月二十三日

記　御沙汰書并廻達文

一藩士伊地知正治、東山道先鋒総督参謀ヲ命セラル二月二十三日

記　辞令

留守居届書外四件

一始メテ理甌ヲ京都ニ置キ、言路ヲ洞開セラル二月二十四日

記　太政官掲示

一諸家ニ令シテ、其皁隷ノ祭賽演劇ノ地ニ至リ、横暴ノ行ヲ為スヲ禁セラル二月二十四日

記　達書

一藩島津隼人・町田民部ヲ藩老ニ準セシム二月二十四日

記　藩庁申渡書

一福島新十郎江戸ヨリ長崎ニ帰着、江戸ノ情況ヲ通報ス二月二十四日

記　申立手続書

一御親征期来月五日ト令セラル二月二十五日

記　通達書

留守居届書

参照　大久保利通日記節録

一再ヒ親征ノ期ヲ布告シ、且衆庶ヲ諭シテ各其業ニ安シ、危懼勿ラシメラル二月二十六日

記　御沙汰書二通

藩吏通牒文

一諸侯ニ令シテ、立烏帽子・裏附狩衣等ヲ服スルヲ許ス二月二十六日

記　達書

参照　小河一敏履歴書節録

福岡孝弟服制草案

井上長秋案

谷森種松案

一佛英蘭三国公使入京ノ期ヲ布告シ、更ニ加賀・薩摩以下諸藩ニ命シ、其旅館及ヒ道路ヲ警守セシメラル二月二十六日

記　御沙汰書

留守居届書

参照　大久保利通日記節録

一仏人滞留所相國寺及途上警衛ヲ命セラル二月二十六日

記　達書

留守居届書

藩吏通牒文

参照二十五日

肥後藩ヘ達書

尾張藩ヘ達書

筑前藩ヘ達書

九六　外国公使召見ヲ布告ス

明治元年二月十七日、万国ノ通誼ニ循ヒ、外国公使ヲ召見スルヲ布告ス、三職モ亦副書シテ、天下ノ大勢宇内ノ公法ヲ示諭ス、

復古記巻三十六

九六ノ一

先般外国御交際之儀

叡慮之旨被　仰出候ニ付テハ、万国普通之次第ヲ以、各国公使等御取扱被為　在候、然処此度

御親征被　仰出、不日

御出輦被為遊候ニ付テハ、御余日モ無之御事ニ付、各国公使急々参　朝被　仰付候ニ付、此段可相達被　仰出候事、

九六ノ二

外国御応接之儀ハ、上代

崇神

仲哀御両朝之頃ヨリ、年ヲ逐テ盛ニ成来リ、遠邇之各国帰化貢献有之、其後唐国トハ常々使節相往来、或ハ居留シ、其交際モ亦自ラ親敷候、此時ニ当リ、船艦之利未タ開ケス、故ニ三韓四近ト唐国而已、西洋各国之事ハ暫差置、印度地方尚明確ナラス候、然ルニ近代ニ至リテハ、万民所知之如ク、船艦之利、航海之術其妙ヲ窮メ、万里之波濤比隣之如ク相往来シ、一時幕府ノ失措トハ乍申、

皇国之政府ニ於テ誓約有之候事ハ、時之得失ニ因テ、其条目ハ可被改候ヘ共、其大体ニ至リ候テハ、妄ニ不可動事万国普通之公法ニシテ、今更於

朝廷、是ヲ変革セラレ候時ハ、却テ信義ヲ海外各国ニ失ハセラレ、実以不容易大事ニ付、不被為得止、於幕府相定置候条約ヲ以、御和親御取結ニ相成候、既ニ先般御布令被為在候上ハ、

皇国固有之御国体ト、万国之公法トヲ御斟酌御採用ニ相成候ハ、是亦不被為得止御事ニ候、仍テ越前宰相以下建白之旨趣ニ基キ、広ク百官諸藩之公議ニ依リ、古今之得失ト、万国交際之宜ヲ折衷セラレ、今般外国公使入京参

朝被　仰付候、元来膺懲之挙ハ、万古不朽之公道ニシテ、仮令和親ヲ講スルトモ、其曲直ニ依テ、各国不得止之師相起リ候、其例不少、付テハ攻守之覚悟勿論之事ニ候ヘ共、和親之事ハ於

先朝、既ニ開港被差許候ニ付、

皇国ト各国トノ和親、爰ニ相始リ居候処、其節ハ幕府ヘ御委任之儀ニ付、諸事交際之儀、於幕府取扱来リ候、然処此度

王政一新、万機従

朝廷被　仰出候ニ付テハ、各国交際之儀、直ニ於朝廷御取扱ニ可相成ハ、元ヨリ之御事ニ候、今ヤ御初政之御時、総テ之事件ハ、全ク総裁始当職之責ニ有之候、何分某等不肖之身ヲ以テ、大任ヲ負荷シ、非常多難之時ニ逢候上ハ、深ク恐懼思慮ヲ加ヘ、天下之公論ヲ以テ及奏聞、今般之事件御決定被為　在候、且国内未タ定ラス、海外万国交際之大事有之候ヘハ、普天率浜、協心戮力共ニ王事ニ勤労シ、万国交際ヲ始、万機悉ク既往将来ヲ不論、無忌憚詳論極諫有之度、只急務トスル処ハ、時勢ニ応シ活眼ヲ開キ、従前之弊習ヲ脱シ、

聖徳ヲ万国ニ光耀シ、天下ヲ富岳ノ安ニ置キ、

列聖在天之神霊ヲ可奉慰、上下挙テ此趣意ヲ可奉謹承候事、

太政官代

二月十七日　　三職

右二通、辰二月十七日、太政官代ヘ可罷出旨、御留守居ヘ御達有之、附役勤永山左内(盛輝)罷出候処、非蔵人松尾伯耆ヨリ右御書付被相渡候旨、内田仲之助(政風)ヨリ糺様ヘ首尾書有之、

九七　外国交際ノ建議採納ヲ藩地ニ報告

明治元年二月十七日、藩老外国交際ヲ開クヘシトノ建議採納アリタルコトヲ藩地ニ報ス、

旧邦秘録

一皇国と外国との交際を、講明せすして不叶儀付、交際

之道無二念開せられ、彼か長を取り我か短を補ひ、万世之大基礎相据られ候様、奉専禱候旨、御別紙写壱印之通、四侯　御連名を以、御差出相成居候処、一昨十五日　太守様被為　召、若御所労被為　在候は、御重役御仮建江可罷出旨御達ニ付、拙者罷出候処、右御献言被申上候通、　御決定之　思食候間、為見被下候旨、御別紙二印之通、御添書を以被仰渡候、左候て御請書可被差出旨御達ニ付、達　貴聞、即夜御別紙写三印之通、　御請書被差出候処、坊城侍従（後章）様被成御落手候旨申出候、都て之御書附等相添、此段申越候条、

中将様（島津久光）可被達

御聴候、以上、

辰二月十七日　　關山　糺（金生）

島津圖書（久治）殿

桂　右衛門（久武）殿

川上龍（久齢）衛殿

町田内膳（久憲）殿

別紙ハ二月十五日ニ載ス、仍テ茲ニ省ク、（慶明雑録二十五にて校訂）

九八　家老ヨリ御親征ノ達命ヲ藩地ニ報ス

明治元年二月十七日、藩老御親征ノ達命ヲ藩地ニ報ス、

旧邦秘録

九八ノ一

関東御親征付、

有栖川帥宮様其外公卿方、大惣督より被仰出候段、別紙之通御留守居申出候付、首尾書相添此段申越候条、

中将様可被達

御聴候、以上、

辰二月十七日　　關山　糺

島津圖書殿

桂　右衛門殿

新納刑部殿

町田内膳殿

九八ノ二

別紙

御親征大総督　　有栖川帥宮（熾仁親王）

同参謀四人イ　　正親町中将（公董）

西四辻大夫（公業）

廣澤兵助（二月九日任命）（寛臣）

西郷吉之助（隆盛）

錦旗奉行二人イ　林玖十郎〔通顯〕
同持手　穂波三位〔経度〕　河鰭大夫〔実文〕
平岡掃部権助
上田右兵衛大尉
河野宮内大録
山中右近番長
山本左近府生
橋本左近番長
三澤右近番長
橋本伊勢介
富島左近将曹
座田民部少録
廣瀬左兵衛権大尉
岩垣大舎人大属

改為
東海道先鋒兼鎮撫使総督　橋本少将〔実梁〕
同副　柳原侍従〔前光〕
同参謀　木梨精一郎〔恒準〕
海江田武次〔信義〕

改為
東山道先鋒兼鎮撫使総督　岩倉大夫〔具定〕
同副　岩倉八千丸〔具経〕
同参謀　乾退助〔板垣〕〔正形〕
伊地知正治〔二月二十三日任命〕
宇田栗園〔淵〕

改為
北陸道先鋒兼鎮撫使総督　高倉三位〔永祐〕
同副　四條大夫〔隆平〕
同参謀　小林柔吉〔隆麟〕
津田山三郎〔信弘〕
船越洋之助イニ〔八月五日任命〕〔衛〕
奥羽鎮撫使イニ総督　澤三位〔為量〕
同副　醍醐少将〔忠敬〕
同参謀　黒田了介〔清隆〕
品川彌二郎〔日次〕
海軍総督　聖護院宮〔嘉言親王〕

同参謀　　庭田大納言〔重胤〕
中山前中将〔忠愛〕
伊東外記
増田左馬進〔明道〕

右之通被
仰下候事、

九八ノ三
御書付一通
但大惣督等被　仰付候儀、

陸軍務掛
松尾但馬

右より被相達候儀有之候間、只今壱人可罷出旨、切紙到来罷出候処、右但馬を以被相渡、左候て先日被仰渡置候通、触下之諸侯江は早々可致廻達旨申聞候付、致承知候旨申述置候、
右之通御留守居附役遠武橘二相勤申候付、触下之御方江は、写を以則御廻達仕置候、御別紙相添此段申上候、以上、
辰二月十四日　　内田仲之助
　　糺様

鹿児島藩総督
島津式部
差引
伊地知正治
大迫喜右衛門
田中清右衛門
他藩引合
有馬藤太
総督方近習
平田九十郎
池上四郎左衛門
種子田左門
上原藤十郎
小荷駄方兼兵粮方
樺山休兵衛
土持佐平太
製作方
伊勢仲左衛門

九八ノ四
旧邦秘録

今度慶喜以下益暴逆付、
御親征被
仰出就ては、
御沙汰次第奉命、可馳集旨被
仰出候付、御請書等被
差出候段は、別紙申越通ニ候、然処去ル六日、太政官
代軍務掛より可罷出旨御達付、御留守居付役勤永山左
内罷出候処、今般
御親征ニ付、東海道・東山両道御先鋒之儀、被為蒙
勅命、左候て御軍艦壱艘御用被　仰付、且右同断付、
医師召連病院相立候儀、御別紙之通
勅書三通、東園中将様ヨリ御渡相成、且右両道之出兵
休泊附、是又被　仰渡候付、達　貴聞向々御手当向等
之儀早々申渡、東海道総督相良治部、差引西郷吉之助
江、東山道総督島津式部、差引伊地知正治江被仰付、
就ては兵隊之儀、一番隊より三番隊迄東海道筋江、四
番隊より六番隊迄東山道江出兵被仰付、東海道筋は去
ル十一日、東山道之儀は同十三日、夫々御軍規之通繰
出し相成、出兵被　仰付候、左候て　御親征ニ付、銃
隊砲司令士并持夫等書出候様、是又被　仰出候付、両
道出張之人数御届書、別紙之通被差出候、右付
勅書三通　御書附壱通、且御届書并出兵人数名書等都
て相添、此段申越候条、
中将様可相達　御聴候、左候て其許御軍賦役頭取江被
相達、向々申渡之儀は、何分も可被取計候、以上、
但御軍艦御用之儀付ては、急速御手当向之儀、滞坂
小松帯刀江、早便其許江被申越候様申越候付、お
のつから為相達筈と存候、此段は為御心得申越候、
辰二月十七日　　關山　糺
島津圖書殿
桂　右衛門殿
川上龍衛殿
町田内膳殿

〔慶明雑録八にて校訂〕

九九　各国公使ノ客館ヲ定メ加賀以下六藩兵ニ警護ヲ命ス

復古記巻三十六

明治元年二月十七日、各国公使ノ客館ヲ定メ、加賀以下

六藩兵ニ命シテ、之ヲ警護ス、

九九ノ一　加州　細川護久家記

今般外国人上京、参
内被
仰付候ニ付、南禅寺孛漏生人宿所ニ相成候間、滞京中
其藩人数差出、宿院警衛致候様被仰付候、尚委細之儀
ハ、外国懸リヘ可承合事、
但外国人滞京五六日ニ候事、

九九ノ二　尾州　前田慶寧家記

知恩院英吉利人首尾、上文ニ同シ

九九ノ三　紀州　徳川義宜家記

妙心寺和蘭人首尾、上文ニ同シ

九九ノ四　肥後　徳川茂承家記

妙法院門跡佛朗西人首尾、上文ニ同シ

九九ノ五　備前　池田章政家記

興正寺米利堅人首尾、上文ニ同シ

九九ノ六　雲州　松平定安家記

大徳寺伊太里人首尾、上文ニ同シ

一〇〇　従征諸軍ノ往来ニ印票ヲ使用セシム

明治元年二月十八日、王師出征駅逓供億ノ衆キヲ以テ、
従征諸軍ニ令シ、往来必ス印票ヲ用ヒシメラル、
復古記巻三十六

今般
御親征御用ニ付、宿駅人馬等莫大之費用ニモ可有之、
終ニハ万民之難渋ニ立至リ可申哉ニ付、出張之面々末
々迄篤度相弁、聊不作法之所業有之間敷段ハ勿論之事
ニ候、就テハ向後為取締、左之通印鑑ヲ以令通路候様

被　仰付候付、此段相達候事、

印鑑
辰何月何日何々発足何々迄往来又ハ片道 何州　何条何某 上下何人

又ハ兵隊ナラハ
辰何月何日同断
銃隊以上何人
何州　夫方之者何人
以上何人

軍防局章
大総督府章
諸道総督章

右之通、京都ヨリ発途之面々ハ、来廿五日ヨリ、出先キ諸道ヨリハ来月朔日ヨリ、印鑑ヲ以往来被　仰付候付、街道筋取締藩々ヨリ承糺之節ハ、所持之印鑑改相請候様可相心得事、

但　御用相済候節ハ、最寄之局へ印鑑可致返上事、

二月　軍防局

大総督府印鑑

角寸二寸原　印朱

印鑑軍防局

角寸二寸原　印朱

附録東海・東山・北陸三道総督府印章

角寸二寸原　印朱

角寸二寸原　印朱

毛利元徳家記
加藤明実家記

朱印　原寸二寸角

原寸一寸八分五厘角

東山道総督府印章見ル所ナシ、執事ノ印ヲ以テ暫ク之ヲ填ス、

右辰二月十九日、太政官代ヘ罷出候様、軍務局ヨリ御呼出ニ付、赤井直之進罷出候処、非蔵人吉田遠江・松野豊前両人ヨリ、御書付一通・印鑑写二枚被相渡、左候テ御印鑑写取候様申聞候付写取、且御触下ヘ相達候様申聞候付、回達仕置候趣、内田仲之助ヨリ伊勢殿ヘ首尾書有之、

（室カ）（政風）（島津忠義）

一〇一　九州鎮撫総督澤宣嘉部内諸藩ニ令シテ其向背ヲ問フ

明治元年二月十八日、九州鎮撫総督澤宣嘉部内諸藩ニ令シテ、其向背ヲ問フ、

復古記巻三十六

口達

此度九州鎮撫使トシテ下向候付、九州諸藩国論一定ノ処、為心得改テ承知致度候付、早々国許ヘ懸合、以書取可申出候、

二月十八日

猶又隣国旧幕領、是迄何某支配致候哉、又ハ預リ地等有之候ハヽ可申出事、

宗重正家記

一〇二　外国事務局ニ命シテ外交ノ聖旨ヲ各国公使ニ伝諭セシム

明治元年二月十八日、堺浦争闘ノ事アリシヲ以テ、外国事務局ニ令シテ、外交ノ聖旨ヲ各国公使ニ伝諭セシメラル、

復古記巻三十六

今般　御一新ニ付、各国

御交際之道モ大略相立、既ニ近日参　内之儀モ被仰出候処、不図モ土州家来法外之所業ニ及ヒ、深被悩宸襟候、素ヨリ

皇帝ニオカセラレ候テハ、
御交親之外更ニ御他念モ不被為在事ニ候条、此度之儀ハ、如何様ニモ御取糺之上、至当之御処置被
仰付候間、
御交際之儀ハ、聊違乱無之様被成度
叡慮候間、此旨相心得、各国公使ヘ可申達候事、

外務省記

省記本書ノ首ニ、二月十九日、京都外国官留記ノ内ト傍署セリ、蓋シ東久世通禧・伊達宗城等ニ達セシモノナラン、

一〇三 島津忠義等ニ親征扈蹕先隊、細川護久等ニ後隊、加藤明實等ニ内侍所守衛ヲ命ス

明治元年二月二十日、島津忠義・淺野茂勲・松平慶永・加藤泰秋・池田徳澄・池田政詮ニ命シテ、親征扈蹕先隊ト為シ、細川護久・毛利廣封・鍋島茂實・松浦詮・松平信正・亀井茲監・織田信親・市橋長義・森俊滋ヲ後隊ト為シ、加藤明實・小出英尚ヲシテ内侍所ヲ守衛セシム、又大坂行在所及ヒ太政官代ノ地ヲ定メ、諸藩扈蹕ノ兵員ヲ限定ス、

復古記巻三十七

一〇三ノ一 為御親征大坂行幸供奉先陣被
仰出候事、

但

日時并御道筋等追テ可申入候事、

行幸奉行

二月　　俊政

各通

越前宰相殿
島津少将殿
淺野少将殿
加藤遠江守殿
池田摂津守殿
池田信濃守殿

松平茂昭家譜
島津忠義以下五家家記

一〇三ノ二 回達書八条

二月二十日回達書

今度御親征之義ハ、先達テ被
仰出候通、万民塗炭之苦ヲ被為救度、以
叡断御決定有之候上、
王政復古之為最第一之間、万端慈憐之御趣意貫徹候ハ
テハ、忽悖人望自兵威緩怠ニモ至候間、不法乱行ハ勿
論、聊之雖為失錯堅被立法令候、右等之御趣意篤ト相
弁、至小僕迄厚被加教諭、心得違無之様肝要候、実ニ
此度之儀ハ、重大之事ニ候間、　公武之差別更無之候
ヘトモ、殊更　王公以下諸司之家僕共、厳重謹慎無之
候ハテハ不相成候、自然違背之輩於有之ハ、以制令可
被及　御沙汰旨ニ候、此段為御心得申入置候事、
一御衣体、狩衣・直垂・水干、可被任御所意之事、
一侍以下衣体、非常之心得ニテ、可被任有合之事、
一荷物以下万事質素軽便第一之事、
一御道中並滞陣中食事、主従共自小堀(マヽ)手軽之弁当可廻之
事、
一別紙御定人数之外、随従為列外共堅無用之事、
一夜具並衣服類、惣道中無入用品ハ、前日・前々日之内、
角倉ヘ御差出有之候ハヽ、夫々運送先々ヘ可達候事、
一御滞陣中書通ハ勿論、何品ニテモ取寄方ハ急弁候様致
置候間、其心得ニテ供奉之節ハ、成丈軽便ヲ被相守候
様、且又京都ヨリ急達之向モ同様候間、何ニ不限角倉
ヘ差出候様、可申附置候事、
一御一泊有之候事故、夜具等用意モ有度儀ニ候ヘトモ、
何分紛雑睡眠ノ訳合ニハ難至候間、其心得ニテ用意可
有事、
　但老体ノ向ハ別格候間、御一泊所ヘ前日可被廻置候、
　是トテモ尤軽便第一候事、

一〇三ノ三
別紙
一親王大臣

先荷長持	三棹	同駄荷	五
供侍	八人	刀指	三人
下部	十五人(口付共)	馬	一疋
両掛	三荷		

一公卿

先荷長持	二棹	同駄荷	四
供侍	六人	刀指	二人
下部	十二人(口付共)	馬	一疋
両掛	二荷		

一殿上人
先荷長持　一棹　同駄荷　二
供侍　四人　刀指　一人
下部　十人（口付共）　馬　一疋
両掛　一荷

一三催
先荷長持　二棹　同駄荷三人ニテ五
供侍　三人　刀指　一人
下部　六人（口付共）　馬　一疋
両掛三人ニテ二荷

一地下官人
先荷長持三人申合　一棹　同駄荷　一人前一
供侍　一人　刀指　一人
下部　二人　両掛三人申合　一荷

一駕輿丁
先荷長持　八棹　同両掛　三荷
籠長持三荷

御衣体ノ書付ハ、公卿ニ限リ公付スベキモノナリトシテ、取消ニ及ヒタリ、今其照覆ノ書牘ヲ載ス、

有栖川宮家記
壬生基修家記

一〇三ノ四
明治元年二月二十日、大坂行幸供奉先陣ヲ命セラル、

為　御親征大坂行幸供奉先陣被
仰下候事、
但日時并御道筋等追テ可申入候事、
行幸奉行
二月二十日　俊政
薩摩少将殿

一〇三ノ五
同日、行在所及ヒ供奉兵員ノ数ヲ定メラル、

一行在所可為本願寺掛所之事、
但内侍所ハ新ニ取立之事、
一太政官代東本願寺掛所之事、
従僕法令之儀、各承知之事候間、一々不掲条目候、

一〇三ノ六
同日、扈蹕諸藩兵ノ人員ヲ定メラル、

一中藩以上
銃隊五百人ヨリ三百人迄諸役付準之、
近習十人ヨリ手廻拾五人迄之間、
一小藩

銃隊百五十人ヨリ五十人迄諸役付準之、
近習六人ヨリ手廻十人迄之間、
一銃隊之外用捨之事、
右之通被　仰出候条、宜可被相心得候事、
但
来廿二日中人数付可被差出候事、

一〇三ノ七
旧邦秘録

二月

御書附五通
内一通写
但　御親征ニ付御法令御心得御達之儀、
一通写
但右同断ニ付御衣体等之儀、
一通
右同断ニ付、
此御方様　供奉
御先陣之御儀、
一通
右同断ニ付、
御行在之御儀、
一通
諸侯様方御供列之儀、
非蔵人
松室信濃
〔慶明雑録二十六にて校訂〕

一〇三ノ八
留守居ヨリ届書ヲ載ス、

右ハ今廿日
御所御仮立江御用ニ付罷出候処、坊城頭弁様より、御別紙可相渡旨ニて、右信濃より相渡申候間、可申上旨答置候、御別紙御本書并写五通差上申候、
右之通今日私相勤申候間、此段申上候、以上、
辰二月廿日　内田仲之助〔政風〕
〔島津広兼〕
伊勢様
追て御触下へは、毎之通通達可仕候、此段も申上候、
以上、
〔慶明雑録二十六にて校訂〕

一〇三ノ九
旧邦秘録

明治元年三月八日
一先月廿日

御所御仮建江御用ニ付、御留守居内田仲之助罷出候処、
此節就
御親征大坂
行幸、
太守様供奉先陣被
仰下候等之儀、御別紙五通之通、被為蒙
勅命候付達
貴聞、則御手当向之儀、御軍賦役頭取江相達、向々江
も致通達候、左候て御別紙之内、御供列之儀ニ付ては、
同廿二日
御官名内御留守居名前之書附を以被差出候、御書附並
御留守居首尾書相添、此段申越候条、
中将様被達　御聴、其許申渡等之儀は何分も、可被取
計候、以上、

但御別紙御書附之内、御衣体之御達書は、堂上以上
江被仰渡候筋ニて、御取消相成候様、非蔵人吉見
三河ヨリ申越候付、是又別紙之通申出候、此段は
為御心得ニ候、

辰三月八日　　嶋津伊勢(広兼)

島津圖書(久治)殿
桂右衛門(久武)殿
川上龍衛(久輪)殿
新納刑部(久脩)殿
町田内膳(久憲)殿

(慶明雑録二十六にて校訂)

一〇三ノ一〇
旧邦秘録

二月廿日

追て同役信濃太政官江相回、私江委任致置候間、是
儀申入置候、
前略御免可被下候、然は今一応為念申入候、
御親征ニ付、御衣体之書付、貴藩御一列も御渡ニ相成
候書付ニてハ無御座、堂上方江御渡ニ成候書付ト間違
ニて御渡ニ相成候間、御取消ニ相成候間、此段為念申
入候、以上、

二月廿日　　吉見三河

内田仲之助様

一〇三ノ一一
旧邦秘録

二月二十一日

非蔵人吉見三河より、別紙之通以手紙申越候、就ては

昨夕以首尾書申上候御衣体之御達書は、堂上方以上江被仰渡候筋御座候間、御取消相成候様仕度、別紙相添此段申上候、以上、

辰二月二十一日　　内田仲之助

伊勢様

追て御触下江は、則回達可仕置候、此段も申上候、以上、

〔慶明雑録二十六にて校訂〕

一〇四　諸職任命

復古記巻三十七

明治元年二月二十日、議定徳大寺實則ヲ以テ、内国事務局督ヲ兼ネ、参与秋月種樹権輔ヲ兼ネ、参与辻維嶽・廣澤真臣・大久保利通・中根師質判事ヲ兼ネ、議定晃親王外国事務局督ヲ兼ネ、議定伊達宗城・参与東久世通禧輔ヲ兼ネ、参与岩下方平・町田久成・伊藤博文・五代友厚・寺島宗則・井上馨判事ヲ兼ネ、議定嘉彰親王軍防事務局督ヲ兼ネ、参与烏丸光徳権輔ヲ兼ネ、参与津田信弘・吉井徳春判事ヲ兼ネ、参与鷲尾隆聚・壬生基修・四條隆謌親兵掛ヲ兼ネ、議定中御門経之会計事務局督ヲ兼ネ、議定淺野茂勲輔ヲ兼ネ、参与長谷信成権輔ヲ兼ネ、参与戸田忠至（後に由利）・三岡公正・小原忠寛判事ヲ兼ネ、議定細川護久刑法事務局輔ヲ兼ネ、参与溝口貞直・土倉正彦・木村貞通判事ヲ兼ネ、参与福岡孝弟制度事務局判事ヲ兼ネ、参与後藤元燁ヲ総裁局顧問ト為シ（参与故ノ如シ）、顧問木戸孝允ヲ参与ト為シ（顧問故ノ如シ）、元燁・孝允ヲシテ参与顧問小松清廉ト共ニ、外国事務掛ヲ兼ネシム、又熾仁親王ヲ以テ議定兼神祇事務局督ト為シ、吉田良義（侍従）ヲ参与兼輔ト為シ、亀井茲監ヲ参与兼判事ト為シ、植松雅言ヲ参与兼権判事ト為シ、岩倉具綱ヲ参与兼内国事務局権輔ト為シ、中川元績（対馬〇非蔵人）ヲ参与兼判事ト為シ、五辻安仲ヲ参与兼権判事ト為シ、井關盛艮（斎右衛門〇宇和島藩士）ヲ参与兼外国事務局判事ト為シ、吉田良榮（遠江〇非蔵人）・土肥某（典膳〇備前藩士）ヲ参与兼軍防事務局判事ト為シ、平松時厚（甲斐権介〇時言ノ子）・万里小路通房・愛宕通旭ヲ参与兼親兵掛ト為シ、鴨脚光長（加賀〇非蔵人）ヲ参与兼会計事務局判事ト為シ、参与助役石山基正ヲ参与兼権判事ト為シ、近衛忠房ヲ議定兼刑法事務局督ト為シ、五條為榮（少納言）ヲ参与兼権輔ト為シ、鷹司輔熙ヲ議定兼制度事務局督ト為シ、堤哲長（右京大夫）ヲ参与兼権輔ト為シ、松室重進（豊後〇非蔵人）ヲ参与兼判事ト為シ、坊城俊章（侍従〇俊政ノ子）ヲ参与兼弁事加勢ト為ス、

一〇四ノ一

議定職内国事務局督被
仰出候事、
慶應四辰年二月
総裁朱印

徳大寺大納言

職務進退録

一〇四ノ二
明治元年二月二十日

各通

辻　将曹
廣澤兵助
大久保一蔵
中根雪江

徵士参与職内国事務局判事被
仰付候事、
慶應四辰年二月
総裁朱印

職務進退録

一〇四ノ三
明治元年二月二十日

議定職外国事務局督被
仰出候事、
慶應四辰年二月
総裁朱印

山階宮

職務進退録

一〇四ノ四

議定職外国事務局輔被
仰出候事、
慶應四辰年二月
総裁朱印

宇和島少将

職務進退録

一〇四ノ五
明治元年二月二十日、藩士小松帯刀外五名、各官ニ任セラル、

小松帯刀（清廉）
大久保一蔵（利通）
岩下左次右衛門（方平）
町田民部（久成）
五代才助（友厚）

明治元年二月二十日

寺島陶蔵（宗則）

各通

岩下左次右衛門
町田民部
伊藤俊介（博文）
五代才助
寺島陶蔵
井上聞多（馨）

徴士参与職外国事務局判事被
仰付候事、

慶應四辰年二月

総裁朱印

職務進退録

明治元年二月二十日

各通

小松帯刀
木戸準一郎
後藤象二郎

当分外国事務掛被
仰出候事、

二月

職務進退録

按スルニ清廉・孝允・元燁ノ宣旨皆同シ、然レトモ其実、清廉ハ嚮ニ既ニ参与・顧問ト為リ、孝允ハ嚮ニ顧問ト為リ、此日始メテ参与ニ任シ、元燁ハ嚮ニ参与ト為リ、此日始メテ顧問ニ任シ、而シテ其外国事務掛ハ、清廉・元燁ハ旧任ニシテ、孝允ハ新任ナリ、

明治元年二月二十日

各通

小松帯刀
木戸準一郎
後藤象二郎

徴士参与職総裁局顧問被
仰出候事、

慶應四辰年二月

総裁朱印

職務進退録

一〇四ノ六
明治元年二月二十日　　近衛新前左大臣

議定職刑法事務局督被
仰出候事、
慶應四辰年二月
総裁朱印

職務進退録

宣旨ニ、総裁朱印ヲ鈐スルノ制、新ニ立チシヲ以テ、従前議定・参与ニ任セシモノ亦、皆二官拝除ノ宣旨アリ、其重複ヲ避ケスシテ皆之ヲ収ム、又職務進退録、種樹・具綱等加勢ニ係ルモノハ皆朱印ナシ、之ヲ具綱ニ面質セシニ、先ツ加勢ノ仮宣旨ヲ賜ヒ、後ニ権輔ノ朱印宣旨ヲ賜フト、諸家記ヲ按スルニ、加勢ヲ権ト改メシハ、廿六七日ノ間ニアルニ似タリ、故ニ目ハ当日ノ面目ヲ存シ、綱ハ更改ノ宣旨ニ従フ、

進退録、又嘉言親王・博経親王・山内豊信ノ事務総督ヲ罷メ、更ニ議定ニ任スルノ宣旨ヲ載セ、島津忠義・長谷信篤ノ如キハ之ナシ、而シテ忠義・信篤仍依然トシテ議定ニ列セリ、按スルニ職制更定ヲ経レハ、前官既ニ廃スルヲ以テ、復タ罷免ヲ要スルコトナシ、然レトモ当時草創ノ際、任罷ノ例規未タ定マラス、往々異同アリ、一例ヲ以テ之ヲ律シカタシ、今職制更定後ノ罷免宣旨ハ、一切省略ニ従フ、下之ニ倣フ、

一〇五　洋銀（メキシコドル）ノ価位ヲ定メ、我貨幣ト同ク通用セシム

旧邦秘録

明治元年二月二十日、墨是可銀（メキシコドル）ノ価位ヲ定メ、我貨幣ト同ク通行セシム、

一今度御一新之折柄、外国之御交際モ追々被為在候儀ニ付テハ、指向為融通洋銀一枚ニ付、金三分之当リヲ以、無差支交遣ヒ可致旨被
仰出候間、銘々無疑念通用可致候、

二月

有栖川宮家記
毛利元徳家記

○元徳家記日ヲ失ス、按スルニ此令アリシモ、其実ハ

開港場ニ止リ、普ク国内ニ流通セシニ非ス、

【参照】

復古記巻三十七

明治元年二月二十二日

附録外国掛書翰

一筆致啓上候、然ハ先達テ御評議済ニ相成候洋銀通用之儀、各国ヘモ御内調有之処、左様相成候得ハ、於彼方モ便利之趣談済ニ相成候間、別紙之趣ヲ以、早々御国内ヘ被　仰出ニ相成候様被成度段、久世・宇和島両公ヨリ御申上被成度候得共、御用御多端ニ付、拙者共ヨリ可得御意旨被　仰付候間、此段被仰達、早速御布告ニ相成候様御取計可被成候、以上、

大坂

外国事務掛

二月十八日

太政官

内国事務

御掛中

○書中所謂別紙之ヲ佚ス、

内国事務局叢書

一〇六　五畿内元代官地貯蔵米切封解除ノ布達

明治二年二月二十日、五畿内元代官地貯蔵米切封解除ノコトヲ達セラル、

旧邦秘録

二月廿日

丹波国船井郡

下大久保村　水原村　井尻村

和田村　質美村

河内国讃良郡

三箇村　河内屋北新田　萱島流作新田

中野村　北條村

同国河内郡

芝村　水走村　日下村

善根寺村　額田村

同国若江郡

小若江村

同国同郡

木戸村　萱振村　上若江村

下若江村

同国同郡
東弓削村　中田村　別宮村
八尾座村　今井村　成法寺村
東郷村　庄之内村　友井村
近江堂村
同国石川郡
板持村　毛人谷村　南大伴村
北大伴村
同国錦部郡
伏山新田　三口市村　甲田村
西代村
和泉国泉郡
三林村　北田中村　岡村
福瀬村
松平肥後元役知(容保)
山城国愛宕郡
岩倉村
一丹波国外ニ三ケ国村名書一通
非蔵人
城多圖書

右は、今日二條城太政官代会計方より御用有之、罷出候処、別紙之通徳川領並會津領等、村々蔵江薩州より切封相成居候得とも、今般於
朝廷御開き相成候付、為心得被相達候旨、右圖書を以御達ニ付、可申上旨申述置候、
右之通、今日私共差支、御留守居附役遠武橘二(秀行)相勤申候間、別紙相添此段申上候、以上、
辰二月廿日　内田仲之助
伊勢様

一〇七　藩ノ軍艦期日来航遅延ノコトヲ上申ス

明治元年二月二十日、藩ノ軍艦期日来航遅延ノコトヲ稟ス、

旧邦秘録

此度
御親征ニ付、軍艦一艘御用被　仰付、二月十五日ヨリ廿日迄之間、兵庫湊江着碇之上、御届申上候様御達之趣承知仕、早速国元江申越置候、然処今日迄着碇不仕、海上之儀ニテ遅延之次第モ不相分候付、此段御届申上

候、猶着湊次第御届申上候、以上、

辰二月廿日　　薩摩少将内

内田仲之助

〔島津忠義家記三にて校訂〕

一〇八　藩兵五隊上京ニ付上申

明治元年二月二十日、藩兵五隊上京ノコトヲ稟ス、

一〇八ノ一
旧邦秘録

一兵士五小隊

但

一小隊百弐拾人余

惣人数六百人余

右之通、此節島津左衛門（久豊）召列上京仕候付、此段御届申上候、以上、

二月廿日　　薩摩少将内

内田仲之助

書附二通

但

今度

御親征ニ付、軍艦御用被仰付、遅着御届之儀一通私名前、

島津左衛門殿、兵士召列上京御届之儀一通私名前、

一〇八ノ二

非蔵人

吉田隠岐

右ハ今日二條城太政官代江持参、軍局掛右隠岐江面会差出候処、正ニ致落手候旨申聞候、

右之通、今日私共差支、御留守居附役遠武橘二相勤申候間、此段申上候、以上、

辰二月廿日　　内田仲之助

伊勢様

一〇八ノ三

一御親征　行幸、当月下旬被仰出候処、来月五日之旨更被仰出候事、

一丑半刻無遅参集之事、

二月廿五日　　俊政

薩摩少将殿

御書附一通

但
御親征
行幸来月五日之旨更被
仰出候御儀ニ付、
非蔵人
橋本安藝
右ハ今日御用之儀有之候間、禁中御仮建江罷出候様、切紙到来罷出候処、右安藝ヲ以被成御渡候付、可申上旨申述置候、
右之通今日私共差支、御留守居附役赤井直之進相勤申候付、御書付相添此段申上候、以上、
辰二月廿五日　内田仲之助
伊勢様

一〇八ノ四　薩州
右奥羽鎮撫使三月一日発途相成候ニ付、銃隊百人附属致候様可致旨、
御沙汰候事、
二月廿七日

一〇八ノ五　薩州
奥羽鎮撫副督参謀江致附属、大坂ヨリ乗船可致候事、
二月廿七日
御書附二通
但
奥羽鎮撫使江銃隊百人附属之儀、右同大坂ヨリ乗船之儀、
非蔵人
松室豊前
右ハ今日太政官代軍局ヨリ、御用ニ付可罷出旨御達有之罷出候処、右豊前ヲ以被相渡、御請書今日中差出候様被相達候付、可申上旨相答置申候、
右之通今日私共差支、御留守居附役永山左内相勤申候間、御書附相添此段申上候、以上、
辰二月廿八日　内田仲之助
伊勢様

島津忠義家記

一〇九　藩内天保通寶通価ヲ定ム

明治二年二月二十日、藩内天保通寶通価ヲ定ム、
旧邦秘録

一天保通寶一枚　直成二百文

右ハ是迄一枚ニ付、百枚ツヽニテ通融申渡置候得共、御吟味ノ訳有之、右ノ通直成被相替通融申付候条、今日ヨリ御蔵入払ハ勿論、御領国中一同右直成ヲ以、致通融候様被仰付候、此旨不洩様向々へ可致通達候、

辰二月二十日　　右衛門

（記）

取次市來六右衛門（ママ）ニ付、被仰渡候事、

一一〇　大久保利通日記

明治元年二月

二十日

一淀へ十一字比着、十二字当所馬上ニテ通行、二字比太政官へ出席、今日副総裁御参ニテ、四字比太政官へ御出席、坂地ノ形行言上、当然ニ御所置被為在、

一一一　島津忠義親征行幸ノ供奉ヲ命セラル

明治元年二月二十一日、忠義御親征行幸供奉ヲ命セラル、
復古記巻三十七

薩摩少将

今般
御親征
行幸供奉被
仰付候、就ては召連候兵隊之内百人許残置、其余先供として
御出輦両三日前、大坂表江差下置厳重可致守衛
御沙汰之事、

二月

（慶明雑録・島津忠義家記所収）

（記）

本日同時ニ供奉ノ命アリシハ、左ノ各藩ニシテ、加藤遠江守以下ハ、三十人ヲ残置クヘシト命セリ、

細川右京大夫（護久、熊本藩世子）
安藝少将（浅野茂勲、芸州藩世子）
長門少将（毛利元徳、長州藩世子）
越前宰相（松平慶永、前福井藩主）
加藤遠江守（泰秋、大洲藩主）
松平圖書頭（信正、亀岡藩主）

〔亀井茲監〕
津和野侍従
〔英尚、園部藩主〕
小出伊勢守
〔明実、水口藩主〕
加藤能登守
〔信親、栢原藩主〕
織田出雲守
〔長和、西大路藩主〕
市橋下総守
〔俊滋、三日月藩主〕
森　　對馬守

二月　〔慶明雑録・島津忠義家記所収〕

(記)

本日同時ニ尾張ハ南御門、肥後ハ寺町御門、安藝ハ朔平御門、長門ハ蛤御門、因幡ハ中立賣御門、津ハ下立賣御門、越前ハ堺町御門、備前ハ清和院御門、彦根ハ石薬師御門、土佐ハ日之御門、久留米ハ今出川御門ノ守衛ヲ命セラレタリ、

一一二　島津忠義京都守衛ヲ命セラル

明治元年二月二十一日、忠義京都守衛ヲ命セラル、
一二二ノ一
復古記巻三十七

薩摩少将

今般
御親征
行幸被為遊候、就ては
御留守中京都御警衛別て肝要之事ニ付、其藩之儀兼て
乾御門御警衛向被
仰付置候、就ては
御留守中別て無怠様可致守衛
御沙汰之事、

一一二ノ二
留守居ノ届書ヲ載ス、

御書附二通
内一通
今般
御親征
行幸供奉被
仰付候就ては之儀、
一通
右同断ニ付、
御留守中乾御門御警衛之儀、

非蔵人
松尾但馬

右ハ御用之儀有之候間、御重役御留守居等之内、今廿一日、太政官江罷出候様、弁事御役所ヨリ相達候付、御留守居附役隈元敬一郎被差出候処、右非蔵人ヲ以被相渡候付、可申上旨相答置、罷帰候段申出候間、御別紙二通相添、此段申上候、以上、

辰二月廿一日　　内田仲之助

伊勢様

（島津忠義家記三所収）

一一三　初メテ太政官日誌ヲ刊刻ス

明治元年二月二十日、初テ太政官日誌ヲ刊刻ス（刊刻書肆村上某筆記）

後之ヲ裁判所鎮撫使及ヒ諸藩ニ頒ツ、

復古記巻三十七

四月五日達書

近来太政官ニテ、日誌ヲ出版シ、広ク天下ニ御布告被遊候儀ハ、上下貴賤トナク、

御政道筋ヲ敬承セシメ、一意ニ方嚮スル所ヲ知リ、其条理上ヲ践行セシメントノ

御仁慮ニ被為在候ニ付、諸国裁判所・諸道鎮撫使・諸藩留守居等ヘ御渡シニ相成事ニ候間、大切ニ取計ヒ、

遐邑辺陬末々ニ至ル迄、不洩様速ニ相達シ、右之

御趣旨貫徹候様、屹度可相心得候事、

但元幕府ノ預所・元郡代・元代官支配所ヘハ、此度取締被　仰付置候藩々ヨリ可致通達、寺社領・陣屋向等ヘモ、其最寄ノ藩ヨリ可相達候事、

四月

一一四　親征役員・兵士・卒ノ人員ヲ上申ス

明治元年二月二十二日、御親征役員・兵士・卒ノ人員ヲ上申ス、

一（二四ノ二）銃隊五百人

一近習廻十人

一手廻十五人

右ハ此節就

御親征、大坂

行幸供奉先陣被

仰下候付、人数付キ可差上被

仰出候趣承知仕、此段申上候、以上、

薩摩少将内

二月廿二日　　内田仲之助

一二四ノ二
留守居ノ届書ヲ載ス、

非蔵人吉見三河ヨリ、別紙之通以手紙申越候、就テハ、昨日以首尾申上候御衣体之御達書ハ、堂上方以上へ被仰渡候筋御座候間、御取消相成候様仕度、別紙相添、此段申上候、以上、

辰二月廿二日　　内田仲之助

伊勢様

追テ御触下へハ則廻達可仕置候、此段モ申上候、以上、

一二四ノ三
(按)
扈蹕諸藩ノ上申ヲ列載スレハ、左ノ如シ、

○薩州

一銃隊　五百人
一近習廻　拾人
一手廻　拾五人

○肥後

一銃隊　五百人
一諸役付　五拾人
一近習　拾人
一手廻　拾五人

○津和野

一銃隊及諸員　百八拾人
一近習手廻　拾六人

○鹿奴 池田摂津守 徳潑

一銃隊　百七拾人
士分 徒士以下六拾八人内四拾七人銃隊 四拾三人
銃卒　八拾人
一諸員　八拾五人
士分 医師 二拾八人
徒士 小頭 五人 二拾一人
卒 三拾八人

○亀岡 松平図書頭 信正

一銃隊　百三拾四人
一近習　六人
一手廻　拾人

○水口 加藤能登守 明実

一銃隊　百四拾九人
一近習　六人

一手廻　拾人

○西大路市橋下総守長義

一銃隊　四拾八人

一近習　六人

一手廻　拾人

○三日月森対馬守俊滋

一銃隊　六拾二人

一近習　六人

一手廻　八人

○栢原織田出雲守信親

一銃隊　五拾一人

一近習　拾人

一歩行士　拾人

此外諸藩ハ記ヲ欠ケリ、拠ル処ナシ、

一一五　但馬生野銀山分捕金弐万両ヲ納付ス

明治元年二月廿二日、但馬生野銀山分捕金弐万両ヲ納付ス、

旧邦秘録

一金弐万両

右は但馬国生野銀山分捕金之由ニて、弊邸江差送、其段過日御届申上候処、右は会計方江可差出旨、被仰渡候付、今日上納仕候、宜御取計可被下候、以上、

二月廿二日　　永山左内

薩摩少将内

証

一金弐万両　但箱数拾箇

右書面之通被納之、正請取申処、依如件、

会計事務局

慶應四年辰二月廿二日役所

薩摩少将家来　　永山左内

（記）藩記ヲ載ス、

右辰二月廿二日、二條城太政官代会計掛非蔵人鴨脚加賀江面会、演説之上差出候処、会計裁判役所ニて可相請取申聞候付、右御役所へ為持越候処、木村東市祐立合相請取、証書被相渡、尤御留守居附役勤永山左内相勤候趣、翌廿三日内田仲之助より伊勢殿江之首尾書有之、

一一六　藩長崎守衛士ニ弔慰金ヲ下与ス

明治元年二月廿二日、藩長崎守衛士ニ弔慰金ヲ下与ス、

金三拾両

足軽亡

川畑半助

右ハ長崎ヘ相詰居、先月十四日、長崎奉行引払候処、同夜市中騒立、土州其外諸藩西役所ヘ屯集、御邸ヨリモ見聞役出役之処、引取遅刻相成、変動相生候儀ト存、同所ヘ駈付候折柄、兼テ奉行警衛トシテ相詰居候遊撃隊、同所引払央ニテ、土州海援隊ヨリ右半助ヲ遊撃隊ト見誤、玄喚前ニテ砲撃ニ逢致即死、相手之者土州關勇之助ニテ、致切腹候間、其段親類共ヘ可申聞置候、右付テハ兼テ心掛宜、奇特成者候付、右之通為取之候条、此旨御兵具奉行ヘ申渡、御臨時金之内ヨリ銭ニテ可相渡候、

二月　　龍衛

(記)　藩記ヲ載ス、

辰二月廿二日、御本文之通御兵具奉行江申渡、左候テ御臨時計ヲ以銭ニテ相渡候、

取次

相良角兵衛

一一七　古金銀ヲ地下相場ニテ通用サセラル

明治元年二月二十三日、古金銀ヲ以テ姑ク地下相場ニテ通用セシメラル、

旧邦秘録

古金銀是迄通用令停止候処、　御一新之御場合未御手も不被為届、追ては被　仰出方も可有之候得共、当分地下相場を以、無差支可致通用候、尤御新政之折柄、万一心得違いたし、窃ニ積置候もの等於有之は、厳重之御沙汰可有之候、此旨末々迄不洩様可申触者也、

二月

一一八　苞苴私謁ヲ戒飭セラル

明治元年二月二十三日、苞苴私謁ヲ戒飭セラル、

旧邦秘録

一苞苴私謁之儀ハ、古賢ノ誡メ有之、誰彼モ所知ニ候得共、弊政御一洗之今日、従前之積風ヲ襲ヒ、賄賂ヲ以テ役人ヘ及嘱託候輩於有之ハ、固不可就事ニ候、自然右様之儀被行候テハ、自分依姑贔屓之取計ニモ及ヒ、無党公平之御政道ヲ破ニモ立至リ可申大事ニ候間、以来金幣ハ勿論、瑣屑之音物タリトモ堅可為停止、万一不奉法令、密々ニ餽受候者有之、其儀相知候ハヽ、双方共屹度可及御沙汰候事、

右之通被　仰出候、仍テ早々申入候、御廻覧可返給候也、

二月廿三日

東山道先鋒総督之参謀被仰付候事、

二月廿三日

但兼て岩倉殿内宇多栗園（淵）、土州乾泰輔（板垣退助）江参謀被　仰付有之候間、可相心得事、

一二九ノ二
一御書付一通（廿二日参着）

但

古金銀是迄通用令停止候処、御一新之御場合云々之儀、

会計局
御用掛
木村東市正

一二九ノ三
一御書附二通

内一通

高松頼聡入京被免候之儀、

（参考）

入京被　　高松頼聡

一一九　藩士伊地知正治東山道先鋒総督参謀ヲ命セラル

明治元年二月二十三日、藩士伊地知正治東山道先鋒総督参謀ヲ命セラル、

一一九ノ一

薩州
伊地知正治

免、於旅宿慎被
仰付候、

本庄彈正忠

入京被
免候、
右為心得相達候事、

二月廿二日

一通

諸藩上京旅中ニて、大総督御鎮撫使云々之儀、

(参考)

諸藩上京旅中ニて、大総督御鎮撫使其外御附属之御方々様江、於途中御出会申上節心得方之事、
右御休泊之宿駅通行之節心得方之事、
官軍御固場通行之節心得方之事、
右三ケ条窺出候、
大総督鎮撫使其外、於途中ニ出会之節、不取敢天機相伺、尚御休泊之宿駅官軍御固場通行等之節、是又相伺御差図を受通行可致候事、

一二九ノ四
一御書附一冊

但総裁有栖川帥宮様始三職人名等之儀、

弁事局
御用掛

松尾伯耆

(参考)

総裁

有栖川帥宮

副総裁

三條大納言
岩倉右兵衛督

右官員録ハ以下之ヲ略ス、

一二九ノ五
一御書附一通

但伊地知正治東山道先鋒総督之参謀被
仰付候儀、

軍防局
御用掛

松室豊後

右ハ御用之儀有之候間、今廿三日太政官代江罷出候様
右局々ヨリ相達候ニ付、御留守居附役隈元敬一郎被差

出候処、右御用掛ヨリ御別紙被相渡候ニ付、可申上旨申述置、罷帰候段申出候間、相添此段申上候、以上、

辰二月廿三日　　内田仲之助

伊勢様

追テ伊地知正治参謀被仰付候御書附之儀ハ、同人出先江早々相達候儀、其外御書附之儀ハ、触下江可致廻達旨相達候付、毎之通私共写ヲ以致廻達置候、此段モ申上候、以上、

（慶明雑録・島津忠義家記三にて校訂）

一二〇　言路洞開ノ為メ京師ニ理匭ヲ設置ス

明治元年二月二十四日、始テ理匭ヲ京師ニ置キ、言路ヲ洞開セラル、

復古記

掲示文

今般

御大政御一新ニ付テハ、下々之情実巨細ニ被聞食度候条、気ツキ筋有之者ハ、不憚忌諱書面ニシタヽメ、姓名ヲシルシ、此箱ヘ入置ヘキ者也、

慶應四年二月　　太政官

一二一　諸家ノ皁隷ノ祭賽演劇等ノ地ニ至リ横暴ノ行ヲ為スヲ禁ス

明治元年二月二十四日

復古記

当地所々芝居辻打其外見セ物等ヘ、帯刀人又ハ仲間体之者無銭ニテ立入、且寺社祭礼・法会等群集之場所ニ於テ、カサツ法外之儀共有之趣相聞、不埒之至ニ候、今般御一新之折柄、右様不法之儀有之間敷候得共、自然心得違之者有之候ハヽ、召捕候筈ニ付、其分可相心得候事、

二月

毛利元徳家記

一二二　島津隼人・町田民部ヲ藩老ニ準セシム

明治元年二月二十四日、藩島津隼人・町田民部ヲ藩老ニ準ゼシム、

旧邦秘録

島津隼人〔久光〕
町田民部〔久成〕

右当御役ニテ御家老座へ出席、若年寄方御用承候様被仰出候、

右之通向々へ可申渡候、

辰二月二十四日

一二三　江戸表ヨリ帰崎ノ福島新十郎申立候手続書

旧邦秘録

二月二十四日

福島新十郎、江戸表より当二月廿二日帰崎仕、申立候手続書

一当正月九日、亜米利加ベノカミ江乗組、当港出帆仕候処、播磨灘ニて船火事有之候得共、乗組人数は勿論、一切機械共無事ニて、同十四日兵庫港江着船、

一右乗組之内通詞上瀧東三郎家族共、兵庫ニて上陸仕、同十九日未明兵庫港出帆、同廿二日横濱着、翌廿三日品川江乗入、乗組の役々同所ニて、何れも上陸ニ相成申候、

一撒兵隊者不残横濱より致上陸、

一河津伊豆守〔祐邦〕は帰府之上、外国事務総裁被申付候由、

一中臺信太郎は長崎奉行並被申付候由、

一徳川は一応西丸江着座之処、夫より上野江引越、謹慎罷在候趣ニ御座候、江戸中鳴物等も相禁し、都て下々迄謹慎之体ニて、物静ニ御座候、

一歩兵隊は六百人又三百人宛も追々逃去申候由、

一矢田堀〔鴻〕は海軍総督、勝安房〔義邦〕守は陸軍総督と申事ニ御座候、

一海軍は次第ニ盛ニ相成候得共、陸軍之方は日々相衰候由、

一小笠原壹岐〔長行〕守壱人、老中相勤居候由、此後如何可相成哉、外ニ老中職之者は壱人も無之由、風評ニ御座候、

一大名衆は何れも暇ニ相成、帰国と申事ニ御座候、

一横濱江は軍艦七八艘相見得、長崎丸は品川近く滞泊致居申候、同所交易筋之儀は、先是迄之体ニ相見候得共、一体不捌之由、

一近来江戸表江公儀所と申所出来居、民百姓ニ至迄、出て存寄を充分ニ申上候様、御触渡相成候、

一御勅使近々江戸表江御下向有之候と、専ら風聞仕申候、
一仙臺より人数差出候模様相聞不申候、
一当二月十九日夕江戸出帆、当廿二日帰崎仕申候、
右之外相変候儀、承知仕不申候事、
辰二月廿四日
〔慶明雑録二十六にて校訂〕

一二四　親征期日来月五日ト変更ヲ命セラル

明治元年二月二十五日、御親征期来月五日ト命セラル、
二二四ノ一
一御親征
行幸、当月下旬被
仰出候処、来月五日之旨、更被
仰出候事、
一丑半刻無遅参集之事、
二月廿五日　　俊政
薩摩少将殿

二二四ノ二
留守居ヨリ届書ヲ載ス、
御書附一通
但
御親征
行幸、来月五日之旨、更被
仰出候御儀ニ付、
非蔵人　　橋本安藝
右ハ今日御用之儀有之候間、
禁中御仮建江罷出候様、切紙到来罷出候処、右安藝ヲ
以被成御渡候付、可申上旨申述置候、
右之通、今日私共差支、御留守居附役赤井直之進相勤
申候ニ付、御書付相添、此段申上候、以上、
辰二月廿五日　　内田仲之助
伊勢様

【参照】

大久保利通日記

明治元年戊辰二月
廿四日
一太政官出席、
行幸之期限凡来月五日ニ御決定、木戸・廣澤・小生へ
行幸ニ付御用掛被　仰付候、布告草案差上ル、

一二五　親征ノ期ヲ三月五日ト布告シ衆庶ヲ諭サシム

明治元年二月二十六日、再ヒ親征ノ期ヲ布告シ、且衆庶ヲ諭シテ、各其業ニ安シ、危懼ヲ懐クコト勿ラシメラル、

復古記
一二五ノ一
御親征之儀、先達テ当月下旬ト被仰出候処御延引、更来月五日被為遊御出輦、戦地
御巡覧、大坂へ
行幸、西本願寺一応
行在ニ相成、海軍
御点検之上
命ヲ四方ニ降下セラレ、速ニ追討之功ヲ被為聞食、万民塗炭之苦ヲ
御救済之
叡慮ニ被為在候条、一同厚奉体受、邦内一致之衆力ヲ以鞅掌イタシ、可奉安
宸襟候、末々ニ至リ候テモ
御仁恤之
御趣意ヲ奉戴シ、聊心得違無之様
御沙汰候事、
二月
但
行在中東本願寺掛所太政官代ニ被用候事、

非蔵人日記
内国事務局叢書
一二五ノ二
今度
御親征
行幸被
仰出候ニ付テハ、種々浮説等申唱、人心疑惑及動揺候趣、如何之事ニ候、固ヨリ関東平定之上ハ、還幸被為在候儀ニ付、心得違無之様安堵、生業ヲ相励可申事、
二月

非蔵人日記
一二五ノ三
右ハ弁事掛非蔵人松尾伯耆より、辰二月廿七日巳刻可罷出切紙到来、御留守居附役遠武橘二罷出候処、右二

通被相渡、触下江も通達スヘク承知いたし、写を以触下、諸侯方ヘハ通達致し置候趣、内田仲之助より伊勢様江之首尾書有之、

一二六　諸侯ノ立烏帽子・裏附狩衣等着服ヲ許可ス

明治元年二月二十六日、諸侯ニ令シテ立烏帽子・裏附狩衣等ヲ服スルヲ許ス、

諸侯列之輩、自今立烏帽子・裏附狩衣・紫指貫虎皮等、被差免候間、勝手ニ可着用候事、

二月

内国事務局叢書
島津忠義家記

【参照一】

復古記

小河一敏履歴書ニ云、二月廿五日衣服制度取調掛被仰付、又本人手記ニ云、戊辰ノ春出京ノ砌、衣服制度ノ事、両総裁ヘ御直面ニテ申述候処、右取調掛被仰付、相掛ハ井上石見・平田大角・蜷川圖書・山田阿波介其余モ有之候欤、諳記セス、其後追々取調上申候ヘトモ、御采用御施行不相成、己巳之年官制改正之際、右御用掛モ被廃候、但シ取調ノ大略ハ、袍ノ古制ト近制トヲ折衷シテ礼服トシ、狩衣・直垂等ヲ折衷シ、袖ヲ細クシテ通常ノ礼服トシ、羽織・袴ノ袖ト裾トヲ細クシテ、平服トスル等ナリ、

【参照二】

復古記

明治元年二月

福岡孝弟等服制草案

衣服

延喜式ニ、凡衣袖口闊無高下、同作一尺二寸已下、其腋闊ハ一尺四寸、其表衣長纔着地、

今大意此制ニ従ヒ、左ノ如シ、

礼服、闊腋袍（原註、袖口一尺腋闊一尺二寸）　四幅袴

衣製寸尺貴賤分チナク、唯冠並服色綾絹等ヲ以テ、

上下ヲ分ツ、

常服　短掛（原註、騎馬以上鞭裂袖口、腋闊、袍ニ同シ）　割袴

軍服　直垂　小袴（原註、隊長以上）　筒袖　筒袴（原註、兵士兵卒）

筒衣服色、隊中一様タルベシ、

以上表衣、其下襲・汗衫等、亦袖口・腋闊、表衣ニ准

スベシ、

右制相立上ハ、従来ノ狩衣・水干笏並上下肩衣・平袴等廃之、但庶人ハ短掛(原註、平ハヲリ)・平袴タルベシ、

頭髪

堂上ハ総髪・冠髻(原註、童子総角)、諸侯以下帯刀以上ハ総髪・曲髻(原註、童子前髪)、但臨軍者ハ断髻、便ニ従フベシ、庶人帯刀セサル以下ハ曲髻、額髪ヲ除クベシ(原註、童子前髪)

【参照三】

復古記

明治元年十二月

井上長秋案

衣服

礼服

袍(原註、袖口一尺二寸、腋闊一尺四寸、袖ノ長サ手首ヲ限ル、俗ニ云、角袋カイコミ等、之ヲ廃ス、)

服色一位深紫、三位以上浅紫、四位深緋、五位浅緋、六位深緑、無位以下平絹或布、無紋タルベシ、(附箋)無位黄袍但緑黄等無紋、

下襲　単(袍ニ准シ減小之)　表袴、

大口　帯　笏(従前ノ如シ)　冠(従前ノ如シ)

舄(烏皮履)　直垂　引立烏帽子(原註、公卿諸侯兼用之)　麻上下(原註従前ノ製ヲ不変庶人着之)

(附箋)立烏帽子(原註、公卿諸侯兼用之)

一日礼服

闕腋袍(原註、袖口一尺、腋闊一尺二寸)

服色冠舄等如前、其外廃之、

一日礼服

狩衣(名ヲ改ムベシ)

服色等如前、諸侯以上従前ノ製ヲ不変、以下袖口八寸ヨリ一尺二寸迄、腋闊一尺ヨリ一尺四寸迄、袖ノ長サ手首ヲ限ル、

表袴或四幅袴、

小袖(原註、親王一位白綾、以下六位迄白無地、無位以下常服ノママ、)

(附箋)三位已上白綾、四位已下平絹白

立烏帽子

烏皮履

常服

羽織(原註、袖口八寸ヨリ一尺二寸迄、腋闊一尺ヨリ一尺四寸迄、騎馬以上鞭裂)

服色一位深紫、三位以上浅紫、以下禁之、

袴(原註、襠高或四幅好ニ応ス)

左右膝之上菊綴ヲ付、尊卑ヲ分ツ、一位ハ紫、三

位以上紫白、以下紅白、無位ノ者不着之、

平羽織　平袴庶人着之

野袴　半袴原註、俗ニ云、義経袴、士分以上着之

股引　半衣（ハンチン）　裩襠（ハッチ）原註、士分以下兼用之

右二行如従前、旅行等好ニ応シ着用之、或曰廃之、

常服又ハ軍服ヲ以テ旅服ニ兼用スヘシ、

軍服

鎧直垂原註、公卿・諸侯ノ外錦綾ヲ禁ス以下士分迄絹或布ヲ用ユ

陣羽織（ツッーポ）前ニ同シ

筒袖（ダンブクロ）　筒袴原註、隊長以上、肩左右ニ金縫紋、兵士白紋、徒士以下無紋タルベシ

服色隊中一様タルベシ、又国々家々ノ印有ベシ、

守衛番士巡邏ノ士卒、或船中又ハ防火ノ時、軍服・

常服貴賤兼用スベシ、

附　引立烏帽子原註、公卿・諸侯兼用之

以上

一下襲・汗衫・袖口・腋闊等表衣ニ准スベシ、

一右ニ不挙所、従前之服類総テ廃絶ス、

一婦女子ノ服追テ改ムベシ、

頭髪

総髪原註、公卿以下士分迄、

冠髻原註、公卿・諸侯

総角原註、公卿・諸侯ノ童子

前髪原註、地下官人以下ノ童子

曲髻原註、無位以下庶人迄

断髪原註、兵士兵卒簡便ニマカス

【参照四】

復古記

明治元年二月

谷森種松案

續日本後紀所載、従四位下池田朝臣春野伝曰、春野宿老能説故事、或可採容、此十年冬原註、天長十年ノ冬ナリ将有大嘗会事、天皇欲修禊祓幸賀茂河、春野以掃部頭奉鹵簿陣、看諸大夫所着当色其裾曳地、大咲曰、是尋常之装束、非神事之古体、便指自所着為古体之証、其裾離地差高而袴襴露見矣、諸大夫皆驚云、古之儀制中略、後代当効之、春野衣冠古様身長六尺余、稠人之中掲焉而立、会集衆人莫不駐眼皤々、国老如此者今則不見也、

續日本紀曰、和銅元年閏八月丙申制、自今以後、衣標口闊八寸已上一尺已下、随人大小為之、

延喜弾正式曰、衣袖口闊、無問高下、同作一尺二寸已

下、其腋闊者一尺四寸、
拾芥抄曰、衣服寸法、
袍袖口闊、五位已上一尺為限、六位已下八寸、女亦准
此原註、弘格雑、宝、亀六年正月九日
袖闊一尺八寸以下、袴広不及三幅原註、長保元年七月廿五日、官符
衣袖並袴広、同以一尺六寸為限原註、長保三年閏十二月三日符、検非違使申請
所見右之如クニ御座候、何卒右等御折中、当世ニ被
行ヤスク候様、御考定被遊度奉存候、但シ愚存ノ趣
ハアラアラ左ニ申上候、宜ク御取捨可被下候、
一冠　古制ハ、伊勢貞丈ノアラ〳〵弁ヘタルガ如クニ
モ可有之候ヘトモ、今日ニ行ハレカタク候ハムト奉
存候、尤古代ハ羅(クスモノ)ニテ、和カニ(ヤハラ)縫作タルモノニテ、
降雨ニ逢ヘハ、冠ヒシゲテ見苦シカリシ趣、清少納
言之草紙ニ見エ候、古画ドモヲ通考仕候ニ、巾子(コシ)ハ
太ク(フト)低ク、額ハ深ク候様相見エ候、兼好ノツレ〳〵
草ニモ、追々巾子高クナリテ、旧キ冠筥ニ収(イ)リガタ
クナレル故ニ、冠筥ノ縁ヲ継足(タ)シテ、用フル由ミエ
候、五百年ノ前既ニ如此シ、当世ノ巾子高キコト推
テ知ベク候、何卒随分古体ニ叶ヒ候様被為在度候事、
一衣袍ノ裁縫　長大ナルハ後世之弊風ト奉存候、身体
ノ大小ニ合セ、進退ニ便利ヨロシキ様被為在度候、
角袋、カイコミ等ハ尤モ無用之長物タルヘク候、法
隆寺所伝ノ聖徳天子ノ御影像、多武峯ノ藤原鎌足公
ノ御画像、榮山寺之武智麻呂公ノ御像、又ハ小野道
風、能美宿禰ノ画像、サテハ伴大納言ノ画巻ナド、
皆古ヘノ衣服ノ制度ヲ相徴スルニ足リヌベキモノニ
候、又上ニ引出候池田春野朝臣ノ容体、御勘考被為
在度奉存候事、
一表袴　大口当世之体ハ、襠低クナリ候ヘドモ、カツ
〳〵古体存(ノコ)リ候様奉存候、
一烏帽　紗或ハ絹ニテ縫作リ、漆ヌリタルガ本体ト奉
存候、ムカシ九條師輔公御妻室逝去ノ後、手筥ヲ開
見玉ヒシカバ、師輔公之烏帽子ト襪トヲアマタ縫ヒ
テ収置玉ヒシ由、大鏡ニミエ候、
一狩衣　尻長カラズ、袖大ナラザル様ニ被為在度奉存
候、
一指貫　当世之指貫ハ、アマリ長大ニ過キ候様奉存候、
指子ノカタ随分簡便ニ可被為在候、
地下之輩、是迄麻上下着用ノ場合ハ、身分之程々
ニ合セ布衣袴着用古様ニ相叶ヒ可申候、平常ハ羽

織半袴タルヘク候、軍事ニハ直垂、小袴、陣羽織、
或ハ筒袖、羽織等便利ニ任セ可申欤、
一折烏帽子　平絹或ハ布ニテ縫作リ、漆ヌリ、或ハ渋ヒキ候モ便利ヨロシキ候、但シ昼夜蒙リ候テモ、頭ノ悩ミ無キヤウニ和カニスキ候様、作リ候コト肝要タルヘク候、蒙古襲来ノ画巻ナドニ、烏帽子ヨリ髪ノ生際スキテ見エ候体画キ有之候、冠モ古体ハミナソノ様ニ髪際スキ移リテ見エ候体、古画像等ニ分明ニ御座候、
一布衣　身之前後随分短ク候テ便利ナルヘク候、古画ヲ通考仕候ニ、大体膝ヲ過候程ニ相見エ候、袖尤モ短狭ニ有之度候、又身分ノ品等ニヨリ、絹或ハ布ニテ作リ候コト御定有之度奉存候、
一奴袴　裁縫短狭ニ有之度候、就中指子ノ方簡便ニ可有之候、長保三年ノ制ニ、衣ノ袖並袴ノ広サ同以一尺六寸為限ト見エ候御定ニ依リ申度奉存候、
一浅沓　張貫ハ雨湿ニ損シヤスク、木沓ハ拝趨ニ破レヤスク候テ、時ニフレテ失礼ヲモ現スヘク候、烏皮ノ沓ト相見エ候令制ニ基キ候テ、足ニ合ヒ候ホドニ皮ニテ縫作候ハヽ、奔走ニモ雨湿ニモ破損ノ患ヒスクナク、尤モ簡便ニ可有之奉存候、
一平常着用ノ半袴ハ、後紐ヲ広クシテ、腰板ハ廃スベク候、総テ袴ノ襠ハ高クアルベキモノニテ、低キハ柔惰ノ弊風ト奉存候、博ク古画等ヲ見合セテ、袴ノ窄ク襠ノ高カリシ様体ヲ推知スヘキコト、奉存候、
一直垂ハ便利ノ服ニテ、軍服ニハ然ルヘク候ヘドモ、上ヲ着込ニシテ、袴ヲ上ニ着ルモノニ候ヘハ、上ヲ尅スル体相ニ候ヘハ、礼容ニハ不肖ノ服ナリト古人モ申候、鎌倉・足利等執政ノコロ、専ラ直垂流行仕候ハ、即チ二氏上ヲ凌ギテ、権ヲ恣ニシタル相ノ自然トアラハレ候体ニ御座候ヘハ、尤当世ニ御用心可被為在コト、奉存候、

谷森諸陵助

一二七　佛・英・蘭三国公使入京ノ期ヲ布告シ薩藩以下ノ諸藩ニ旅館道路ノ警衛ヲ命ス

明治元年二月二十六日、佛・英・蘭三国公使入京ノ期ヲ布告シ、更ニ加賀・薩摩以下諸藩ニ命シテ、其旅館及ヒ道路ヲ警守セシメラル、

二七ノ一
先達て布令ニ相成候各国之中、佛・英・蘭公使愈来廿七日大坂表発途、水陸通行、同夜伏見表止宿、廿八日上京被
仰出候、右ニ付ては兼て
御沙汰之通、凡て万国公法を以、御交際被　遊候儀ニ付、一同心得違無之様、於藩々も厳重可致取締被
仰出候事、
但途中往来之節、万一彼より不法之所業有之候は、一己相対之儀ハ不致、諸藩警衛之輩江屹度可致尋問候、左候は夫々処置恥辱ニ不相成様、
御公裁可被為在候、尤此方之輩ニ於ては、申迄も無之候得共、今度御交際之初、且内地多難之折柄ニ付、始終之儀能々相心得、卒尓之振舞無之様可致事、

二月

二七ノ二
佛国公使之儀は、来ル廿八日大坂表発途、伏見止宿、廿九日入京被
仰付候ニ付、取締之儀、別紙同様可相心得
御沙汰之事、

〔慶明雑録二十六・島津忠義家記三ヒて校訂〕

二月

二七ノ三
御書附三通
内
一通
諸侯列之輩、自今立烏帽子・裏附云々之儀、
一通
仏国公使之儀ハ、来ル廿八日大坂発途云々之儀、
一通
先達テ布令ニ相成候云々之儀、
一御書附一冊
但
太政官日誌

弁事局
御用掛
松尾伯耆
松室甲斐

右ハ御用之儀有之候間、唯今早々太政官代へ罷出候様相達候ニ付、御留守居附役限元敬一郎罷出候処、右御用掛ヲ以被相渡、早々触下へ致廻達候様相達候付、致

承知候旨申述置、罷帰候段申出候間、相添此段申上候、
以上、
辰二月廿六日　内田仲之助
伊勢様
追テ、写ヲ以毎之通回達仕置候間、此段モ申上候、
以上、

【参照一】　島津忠義家記

大久保利通日記
明治元年戊辰二月
廿五日
一太政官ヘ出席、英・蘭公使就上京、段々御評議有之、
取調被　仰付候、

【参照二】

薩州
来ル廿九日佛蘭西人上京、相國寺滞留所ニ相成候ニ付、
同所警衛并途中警衛共被
仰付候事、
二月
薩州
来ル廿八日佛蘭西公使上京被
仰付、伏見駅止宿ニ付、警衛且
御用取扱被
仰付候、尚委細之儀ハ外国掛リヘ可承合候事、
二月
御書附二通
内
一通、来ル廿八日佛蘭西公使上京付警衛之儀、
一通、来ル廿九日佛蘭西人上京相國寺滞留所ニ
相成候儀、
右ハ今廿六日、軍防局ヨリ御呼出ニ付、罷出候
処、別紙非蔵人ヲ以被相渡候付、可申上旨申述
置候、
右之通、今日御留守居附役隈元敬一郎相勤候間、
相添此段申上候、以上、
辰二月廿六日　内田仲之助
伊勢様
追テ、本文委細之儀ハ、外国掛ヘ可承合旨相見
得申候得共、吉井幸輔ヨリ承合申上候趣ニ御座
候間、別段承合不申候、此段モ申上候、以上、

【参照三】　　島津忠義家記

舊邦秘録

明治元年二月

薩州

来ル廿九日佛蘭西人上京、相國寺滞留所ニ相成候ニ付、同所警衛並途中警衛共被　仰付候事、

二月

右辰二月廿六日軍防局より御呼出ニ付、御留守居附役隈元敬一郎罷出候処、非蔵人を以右二通被相渡候段、内田仲之助より伊勢様江首尾書相添、〔慶明雑録二十六にて校訂〕

【参照四】

復古記

明治元年二月二十五日

二十五日達書二通

肥後

兼テ佛蘭西人警衛被　仰付置候処、今度御都合ニ寄、薩州へ被　仰付候間、為心得申達候事、

内国事務局叢書
細川護久家記

【参照五】

復古記

明治元年二月二十五日

二十五日尾張藩へ達書

英吉利人近日上京ニ付、兼テ被仰付置候通可被相心得候、且又途中警衛之儀モ被仰付、肥後へモ同様被仰付候間、可被申談候事、

二月

徳川義宜家記

【参照六】

復古記

明治元年二月二十五日

二十五日達書

筑前

今般英吉利並和蘭公使上京被　仰付、伏見駅止宿ニ付、警衛且御用取扱被　仰付候、尚委細之儀ハ、外国掛り後藤象次郎旅宿へ可承合候事、

二月

黒田長知家記

案スルニ佛公使騎士ノ護衛アリ、而シテ英・蘭二国見ル所ナシ、其何故ナルヲ知ラス、